

京都府遺跡調査概報

第104冊

1. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡
 - (1) 桑原口遺跡第5次
 - (2) 桑原口遺跡第6次
 - (3) 東禪寺古墳群
2. 池上遺跡第11次
3. 古屋敷遺跡
4. 新堂池古墳群

2 0 0 2

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために3種の刊行物を刊行しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成12・13年度に実施した発掘調査のうち、京都府道路公社、京都府南丹土地改良事務所、京都府土木建築部、緑資源公団の依頼を受けて行った鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡、池上遺跡第11次、古屋敷遺跡、新堂池古墳群に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、宮津市教育委員会、八木町教育委員会、京田辺市教育委員会、園部町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- | | |
|-------------------|-------------|
| 1. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡 | 2. 池上遺跡第11次 |
| 3. 古屋敷遺跡 | 4. 新堂池古墳群 |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡	宮津市喜多小字桑原口 宮津市須津	平12.11.15～12.22 平13.6.5～11.9 平13.5.14～8.3	京都府道路公社	引原茂治 福島孝行 田代 弘
2. 池上遺跡第11次	船井郡八木町池上	平13.10.18～平14.2.8	京都府南丹土地改良事務所	田代 弘
3. 古屋敷遺跡	京田辺市三山木垣内	平13.9.17～12.4	京都府土木建築部	伊野近富 黒坪一樹
4. 新堂池古墳群	船井郡園部町新堂天野	平13.12.10～平14.2.8	緑資源公団	引原茂治

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

本文目次

1. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡-----	1
2. 池上遺跡第11次-----	43
3. 古屋敷遺跡-----	51
4. 新堂池古墳群-----	61

挿図目次

1. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡

(1) 桑原口遺跡第5次

第1図	調査地位置図-----	2
第2図	トレンチ配置図-----	3
第3図	第5次調査トレンチ平面図-----	4
第4図	6トレンチ平面図-----	5
第5図	出土遺物実測図(1)-----	7
第6図	出土遺物実測図(2)-----	8
第7図	出土遺物実測図(3)-----	9
第8図	出土遺物実測図(4)-----	10

(2) 桑原口遺跡第6次

第9図	遺構配置図-----	12
第10図	土層柱状断面図-----	13
第11図	遺構平・断面図(1)-----	14
第12図	遺構平・断面図(2)-----	15
第13図	遺構平・断面図(3)-----	17
第14図	遺構平・断面図(4)-----	19
第15図	遺構平・断面図(5)-----	20
第16図	出土遺物実測図(1)-----	23
第17図	出土遺物実測図(2)-----	25
第18図	出土遺物実測図(3)-----	26
第19図	出土遺物実測図(4)-----	27

第20図	出土遺物実測図(5)-----	28
第21図	出土遺物実測図(6)-----	29
第22図	B地区遺構平・断面図-----	30
第23図	桑原口遺跡調査地点総合図-----	33

(3) 東禅寺古墳群

第24図	東禅寺古墳群地形測量図-----	35
第25図	1号墳墳丘測量図-----	36
第26図	1号墳第1主体部実測図-----	37
第27図	1号墳第2主体部実測図-----	37
第28図	1号墳遺物出土位置図-----	37
第29図	1号墳第1主体部木棺痕跡実測図-----	37
第30図	3・4号墳墳丘測量図-----	38
第31図	3号墳遺物出土状況図-----	38
第32図	3号墳主体部実測図-----	38
第33図	5号墳墳丘測量図-----	39
第34図	5号墳主体部実測図-----	39
第35図	出土遺物実測図(1)-----	40
第36図	出土遺物実測図(2)-----	40

2. 池上遺跡第11次

第37図	調査地および周辺遺跡分布図-----	43
第38図	トレンチ配置図-----	44
第39図	A地区各トレンチ遺構検出状況-----	45
第40図	S H02・方形周溝墓01実測図-----	46
第41図	方形周溝墓01遺物出土状況実測図-----	46
第42図	S K36実測図-----	47
第43図	S K11実測図-----	47
第44図	S K12実測図-----	47
第45図	S H06実測図-----	48
第46図	S H08実測図-----	48
第47図	S H01実測図-----	49
第48図	S H65実測図-----	49
第49図	A地区調査風景-----	50

3. 古屋敷遺跡

第50図	調査地位置図-----	51
第51図	調査区配置図-----	52

第52図	南壁・西壁・試掘グリッド南壁土層断面図-----	53
第53図	検出遺構配置図-----	54
第54図	集積遺構 S X 03 平・断面図-----	54
第55図	溝 S D 05・S K 02・井戸 S E 01 実測図-----	55
第56図	井戸 S E 01 平・断面図-----	56
第57図	土層断面図-----	57
第58図	出土遺物実測図(1)-----	58
第59図	出土遺物実測図(2)-----	59

4. 新堂池古墳群

第60図	調査地および周辺遺跡分布図-----	62
第61図	古墳群分布図-----	64
第62図	調査地地形図-----	65
第63図	トレンチ位置図-----	67

図 版 目 次

1. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡

(1) 桑原口遺跡第5次

図版第 1	(1) 調査前全景(北から)	(2) 2 トレンチ(南から)
	(3) 2 トレンチ S D 207(南西から)	(4) 3 トレンチ(南から)
図版第 2	(1) 3・4 トレンチ(北から)	(2) 4 トレンチ(北西から)
	(3) 5・6 トレンチ(北東から)	(4) 6 トレンチ S D 601・602(東から)

図版第 3 出土遺物

(2) 桑原口遺跡第6次

図版第 4	(1) 調査地遠景(南から)	(2) 調査地遠景(北から)
図版第 5	(1) A 地区全景(上が東)	(2) B 地区全景(上が東)
図版第 6	(1) A 地区 S X 02 遺物出土状況(北から)	(2) A 地区 S X 02 遺物出土状況(南から)
	(3) A 地区 S X 02 土層断面(南から)	
図版第 7	(1) A 地区 S H 01 完掘状況(東から)	(2) A 地区 N R 04 遺物出土状況(西から)
	(3) A 地区 N R 04 遺物出土状況(南から)	
図版第 8	(1) A 地区 S K 38 完掘状況(東から)	(2) A 地区 S K 39 遺物出土状況(東から)
	(3) A 地区 S K 42 完掘状況(南から)	
図版第 9	(1) A 地区 S B 01・02 完掘状況(北から)	(2) A 地区 S B 03 完掘状況(東から)

- (3) A 地区 S B 04 完掘状況 (東から)
- 図版第10 (1) B 地区東拡張区完掘状況 (北から) (2) B 地区全景 (東から)
(3) A 地区 S D 19 完掘状況 (北から)
- 図版第11 (1) B 地区東拡張区完掘状況 (北西から) (2) B 地区西拡張区完掘状況 (北から)
(3) B 地区 P 06 土層断面 (南から)
- 図版第12 出土遺物

(3) 東禅寺古墳群

- 図版第13 (1) 古墳群遠景 (北西から) (2) 1 号墳近景 (北西から)
(3) 調査地全景 (東から)
- 図版第14 (1) 調査地全景 (北西から) (2) 1 号墳主体部全景 (上が南東)
(3) 1 号墳主体部検出状況 (東から)
- 図版第15 (1) 1 号墳主体部検出状況 (南東から)
(2) 1 号墳第 1・2 号主体部埋土の状況 (北東から)
(3) 1 号墳第 1 号主体部木棺痕跡検出状況 (南西から)
- 図版第16 (1) 1 号墳第 3 号主体部埋土の状況 (南西から)
(2) 1 号墳第 3 号主体部埋土の状況 (南東から)
(3) 1 号墳第 3 号主体部棺痕跡掘削状況 (東から)
- 図版第17 (1) 3 号墳全景 (南東から) (2) 3 号墳主体部検出状況 (北西から)
(3) 3 号墳主体部全景 (北西から)
- 図版第18 (1) 5 号墳全景 (南西から) (2) 5 号墳全景 (上が北)
(3) 5 号墳主体部全景 (東から)
- 図版第19 (1) 1 号墳第 3 号主体部鏡出土状況
(2) 1 号墳第 1 号主体部鉄鏃出土状況 (上が南西)
(3) 3 号墳主体部遺物出土状況 (南西から)
- 図版第20 (1) 作業遠景 (1) (2) 作業遠景 (2)
(3) 作業風景 (3)
- 図版第21 (1) 現地説明会風景 (1) (2) 現地説明会風景 (2)
(3) 現地説明会風景 (3)
- 図版第22 出土遺物

2. 池上遺跡第11次

- 図版第23 (1) 池上遺跡全景 (東から) (2) 調査地全景 (北から)
(3) 調査地全景 (上が西)
- 図版第24 (1) A 地区重機掘削風景 (西から) (2) A 地区遺構検出状況 (北から)
(3) A 地区発掘調査作業風景 (北から)
- 図版第25 (1) 方形周溝墓01検出状況 (北から)

- (2) 方形周溝墓01弥生土器検出状況(南から)
 (3) 方形周溝墓01検出状況・部分(南から)
- 図版第26 (1) S H02検出状況(北から) (2) S H01検出状況(西から)
 (3) S H01竈検出状況(東から)
- 図版第27 (1) S H46検出状況(西から) (2) S H06検出状況(北西から)
 (3) S H04検出状況(南から)
- 図版第28 (1) S K36検出状況(南東から) (2) S X44・45検出状況(東から)
 (3) A-2 トレンチピット検出状況(南から)

3. 古屋敷遺跡

- 図版第29 (1) 調査前風景(東から) (2) 重機掘削風景(東から)
 (3) 重機掘削中(東から)
- 図版第30 (1) 調査区完掘状況(西から) (2) 調査区完掘状況(東から)
 (3) 調査区東半部(西から)
- 図版第31 (1) 溝 S D05(北東から) (2) 溝 S D05完掘状況(北東から)
 (2) 溝 S D05と井戸 S E01(北東から) (4) 溝 S D01・02(西から)
- 図版第32 (1) 溝 S D05(南西から) (2) 溝 S D05内土器(南東から)
 (3) 溝 S D05断ち割り断面(南西から) (4) 溝 S D05北西断ち割り断面(南から)
- 図版第33 (1) 井戸 S E01(北東から) (2) 井戸 S E01底(北東から)
 (3) 集石遺構 S X03(北から) (4) 集石遺構 S X03下位(東から)
- 図版第34 (1) 土坑 S X04(西から) (2) 旧河川跡 S R01縦断面(南西から)
 (3) 杭列検出状況(北西から) (4) 旧河川跡 S R01横断面(北から)
- 図版第35 (1) 出土遺物(1)
- 図版第36 (1) 出土遺物(2) (2) 調査地北側、飯岡丘陵を望む(南から)

4. 新堂池古墳群

- 図版第37 (1) 1号墳調査前全景(北西から) (2) 1号墳羨道部検出状況(南東から)
 (3) 1号墳奥壁部検出状況(東から) (4) 1号墳周溝検出状況(南東から)
- 図版第38 (1) 2号墳調査前全景(東から) (2) 2号墳主体部検出状況(南東から)
 (3) B トレンチ 2号墳周溝検出状況(北東から)
 (4) 3号墳調査前全景(西から)
- 図版第39 (1) 3号墳主体部検出状況(北西から) (2) 3号墳西側溝検出状況(南西から)
 (3) 6号墳調査前全景(北西から) (4) 6号墳主体部検出状況(北西から)
- 図版第40 (1) 6号墳遺物出土状況(北西から) (2) 6号墳周溝検出状況(北東から)
 (3) A トレンチ全景(東から) (4) B トレンチ全景(西から)

1. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡 平成12・13年度発掘調査概要

はじめに

この概要報告は、平成12年度の桑原口遺跡第5次調査と平成13年度の桑原口遺跡第6次調査および東禅寺古墳群調査についてのものである。

これらの調査は、鳥取豊岡宮津自動車道建設事業に伴うもので、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。桑原口遺跡は宮津市喜多小字桑原口に所在する。第5次調査は上記道路の側道部分、桑原口遺跡第6次調査は本線部分の調査である。東禅寺古墳群は宮津市須津に所在する。この古墳群の調査は、上記道路の取付道路敷設に係わるもので、平成12年度の試掘調査結果(報告済)を受けて実施した。

平成12年度の調査は当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、同主任調査員引原茂治が、平成13年度の調査は調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、同主任調査員戸原和人・田代弘、同調査員福島孝行が担当した。調査に係る経費は、京都府道路公社が全額負担した。

調査にあたっては、京都府道路公社、京都府教育委員会、宮津市教育委員会、地元自治会などから御協力いただいた。現地調査においては、地元有志の方々、学生諸氏などに参加していただいた。あわせて感謝したい。^(注1)

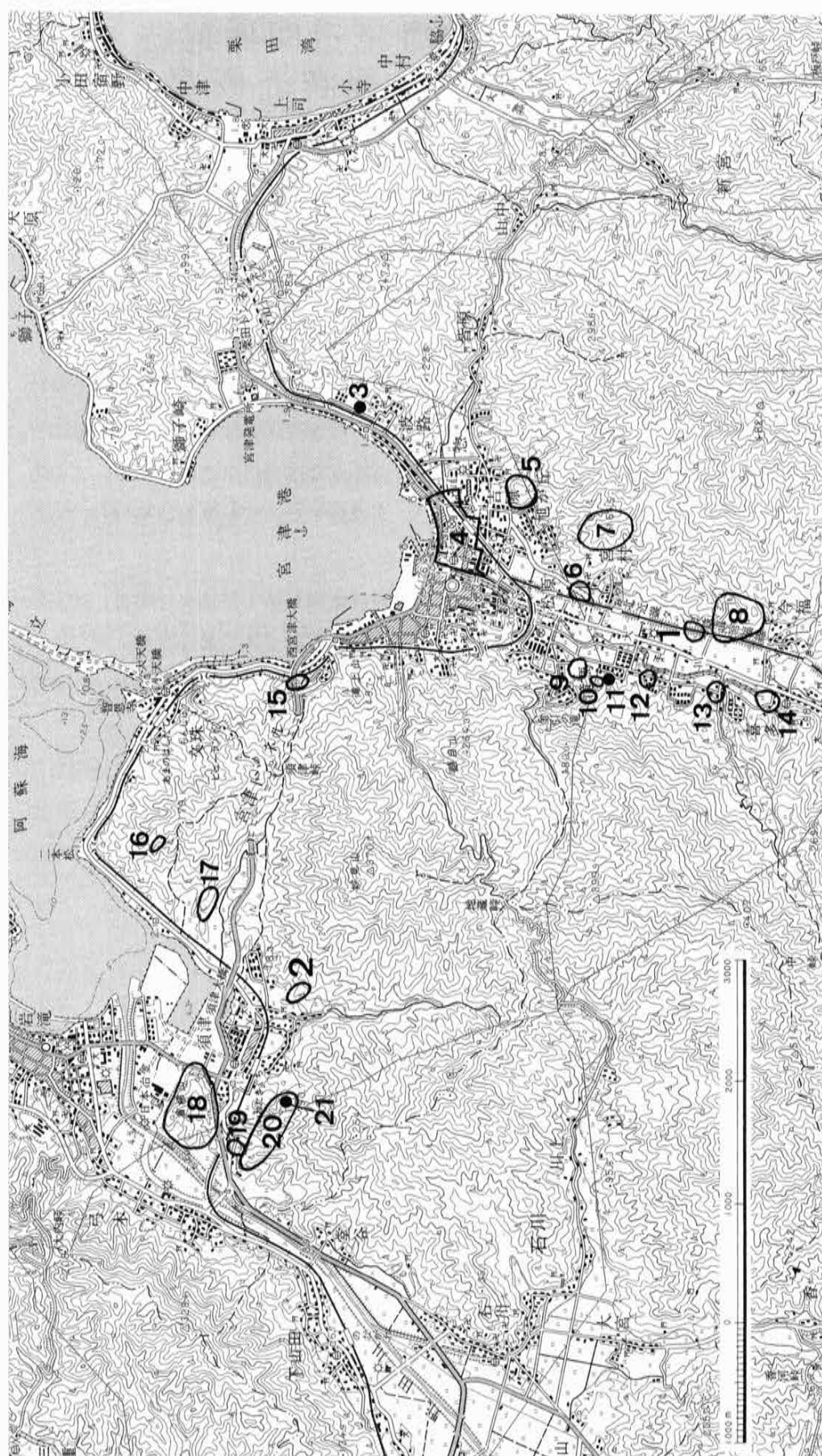
(1) ^{くわはらぐち}桑原口遺跡第5次

1. はじめに

宮津市域南部には、大江山塊から流れ出した大手川によって形成された、宮津谷と呼ばれる沖積地がある。大手川は、宮津谷の中央を北流し宮津湾に注ぐ。桑原口遺跡は、宮津谷ほぼ中央部の大手川東岸、河口から約2km南側に位置する。

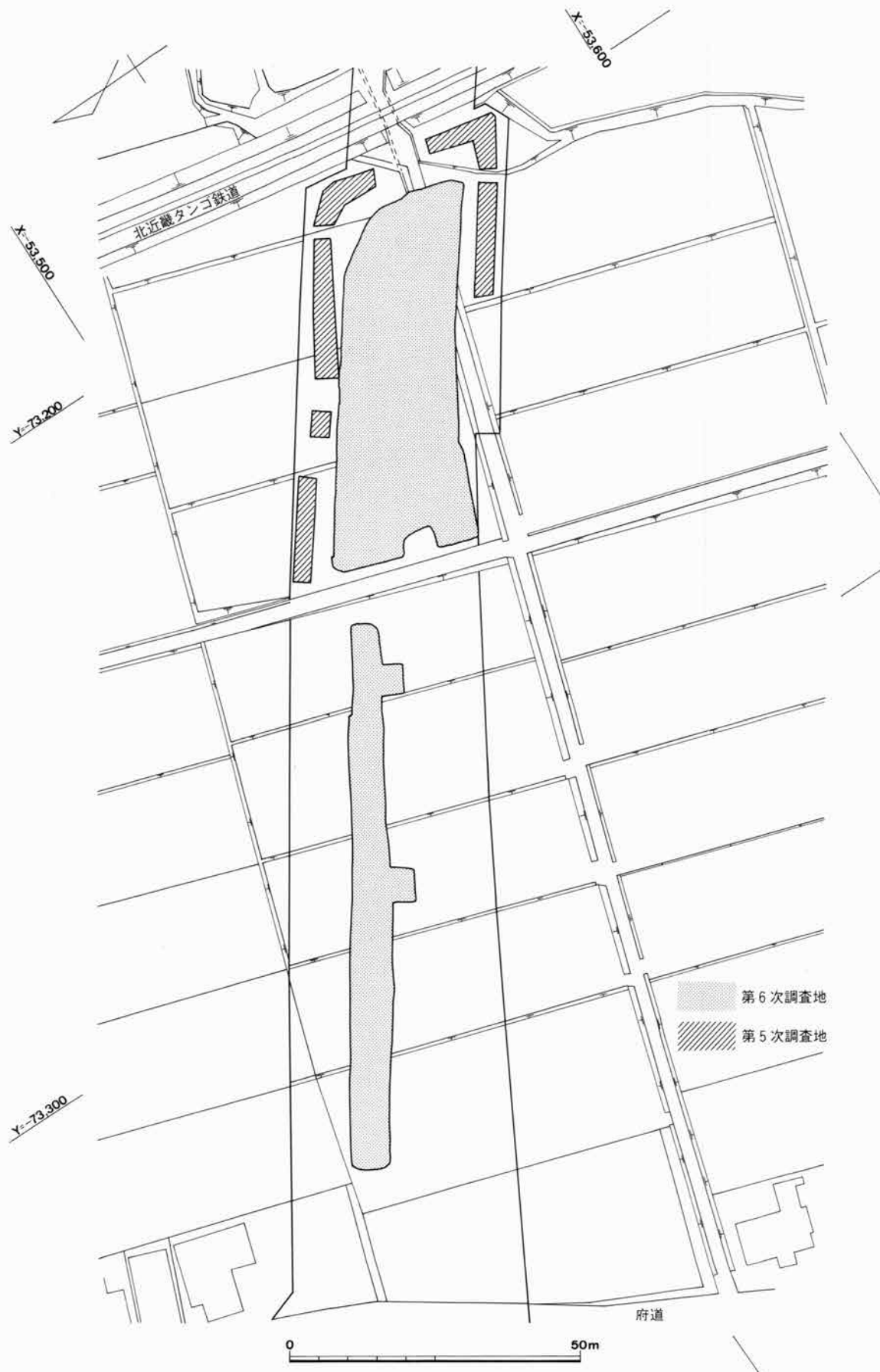
調査地は、北近畿タンゴ鉄道の軌道の西側に隣接する地点で、喜多駅と宮村駅のほぼ中間に位置する。今回の調査は、建設予定地内の遺構、遺物の残存状況や広がりを確認することを目的として、自動車道の側道予定地部分に6か所のトレンチを設定して実施した。調査面積は約300m²で、調査期間は平成12年11月15日～12月22日である。

2. 調査内容

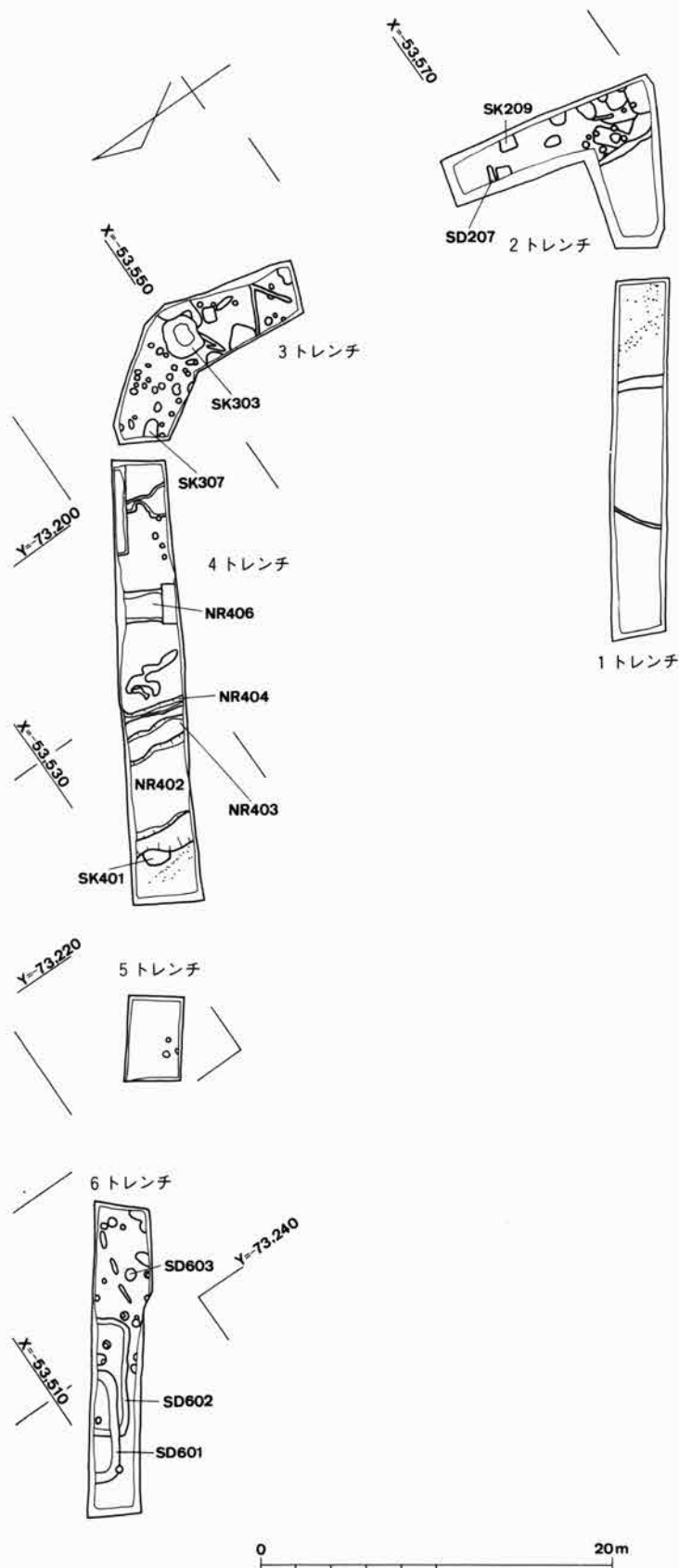


第1図 調査地位置図(1/50,000)

1. 桑原口遺跡(調査地) 2. 東禅寺古墳群(調査地) 3. 波路古墳 4. 宮津城跡 5. 惣村城跡 6. 宮村遺跡 7. 八幡山城跡 8. 今福古墳群 9. 滝馬A遺跡
10. 滝馬B遺跡 11. 滝馬古墳 12. 福田遺跡 13. 薬師遺跡 14. 喜多遺跡 15. 杉末遺跡 16. 岩尾古墳群 17. 八幡古墳群 18. 倉梯山古墳群 19. 柿ノ木古墳群
20. シリガイ古墳群 21. エノク経塚群



第2図 トレンチ配置図



第3図 第5次調査トレンチ平面図

(1)検出遺構

今回の調査では、ほとんどのトレンチで溝状遺構、杭列、土坑、柱穴などの遺構を検出したが、調査範囲が限られているため、その性格を明確にしがたいものが多い。遺物も多量に出土したが、そのほとんどが弥生時代後期から古墳時代初期頃にかけての土器である。他の時期の遺物はごくわずかである。

①1トレンチ このトレンチでは、顕著な遺構は無く、溝状遺構や杭列を検出したのみである。遺物もほとんど出土していない。トレンチ西側では、低地部分に盛土を行って水田を拡張していることを確認した。

②2トレンチ 今回の調査地の中では、最も高い部分にあたる。遺構面は、1トレンチの位置する西側、および、3トレンチの位置する北側に向かって傾斜する。このトレンチからは、溝、土坑、ピットなどを検出した。

溝SD207 トレンチ北側で検出した東西方向の溝状遺構である。幅約0.4m、深さ約0.2m、検出長約1.1mを測る。溝内西側から完形の有孔鉢(第5図23)が横転した状態で出土した。

土坑 S K 209 トレンチ北側で検出した方形土坑で、幅約0.9m、深さ約0.3mを測る。調査地外に及んでおり、長さは不明である。

③3 トレンチ このトレンチでは、包含層が比較的良好に残存しており、土器などが多数出土した。検出遺構は、溝、土坑、ピットなどである。比較的密に遺構が分布しているが、性格のわかるものは無く、ピットも建物としてまとまるものは無かった。

土坑 S K 303 トレンチほぼ中央で検出した。約2.3×1.9mの方形土坑である。深さは約0.46mを測る。底部に植物遺体とみられる有機物が堆積していた。

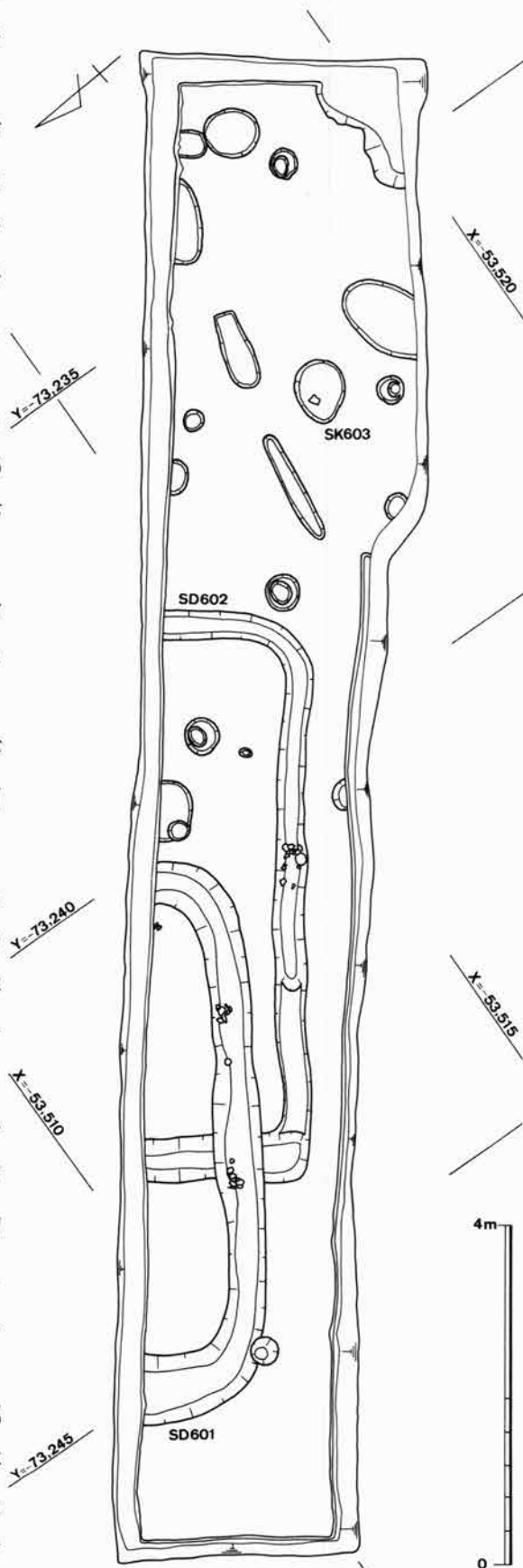
土坑 S K 307 トレンチ西端で検出した。全容は不明であるが、幅約0.76m、深さ約0.2mを測る。土器、敲石などが出土した。

④4 トレンチ 土坑、杭列などを検出したがトレンチ全体がほぼ自然流路状であり、遺構面の残存はわずかである。

土坑 S K 401 トレンチ西端部で検出した。過半を自然流路 N R 402 により削平されたものとみられ、わずかに残存するのみである。残存幅約1.66m、深さ約0.1mを測る。土器、木片などが出土した。

⑤5 トレンチ トレンチ全体が自然流路状であり、その堆積層とみられる砂質土層上からピットを検出したが、その状況から見て、比較的新しいものと考えられる。砂質土内から、蓋とみられる小形の完形土器(第8図107)が出土した。

⑥6 トレンチ 今回の調査地では最も低い部分に位置する。そのため調査前には遺構が残存している可能性が最も少ない地点と考えていたが、結果的には比較的良好に遺構面が残存していた。溝、土坑、ピットなどを検出した。



第4図 6 トレンチ平面図

溝S D 601・602 トレンチ西寄りで検出した「コ」字状にめぐる溝状遺構である。これらの溝は、開発対象地外の北側に延びるため全容は不明である。S D 601は、東西辺長約6.8m、溝幅約0.38m、深さ約0.13mを測る。S D 602は、東西辺長約7.2m、溝幅約0.53m、深さ約0.14mを測る。S D 601がS D 602を切っており、S D 602がS D 601に先行するものと考えられる。これらの溝は、竪穴式住居跡の周囲を囲む溝、もしくは、方形周溝墓の周溝の一部とも考えられる。ただ、その重なり方からみて、住居の周囲を囲む排水溝とみる方が妥当か。

(引原茂治)

(2) 出土遺物

第5次調査においては、多数の遺構からコンテナ20箱の弥生土器が出土した。土器の報告については第3次調査の田代弘による分類を援用し、不足分を追加的に分類した。追加した分類は以下のとおりである。^(注2)

壺A 1を擬凹線文の有無によって、擬凹線文の有るものを壺A 1 a、無い方を壺A 1 bとする。壺Gのうち、二重口縁のものを壺G 1とし、細頸壺をG 2とした。壺Iは直立する頸部から外方へ屈曲する口縁部を持つもの。壺Jは算盤玉形の体部から細長い頸部が立ち上がり、口縁部が外反するもの。

甕B 1を2次口縁部の傾斜の向きで細分する。2次口縁部が内傾するものをB 1 a、直立するものをB 1 b、外傾するものをB 1 cする。

高杯Bの口縁部外面に擬凹線文を施すものをB 1、施さないものをB 2とする。

脚柱部との境界付近に段を持ち、直線的に上外方に伸びる杯部から垂直に口縁部を付し、口縁端部を内面に肥厚するものを高杯Eとする。杯部外面に半環形の把手が付くことがある。

従来の高杯Aの内、極端に杯部の浅いものを高杯Fとする。

直口で平底の鉢を鉢Eとする。

S K 209出土遺物(第5図) 甕A 1 (2)、甕A 2 (1)などが出土した。

S K 213出土遺物(第5図) 壺A 3 (4)、甕B 1 b (5)、甕B 2 (7)、甕E (8)、鉢D (6)などが出土した。

S K 216出土遺物(第5図) 甕A 1 (11)、甕B 1 c (12)、甕B 2、高杯A (15・16)、高杯D (17)、鉢D (9・10)などが出土した。

S D 201出土遺物(第5図) 甕B 1 b (18)などが出土した。

S D 206出土遺物(第5図) 甕E (22)、高杯Aの脚部(20)、器台(21)などが出土した。

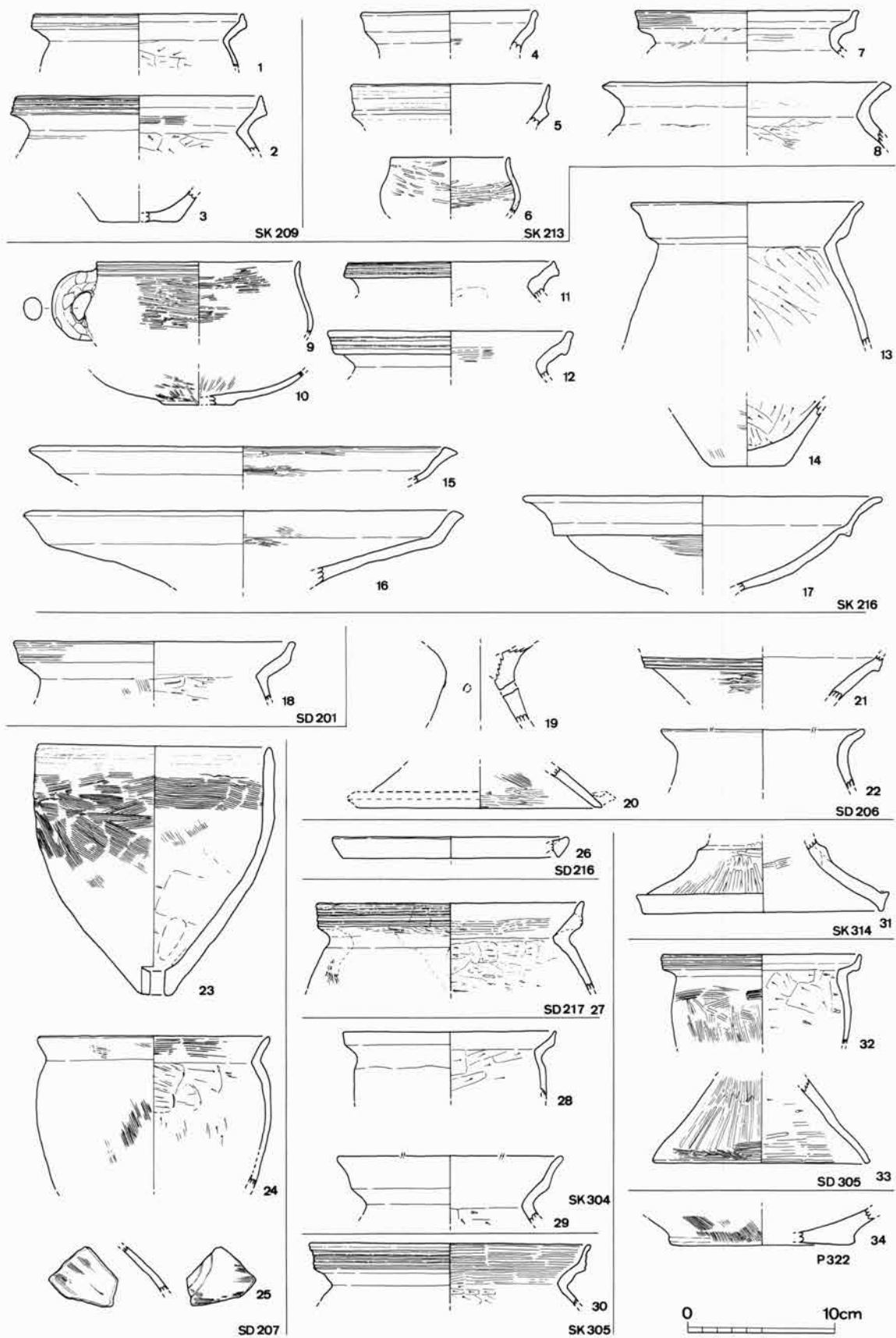
S D 207出土遺物(第5図) 甕E (24)、鉢C (23)、絵画または記号のある土器(25)が出土した。23は完形の有孔鉢である。25には2重の弧線が描かれている。

S D 216出土遺物(第5図) 器台の口縁部と思われる破片(26)が出土した。

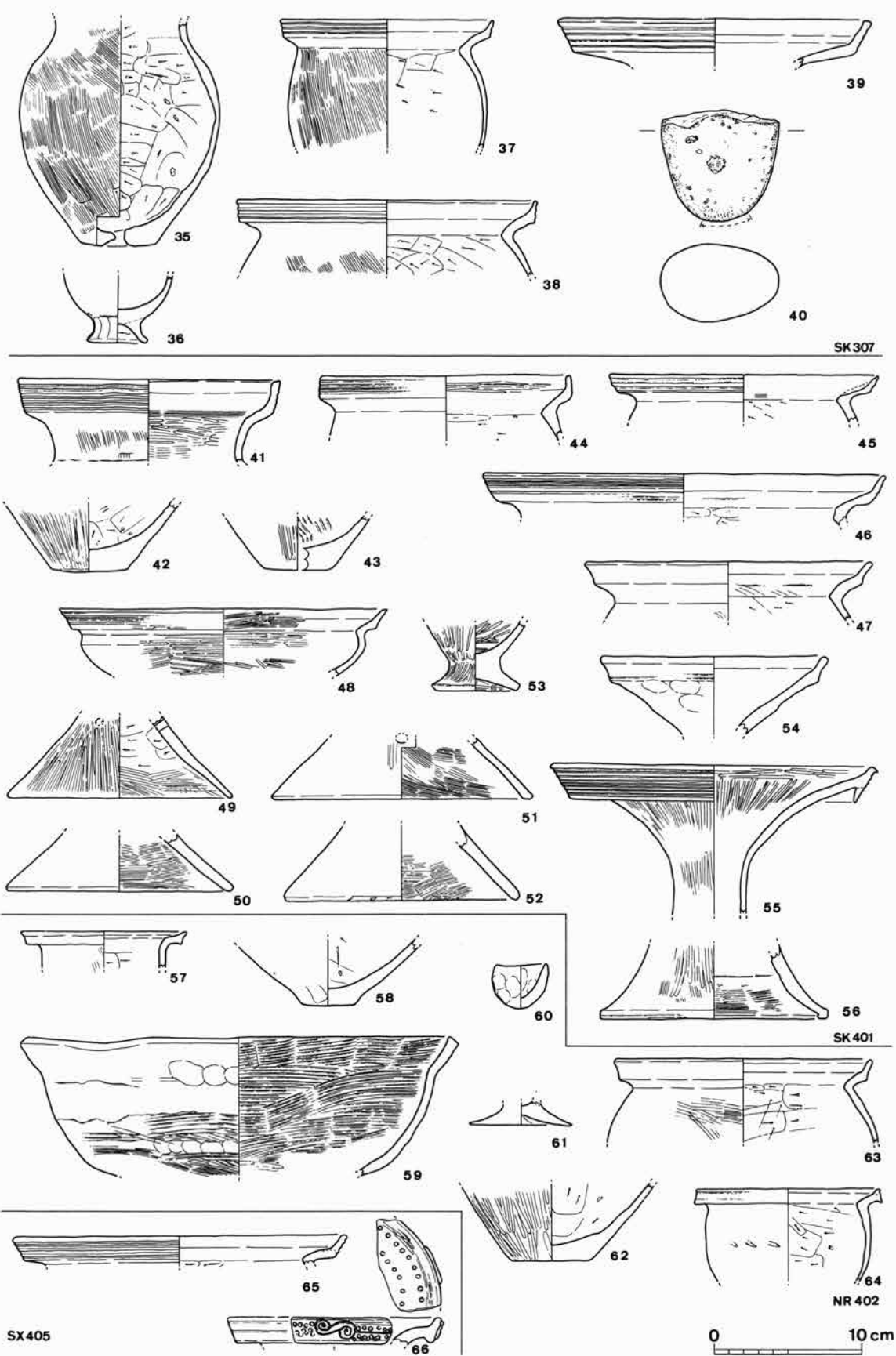
S D 217出土遺物(第5図) 甕B 1 b (27)などが出土した。

S K 304出土遺物(第5図) 甕B 2 (28・29)などが出土した。

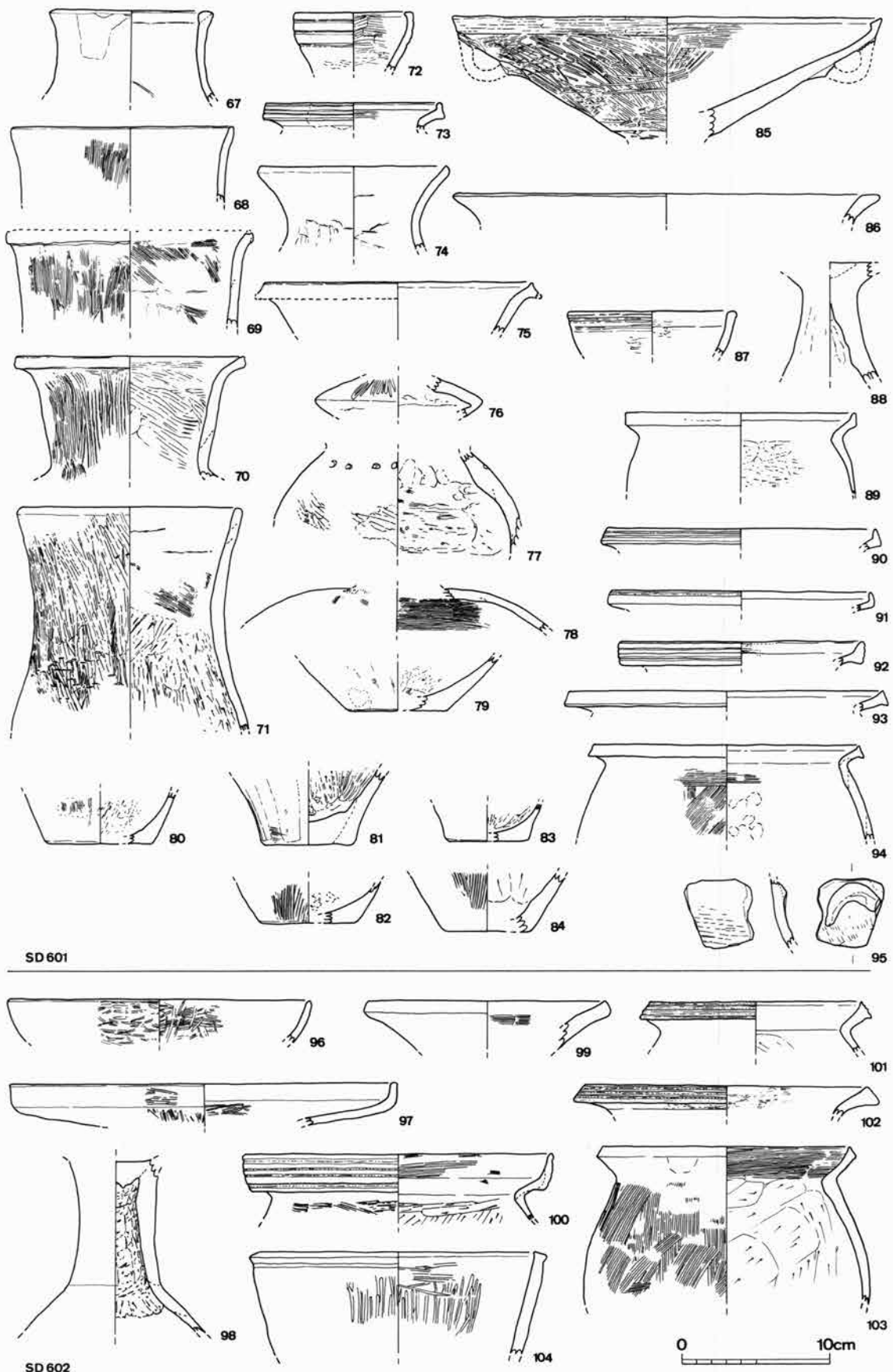
S K 305出土遺物(第5図) 甕B 1 b (30)などが出土した。



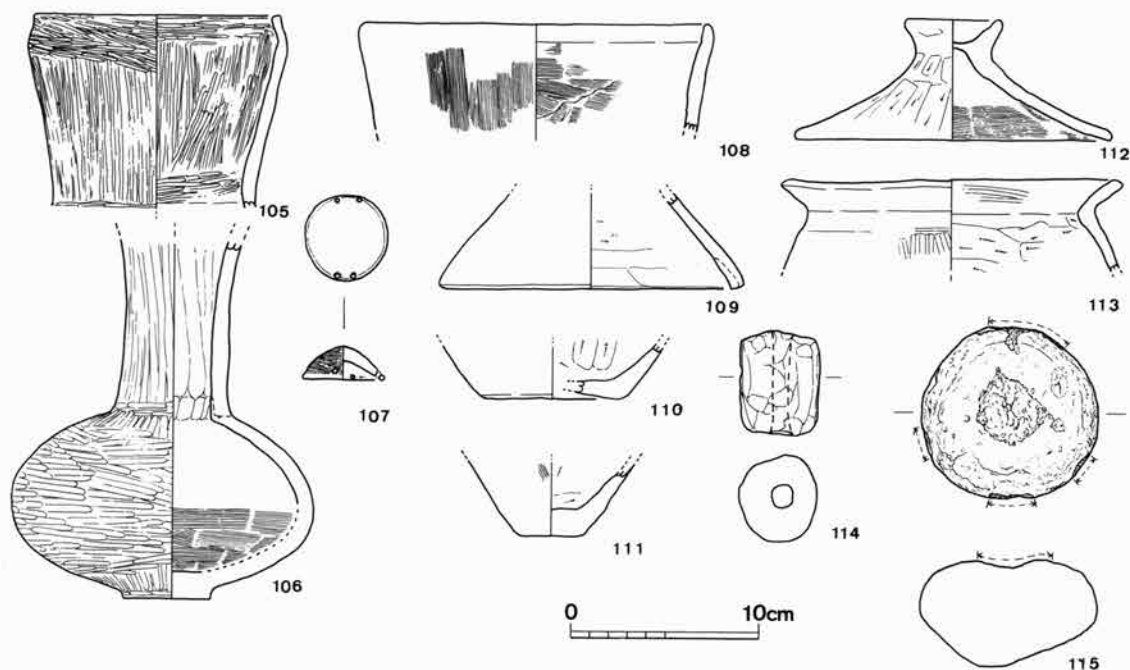
第5図 出土遺物実測図(1)



第6図 出土遺物実測図(2)



第7図 出土遺物実測図(3)



第8図 出土遺物実測図(4) (遺構外)

S K 314出土遺物(第5図) 北陸系の高杯もしくは器台の段を有する脚部(31)などが出土した。

S D 305出土遺物(第5図) この遺構からは甕B 1 b (32)、高杯の脚部(33)などが出土した。

S K 307出土遺物(第6図) 壺(35)、甕B 1 b (37・38)、器台B 1 (39)、敲石(40)などが出土した。

S K 401出土遺物(第6図) 壺A 3 (41)、甕B 1 a (44)、甕B 1 c (45・46)、甕B 2 (47)、高杯B 1 (48)、器台A (56)、器台B 1 (55)、器台B 2 (54)などが出土した。

N R 402出土遺物(第6図) 壺I (57)、甕B 2 (63・64)、鉢A (59)などが出土した。

S X 405出土遺物(第6図) 壺G 1 (66)、甕B 1 c (65)などが出土した。66には口縁端部内外面に竹管文、外面にS字渦文の浮文を貼り付けている。

S D 601出土遺物(第7図) 壺C (73)、壺E (67・69・71・74)、壺H (75)、壺J (76)、壺K (72)、甕A 1 (90・91)、甕A 2 (89・93・94)、甕B 1 b (92)、高杯A (86)、高杯E (85)などが出土している。95は弧状の浮文を貼り付けている。

S D 602出土遺物(第7図) 壺E (99)、甕A 1 (101・102)、甕B 1 c (100)、甕E (103)、高杯F (97)、鉢E (104)などが出土した。

そのほか遺構外からも遺物が出土している(第8図)。

時期のまとまりがある遺構の遺物を見ると、S K 209・S D 601・S D 602が弥生後期前葉、S K 401が弥生後期後葉、S D 207が庄内式併行期後半に位置づけられる。S K 216は、9・11・15・16は後期中葉に位置づけられるが、13・17は庄内式併行期後半に位置づけられる。

(福島孝行)

3. 小 結

調査地は、東側の丘陵裾部から西側に向かって徐々に低くなる地形部分に位置する。今回検出した遺構の多くは、集落跡に関連するものである可能性が高い。今回の調査では、遺構の存在する可能性が低いと考えられていた西側の低い部分に位置する6トレンチでも遺構を検出している。これにより、遺跡の範囲が、従来考えられていたよりも西側に広がる可能性がある。

(引原茂治)

(2) 桑原口遺跡第6次

1. はじめに

調査地は宮津谷の中央部を北流する大手川の右岸に立地し、丘陵裾部から大手川にのびる微高地上に展開する桑原口遺跡に含まれる。桑原口遺跡は昭和44年に国鉄宮守線(当時)の建設に先立つ分布調査で発見され、昨年度まで5次に及ぶ発掘調査が行われた。^(注3)調査によってこの遺跡は弥生時代後期から古墳時代、平安時代後期～鎌倉時代初期、近世の各時代にわたって断続的に利用された集落遺跡であることが判明している。

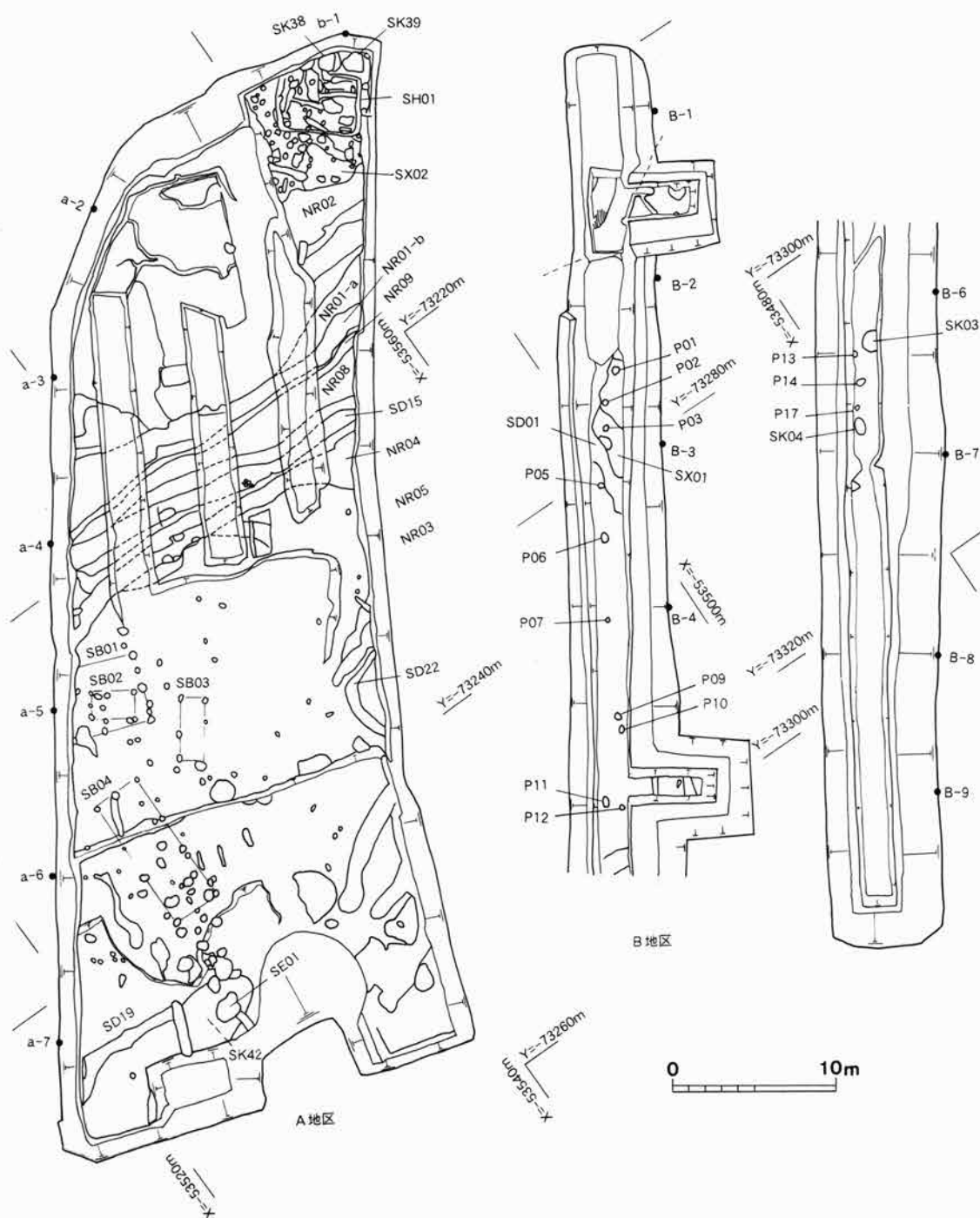
また、周辺の弥生時代の遺跡としては、宮村遺跡で弥生時代中期から後期にかけての土器と管玉の未製品1点などが出土している。

今回の調査は、遺跡範囲内の全面調査区をA地区(1,600m²)、遺跡の隣接地で範囲確認調査の試掘地をB地区(200m²)として実施した。調査期間は平成13年6月5日から同年11月9日までである。

2. 調査内容

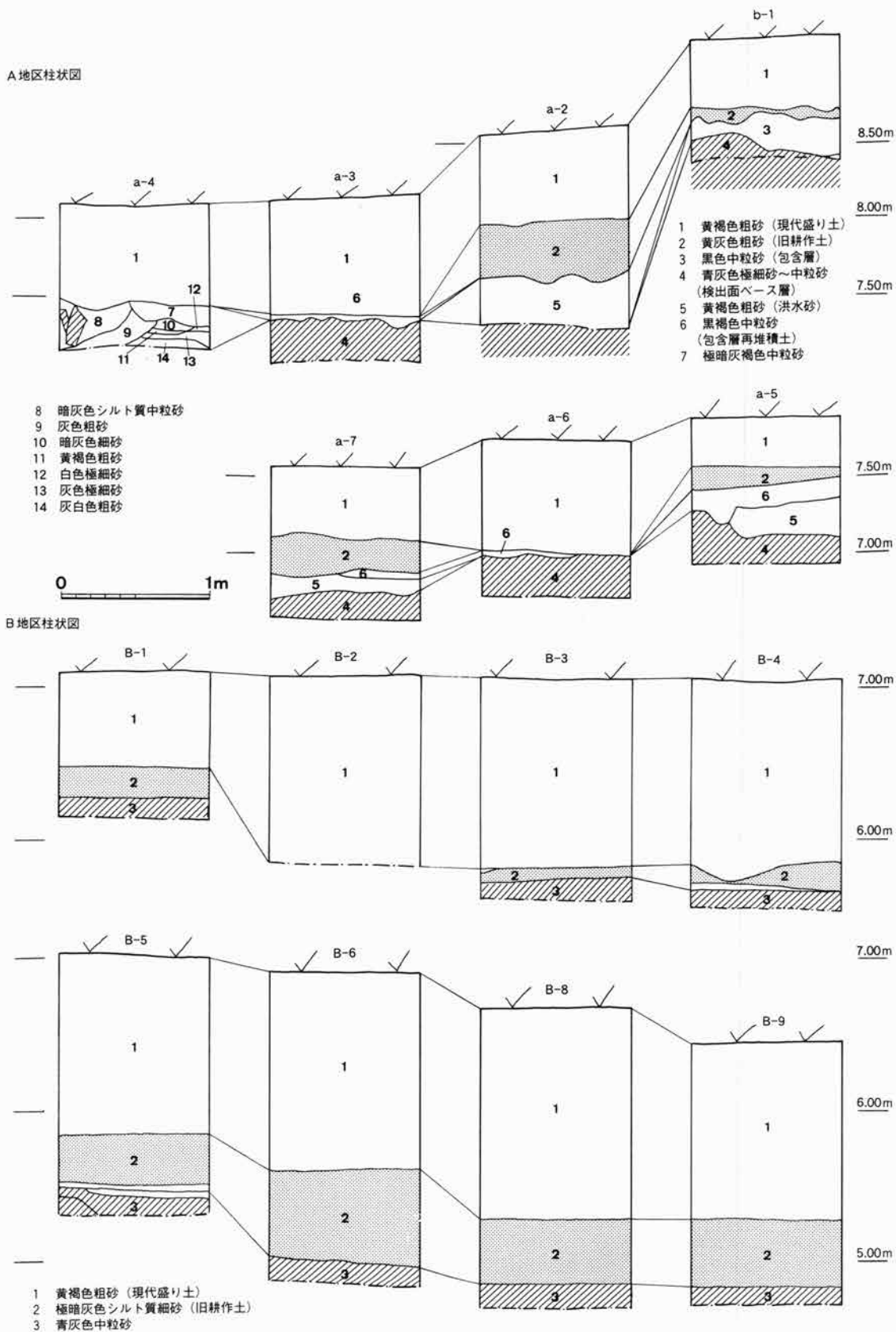
(1) A地区

①基本層序(第10図) A地区の基本層序は第10図のとおり、表土下30～70cmほどの盛土が見られ、この下層に暗灰褐色系のシルト質細砂～中粒砂で構成される厚さ10～40cmの旧耕作土層、その下層の厚さ10cm前後の黒褐色中粒砂の包含層、その下層の灰褐色粗砂の洪水砂層(厚さ30cm)、黒褐色シルト質細砂の包含層(厚さ10～20cm)によって構成され、この下層に遺構検出面である青灰色極細砂層が堆積している。一部断ち割りを行ってこの青灰色極細砂層の下層に更に古い遺構面や包含層が存在しないかを確認したが、黒灰色極細砂層が青灰色極細砂層の下層に厚さ約20cmほどで存在し、その下層は青灰色極細砂層であった。この黒灰色極細砂層は無遺物であり、この下面も黒色土の染み込みは存在するものの、遺構面ではなかった。この黒灰色極細砂層はトレンチの西半部南側に現れており、青灰色極細砂の遺構検出面が激しく削平を受けていることを示している。また、B地区の断ち割りでは、2層目の(深い方の)青灰色極細砂層の下層で、褐色のピート層を検出したが、A地区ではピート層は認められなかった。旧耕作土直下の黒褐色の遺物包

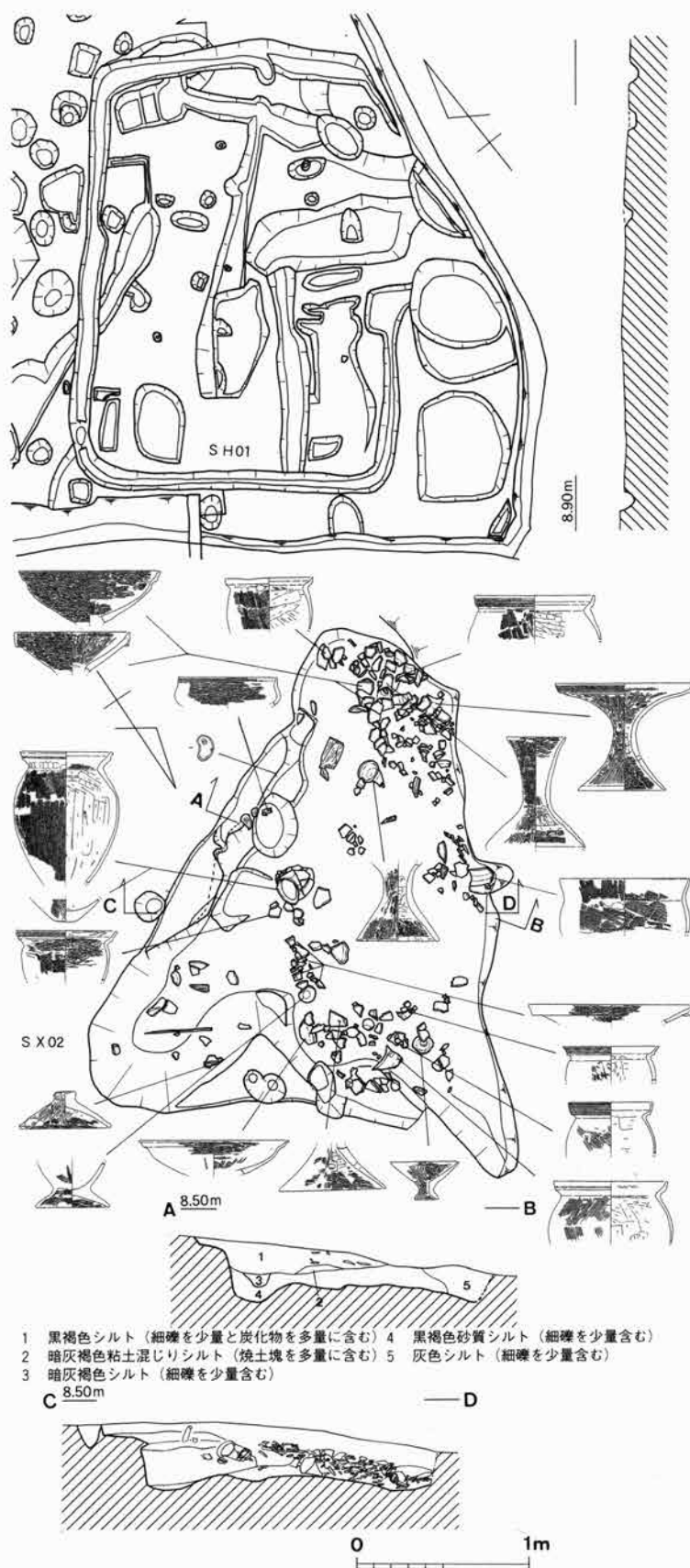


第9図 遺構配置図

含層は下層の遺物包含層の再堆積土である。下層の黒褐色極細砂層と同様の遺物を含むが、新しい時代(平安時代など)の遺物を含んでいる。検出した遺構のうち、トレンチ西半の掘立柱建物跡群と、東西方向の溝は灰褐色粗砂の洪水砂層の上面から掘削されており、洪水砂が古墳時代後期までに流れ始めた流路群に切られ、弥生時代～古墳時代中期の遺構はこの洪水砂を除去しなければ検出できないことから、この洪水は古墳時代後期のものであることが限定できる。したがって、この上面から切り込まれた掘立柱の柱穴は古墳時代後期から平安時代までの間に掘削されたものと考えられる。



第10図 土層断面柱状図



第11図 遺構平・断面図(1) (上段：S H01、下段：S X02)

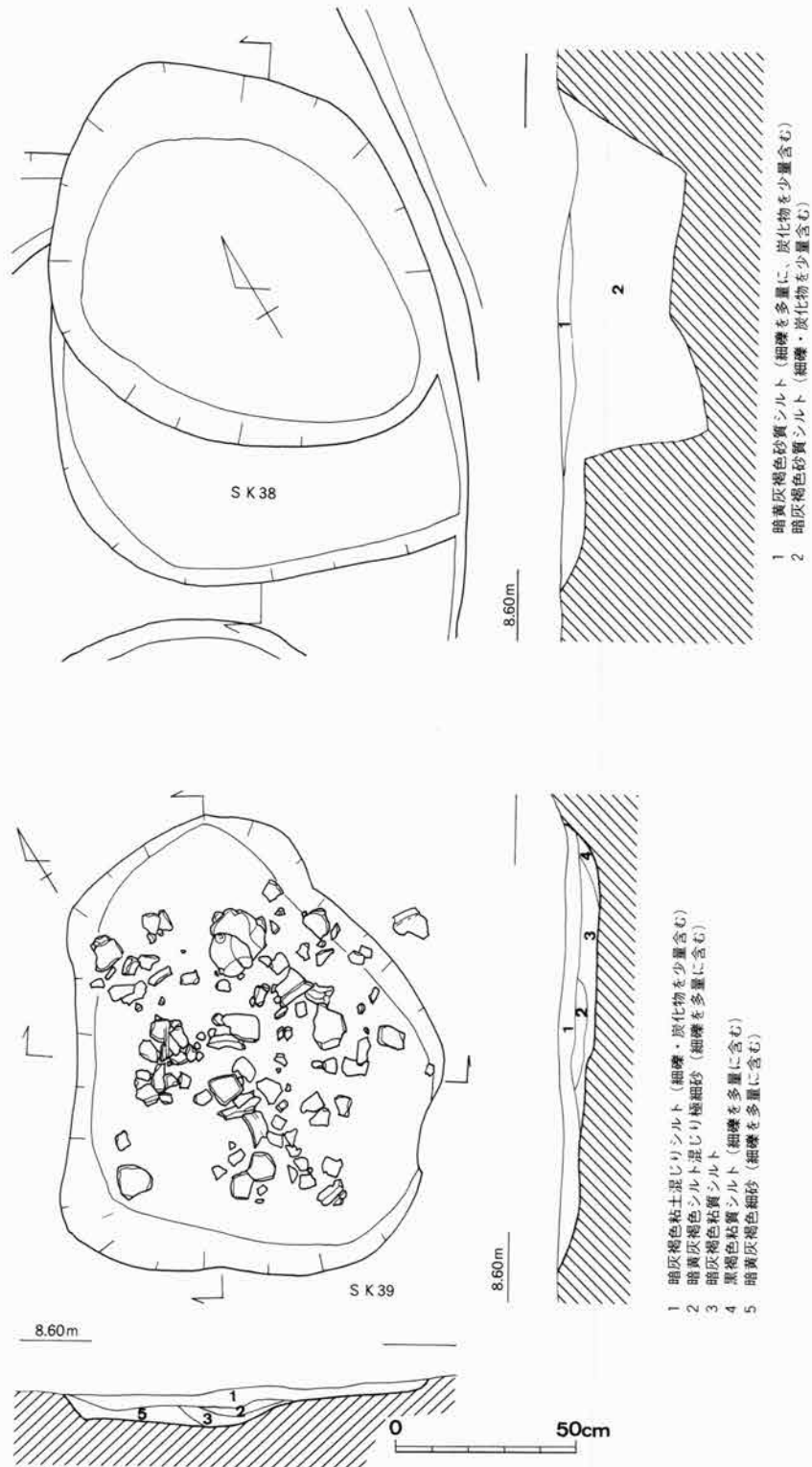
②検出遺構(第9図) A地区はその大部分が小規模な谷地形にあたっており、また後世の農地開発に伴う削平のため南東部の一角と西端部を除いて、遺構の密度は低い。遺構の分布状況を簡単にまとめると、南東部の弥生後期から古墳時代の遺構が密集する部分、中央部を北流する流路群、西部に分布する掘立柱建物跡群、西端の弥生時代後期の土坑、溝という分布状況を示す。

竪穴式住居跡 S H01(第11図) トレンチ南東部で検出した竪穴式住居跡である。多数の遺構に削平され、周壁溝のみを検出したに過ぎない。規模は南北5.0m、東西3.8mを測る。周壁溝は西側中央部で浅い部分があり、ここが入口になる可能性がある。支柱穴は北東、北西、南西隅付近で検出したが、南東隅付近では検出することができなかった。また、炉や竈、貯蔵穴などの屋内施設についても激しい遺構の切り合いなどにより床面がほとんど残っていなかったため、検出できなかった。遺物は周壁溝から弥生土器の小片が出土した。

不明遺構 S X02(第11図) トレンチ南東部で検出した性

格不明の遺構である。平面形は「T」字形で、3基の土坑が接続した遺構であるかのように見えるが、埋土は連続しており、遺物もお互いに接合するため、一つの遺構であると考えられる。規模は南北の残存長が2.5mを測り、東西が2.7mを測る。遺構の壁は袋状にえぐれており、東側の袋状にえぐれた部分からは長さ11mmの勾玉(第16図22)が出土した。底面は北側が最も深く、南側は比較的浅い。検出面から最深部までの深さは35cmを測る。埋土は上層の黒褐色シルト、下層の黒褐色砂質シルトで構成されており、上層と下層の間に炭化物和焼土の層が挟まっている。また上層と下層の間に第11図に示すような土器が一括で出土した。こうした状況から、この遺構は最終的には焼土などとともに土器を廃棄した土坑であったと考えられる。また、西側をNR02によって上半部を削平されているため、土層断面図にはNR02の堆積物が現れている。この遺構の当初の掘削目的に関して、壁が袋状を呈する浅い土坑を粘土採掘坑として報告した例があるが、こうした土坑の壁には良質な粘土の露出があると

(注4)いう。しかし、SX02の壁には粘土の露出は見られず、粘土採掘坑



第12図 遺構平・断面図(2) (上段：SK38、下段：SK39)

とするには根拠に乏しい。したがって、現状ではS X02は廃棄のために掘られた土坑であるとするより他はない。出土した遺物から、この遺構の埋没時期は、弥生時代後期末、畿内地域で庄内式が盛行する段階であろう。当初、このS X02の北側への突出部分を切り合う土坑と認識してS K28としたが、土層の観察と、土器の接合関係から同一の遺構であると判断した。

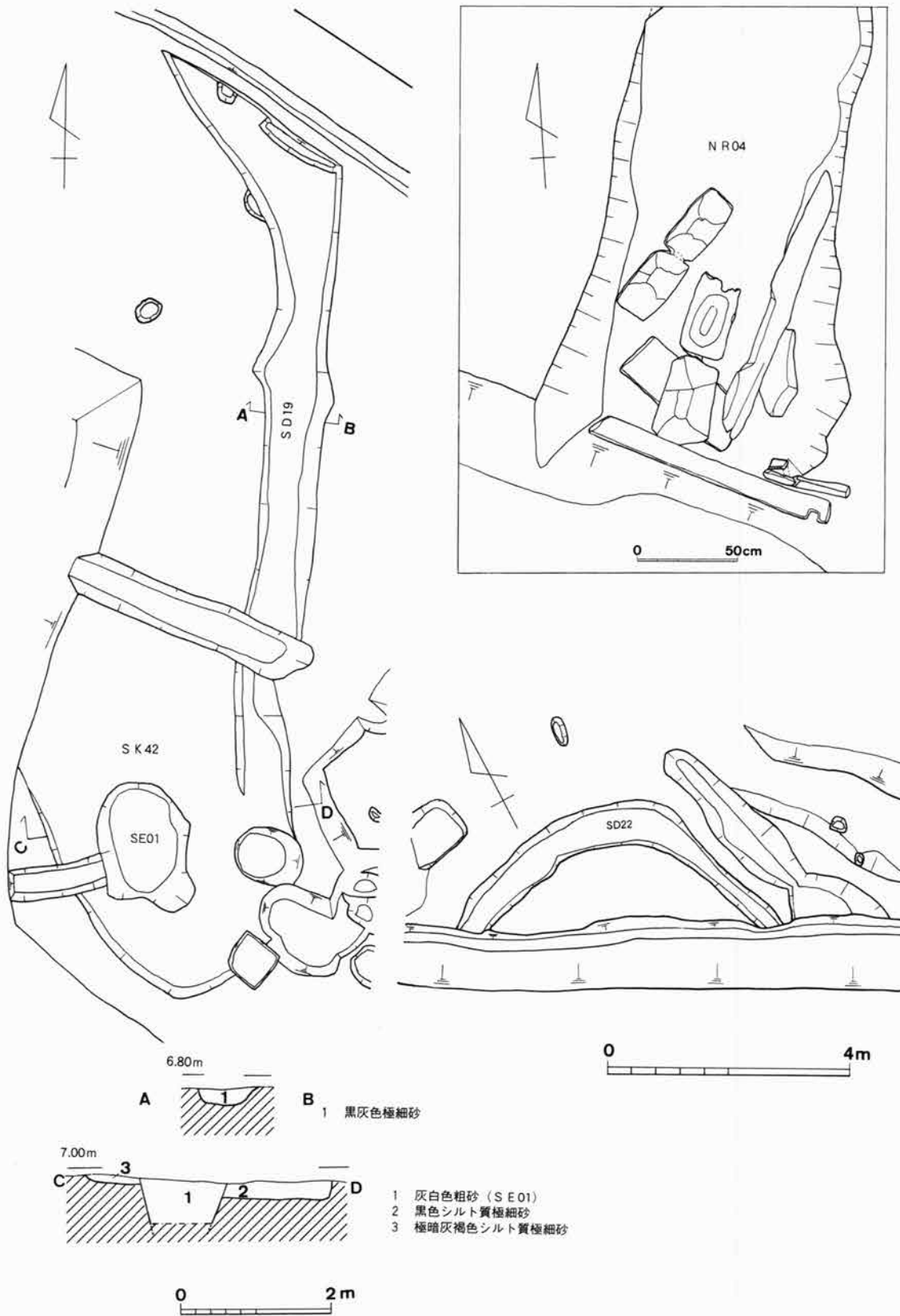
土坑S K38(第12図) S H01の東で検出した土坑で、平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸138cm、短軸107cm、深さ42cmを測る。遺構は南側にテラス部がある。埋土は上層が暗黄灰褐色砂質シルト層、下層が暗灰褐色層である。上下層の境界部付近を中心として、弥生土器が多数出土した。テラス部よりも下層からは細片を除いて、遺物は出土しなかった。時期はS X02と同様である。

土坑S K39(第12図) S K38の南で検出した平面不整五角形を呈する土坑で、規模は南北125cm、東西102cm、深さ17cmを測る。埋土は大きく3層に分かれる。埋土からは下層を中心として弥生土器(第16図)が多数出土した。出土状況を実測して取り上げたが、細片が多く、接合や復原のできる個体は少なかった。こうした状況から、この土坑は廃棄土坑の可能性が高い。また、ここから出土した器台の破片が、S X02から出土した器台(第16図18)と接合した。したがって、この土坑とS X02は、同時併存していたことが確実である。これにより、遺構の時期はS X02と同様であることが分かる。

土坑S K42(第13図) トレンチ西端で検出した平面形が不整楕円形を呈する土坑で、規模は長軸550cm、短軸350cmを測る。埋土は炭化物を多く含む黒色シルトの単層である。土坑の中央部は後世の井戸S E01に切られている。埋土からは多数の弥生土器が出土した。土器は遺構底部分に比較的集まっており、炭化物も底部付近の密度が高かったことから、焼いたもの、または、焼けたものを土器片などのゴミとともに投棄した廃棄土坑であると考えられる。出土した土器は大型の壺、高杯、器台などで、時期は弥生時代後期でも前半であろう。

溝S D19(第13図) S K42に切られ、北流する溝である。断面は逆台形で、幅80cm、深さ20cmを測る。埋土は炭化物粒を多く含む黒灰色極細砂で、埋土中から弥生土器が出土した。北辺で西側に広がるが、最深部はまっすぐ真北方向に向かって流れている。しかし第5次調査の6トレンチには伸びていない。遺構の時期は、出土した土器と切り合い関係から、弥生時代後期の前半であると考えられる。S K42とS D19、そして第5次調査のS D601・602によって、従来、遺構密度が低いとされていた遺跡北西部に、弥生後期前半の遺構群が存在することが明らかとなった。この時期の遺物は第1次調査でも出土している。

溝S D22(第13図) トレンチ西半部南端で検出した溝で、検出した範囲で見える限り半円形または、隅丸方形を呈する。遺構の南半分はトレンチ外へ伸びるため、全形は不明である。断面は半円形で、埋土は黒灰色中粒砂の単層である。埋土からは弥生土器の小片が出土している。全形を円形として復原すると外周で直径約6mとなり、小規模な円形ないし方形周溝墓の可能性も考えられるが、断定はできない。出土した土器には凹線文を施す高杯があり、弥生時代中期末の様相を示している(第18図54)。



第13図 遺構平・断面図(3)
(左：SK42・SD19、右上段：NR04、右下段：SD22)

掘立柱建物跡 S B01(第14図) 流路群の西側で検出した掘立柱建物跡で、他の建物と比較して、柱穴の規模が直径50cm前後と大きいことが特徴である。完全に検出したのは南側の1辺のみで、これが桁なのか、梁なのかは不明である。この東西の長さは4mを測り、北側トレンチ外に展開する。

掘立柱建物跡 S B02(第14図) S B01の内側にすっぽりと収まる小型の建物である。桁行2.6m、梁行1.7mを測り、2間×1間の構成である。北側梁行には束柱の柱穴がある。主たる柱穴の規模は直径35cm前後を測り、束柱の柱穴の直径は25cmを測る。

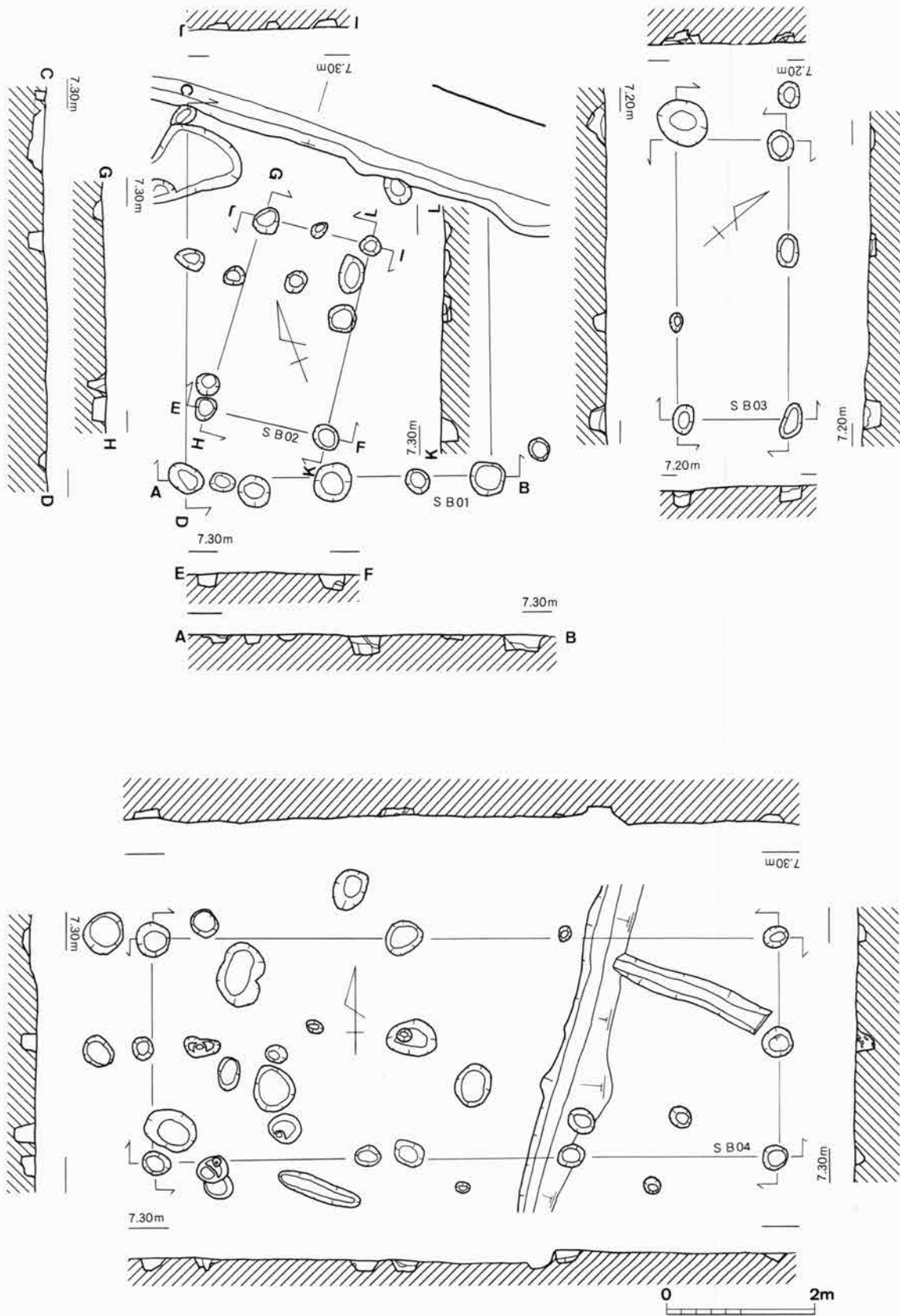
掘立柱建物跡 S B03(第14図) S B01の南側で検出した建物で、桁行3.6m、梁行1.4mを測る。1間×3間の構成を採る。柱穴の直径は35cmを測る。

掘立柱建物跡 S B04(第14図) トレンチ西端で検出した建物で、主軸を真東西に採る。桁行8.9m、梁行2.9mの4間×2間の構成である。柱穴の直径は20～50cmを測る。西辺はもう1列外側にも柱列が並び、建物を拡張した可能性がある。掘立柱建物跡群は洪水砂の上面から掘り込まれているため、平安時代後期以降に建設されている。後述する流路群はこの時期には真北に向かって流れ、S B04の主軸と直角の位置関係にある。

溝 S D15(第15図) トレンチ中央部を北流する流路群の中で、切り合い関係上、最も新しい流路である。2列の杭を打ってその外側を裏込めし、裏込めの内部に人頭大の礫を詰めるなど、人為的に管理された流路であることが判明したため、溝とした。溝の幅は約1m、深さ40cmを測り、裏込めには人頭大の礫を積んだ後に淡灰褐色粗砂を詰めている。流路部分は幅40cm、深さ40cmを測り、2列の細い丸杭で護岸され、褐色～淡灰色の粗砂が堆積している。流路部分から多量の弥生土器が出土したが、18世紀の伊万里焼など、近世陶磁器も出土した。したがって、このS D15が機能したのは江戸時代中期である。

自然流路 N R01(第15図) 流路群の内、切り合い関係上、最も古い流路である。堆積状況の観察から、一度埋まってから再び流路が形成されていることが分かり、古い方をN R01-a、新しい方をN R01-bとした。N R01は西側をN R08などに切られており、流路幅を知ることはできないが、残存する部分を見る限り、N R01-aが最も広く、5m以上を測る。深さは検出面から約50cmを測る。淡灰色粗砂、極暗灰褐色中粒砂などが堆積し、灰黄色細砂と青灰色細砂の互層が見られる部分もある。N R01-aの最下層には水晶を多く含む層があり、ここから水晶製の敲石が出土した。また、最下層に堆積した砂礫からは、各種弥生土器が多量に出土したが、これらに混じって古墳時代後期の須恵器蓋杯が出土した。したがって、この流路は古墳時代後期以降に堆積したものと思われる。またN R01-bからは加飾された二重口縁壺が出土した(第18図43)。破片同士はかなり離れた地点から出土したが、接合したため同一個体であることが判明した。

自然流路 N R02(第15図) 流路群の東端の流路である。南側は遺構面の残る微高地上に流路として現れるが、北側は遺構面全体に洪水砂として広がり、明確な流路を形成しないが、遺構面が幅約4m、深さ約25cmにわたって流路状にえぐられているため、ここを本流として北流したものと思われる。第5次調査のS D401に直接つながる流路は第6次調査のトレンチ内では認められ



第14図 遺構平・断面図(4)

(左上段：S B 01・02、右上段：S B 03、下段：S B 04)

なかったが、この洪水砂の一部が流路となって第5次調査4トレンチに流れ込んでいるものと考えられる。流路内には灰黄褐色粗砂が堆積している。ここからも多量の弥生土器が出土した。また、洪水砂として堆積したトレンチ東部の砂層からは、円形の板状の木製品や、厚手の板状木製品などが出土した。S K43は、洪水砂すなわちNR02が堆積する以前に掘り込まれた長方形の土



第15図 遺構平・断面図(5)
(SD15、NR01～09)

坑である。ここからも多量の弥生土器が出土した。

自然流路N R03(第15図) 流路群の西端を北流する、黒色シルト混じり中粒砂を主な堆積物とする流路である。S D15、N R04・05に切られる。最大幅約4mを測り、検出面からの深さ約60cmを測る。この流路からも多量の弥生土器が出土した。

自然流路N R04(第13・15図) N R03の上部から東側を北流する流路で、淡灰褐色粗砂を主な堆積物とする。流路の幅は1m前後で、深さは30cm前後である。流路群の断ち割りのうち、南と中央の断ち割りの間において、建物の建築部材と、木製農具の未製品3点によって堰のような施設を作っている(第13図)。流路の東側の建築部材は梁もしくは桁と見られ、組み合わせるための杓が切られている。また、用途不明の建築部材が流路を横断しており、これを木製板杭で固定している。これによって、ある程度水流を制御していたらしい。木製農具の未製品は横鋤に付属する泥除けの未製品と見られ、2枚の泥除けが横方向に接続している。堰のような止水施設に木製農具が伴う例は浅後谷南遺跡S D2010でも見られる。浅後谷南遺跡では、止水板のくぼみから水が流れ落ちるのを受ける装置の下敷きとして用いられている^(注5)。N R04からも弥生土器が多数出土したが、飛鳥時代の須恵器も出土した。このやや下流で、ほぼ完形の弥生土器の甕形土器(第19図)が出土した。各流路とも多量の弥生土器が出土したが、この流路の土器は完形率がやや高い傾向が認められる。

自然流路N R05(第15図) N R03を切り、N R04に切られる流路で、幅60cm前後、深さ20cm前後を測る。ほとんどの部分をN R04に切られるため、残存部は少ない。堆積物は極暗灰色中粒砂である。

自然流路N R08(第15図) S D15に切られ、N R01-bを切って北流する流路で、灰白色粗砂などを主な堆積物とする。流路の幅は2m前後で、深さは50cm前後を測る。ここからも多量の弥生土器が出土した。

以上の観察から、自然流路群は古墳時代後期ごろに、まず、N R02が流れ、これによって堆積した洪水砂を切ってN R01が流れ、次に、N R03が流れ、N R08・05が相次いで流れた後に、飛鳥時代にN R04が流れ、S D15が近世に掘削・護岸され、機能したものと考えられる。なお、N R06・07は、ごく一部分の検出に止まったため、検討できなかった。またS D15は第3次調査で検出したA-S D02につながり、北流する溝で、昭和28年に行われた、ほ場整備以前の地形図によると、この年まで機能していたことが窺われる^(注6)。流路群全体は、第3次調査の流路群につながると考えられる。また、流路群は多量の弥生土器を含んでおり、南側の微高地に大規模な集落の展開が予想される。

③出土遺物(第16～21図) A地区では整理箱40箱以上の弥生土器・古式土師器、7箱の木製品のほか、玉類、金属器が出土した。ここでは、その主なものを遺構ごとに報告する。なお、掲載する遺物は、出土した遺物のごく一部分であることをあらかじめ断っておく。また、弥生土器の器種分類については、第3次調査における分類を補足した第5次調査の分類を用いる。

S X02出土遺物(第16図) この遺構からは壺J(1)、高杯B2(2・3)、高杯C(4)、甕B1b

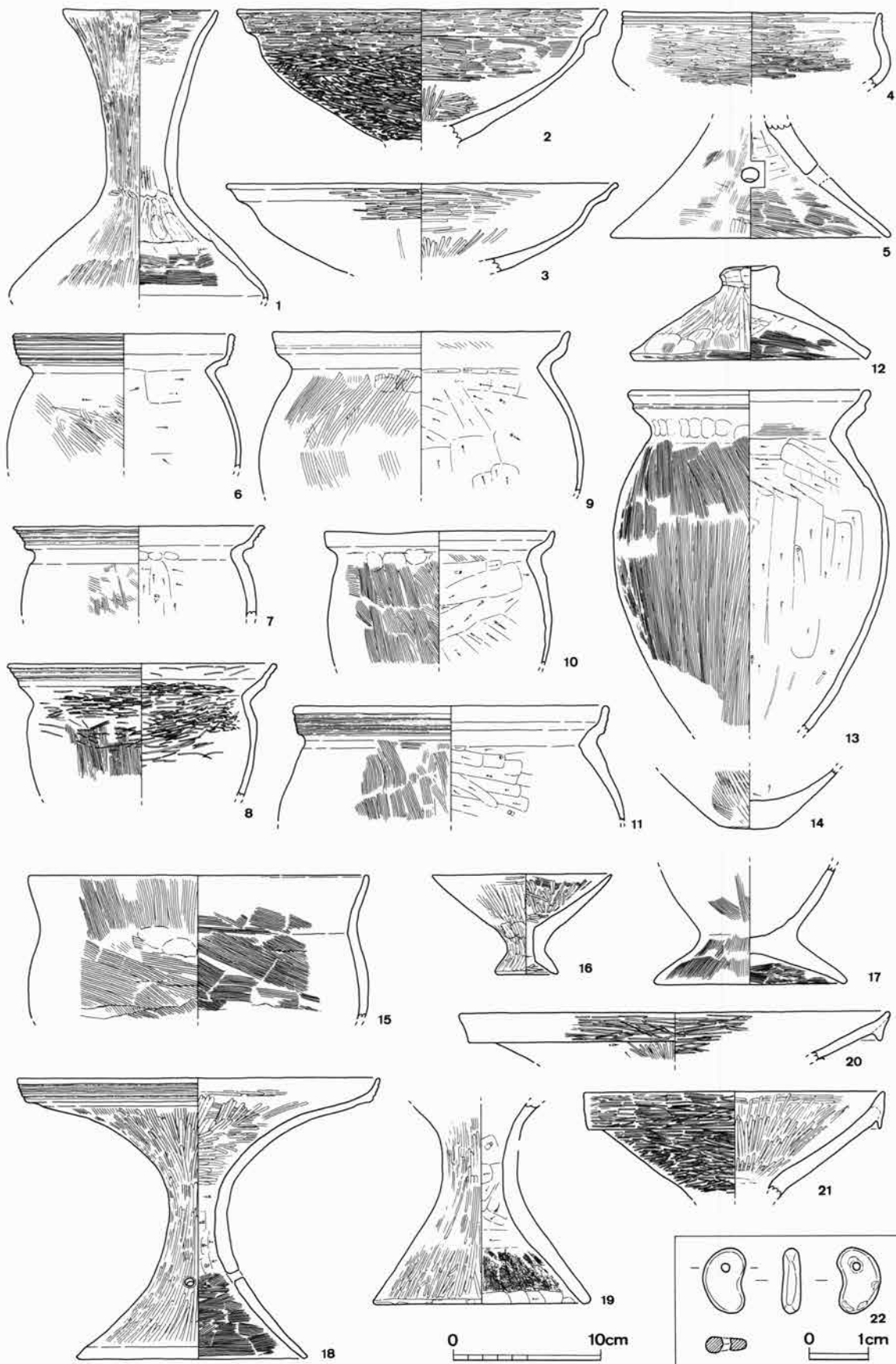
(6)、甕B 1 c (7・8・11)、甕B 2 (9・10・13)、甕E (15)、蓋(12)、鉢F (16)、器台B 1 (18)、器台B 2 (20・21)、滑石製勾玉(22)が出土した。

1の壺は算盤玉形の体部に細長い頸部を付し、口縁はラッパ形に外反して端部を丸く収める。外面調整はていねいなヘラミガキを基調とし、体部内面に横方向の刷毛目が見られる。2・3の高杯は二重口縁の端部が短いものである。内外面には、ていねいなヘラミガキを施している。丹後地域では、この短い口縁部の高杯B 2はこれまであまり出土していなかったが、周辺部の遺跡では庄内式併行期後半～布留式の初頭にかけて散発的に見られる型式である。4の高杯は口縁端部に2条の擬凹線文を施し、内外面に、ていねいにヘラミガキを施す。6・11は甕B 1 bに分類したが、甕Cの影響を受けて口縁部が拡張した在地の甕である。7・8は甕B 1 cで、口縁部が大きく上外方に伸びる。8は頸部から口縁部付近の内外面をヘラミガキしていることから鉢である可能性もある。9・10・13は、いわゆるナデ甕である。形態や調整は甕B 1 cと変わらないが、口縁部に擬凹線文を施さないことに特徴がある。15は甕Eに分類したが、口縁部が「く」字形に屈曲するのではなく、ゆるく外反するものである。内面をハケ調整することから、在地の甕の系譜に乗らない外来系の甕である。16は、内面をていねいにヘラミガキで調整していることから台付鉢としたが、形態は蓋と変わらないため、蓋である可能性も捨てきれない。なお、底部に円孔を1つ穿っているため、有孔鉢の一種である。18の器台は口縁部を上方にのみ拡張する。脚柱部は非常に細い。脚裾部には4方向に円孔を穿つ。20・21は口縁部を下方に拡張し、口縁部外面を垂直に作る器台である。内外面とも、ていねいなヘラミガキを施し、口縁部外面にもヘラミガキを施すため、擬凹線文は見られない。22は石製の勾玉である。全長11mm、幅7mm、厚さ3mmを測る小型の勾玉で、暗緑灰色を呈する。穿孔は両面穿孔で、片面に、あたりをつけた痕跡が見られる。大きさ、石の材質ともに金谷1号墓出土のものに類似している^(注7)。

全体を概括すると、高杯には擬凹線を施すものが認められないが、甕と器台では擬凹線を施すものが相半ばする。また、外反口縁の甕が出現しており、器台の器高・口径に対する脚柱部の太さが細くなっている(口径/脚柱部最小径=4.6、口径/裾部径=1.58)。こうした諸特徴を総合すると、網野町浅後谷南遺跡S K 2003・土器溜まりN^(注8)よりは古く、赤坂今井墳丘墓第1・4主体部よりは新しいということが言える。浅後谷南遺跡S K 2003は畿内地域の布留0式、纏向3類^(注9)(纏向辻土坑4下層^(注11))と併行する土器が含まれることから、畿内地域との併行関係が確認できる資料である。したがって、S X 02出土の一括土器群は、これに先行することから、庄内式2～3式、纏向2～3類に併行関係が求められる。なお、野々口陽子編年では器台の指数や、甕の構成などから庄内Iに当たると考えられる^(注12)。

S K 42出土遺物(第17図) この遺構からは壺A 1 a (23)、壺D (24・25)、壺I (26)、高杯の脚部(27～31)、把手付壺の一部(32・33)、甕A 1 (34～36・38)、甕B 1 a (37)、器台A (40)などが出土した。

23の壺は肩部が張らず、縦長の体部になる壺と思われる。外面調整は、ハケメ後ヘラミガキを施し、内面はハケメ、ナデで調整を施し、口縁部内面にのみヘラミガキを施す。口縁部外面に3



第16図 出土遺物実測図(1) (S X02)

条の擬凹線文がある。24・25は、色調、胎土などから同一個体と思われる壺であるが、やや大型のものである。外反する頸部から屈曲して口縁部が直立し、外面に擬凹線文を3条施す。内外面調整は、ハケメ後ヘラミガキである。26は上外方に口縁部が屈曲する壺である。27・28の高杯は杯部の底部外面に段を有するもの、もしくはその痕跡の残るものである。外面はヘラミガキで調整され円盤充填部の剝離面にはハケメが見られる。また、内面には絞りの痕跡が見られる。29・31の高杯脚柱部は中実だが、27・28・30は中空である。31は小型の高杯の脚柱部で、脚裾部が屈曲部を持たずにゆるく外反する特徴がある。32は把手付壺の把手である。把手はしっかり作られており、実用に耐えうる。33も把手状の突出部であるが、欠けているために、その全容は窺うことができない。把手が縦方向に付くため、壺Fの可能性もある。34～36の甕は「く」字形に屈曲した口縁部をわずかに拡張して、その内傾する端面に擬凹線文を2～3条施す。37の甕は、口縁部を強く外反させた後、端部を上方に拡張して、口縁端部外面に擬凹線文を3条施している。38は甕A1の大型品である。甕は内面をヘラケズリし、外面はハケメ調整を施す。40の器台は太い脚柱部からやや屈曲して裾部が伸びる。内外面調整はヘラミガキである。

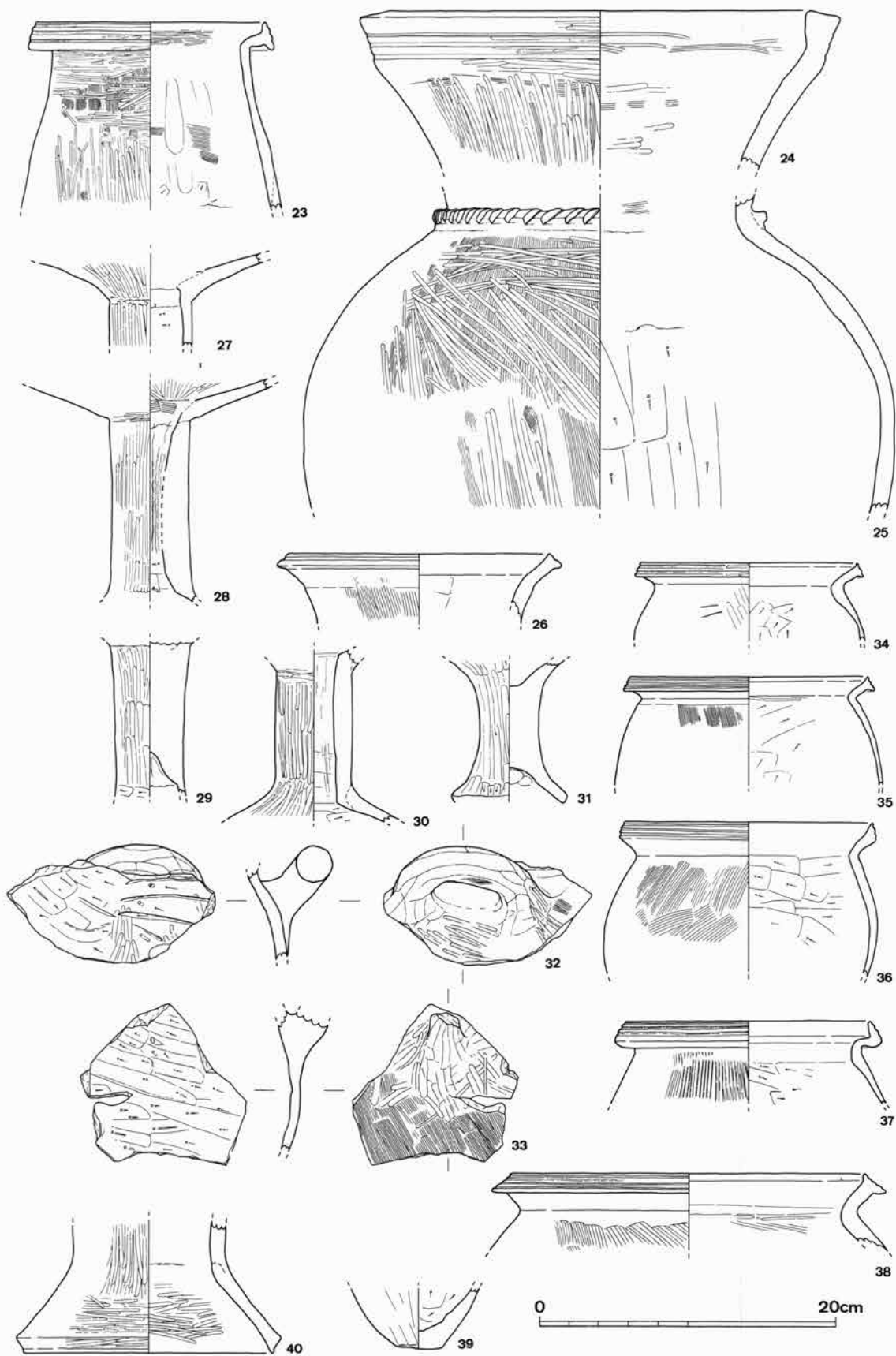
全体を総括すると、SK42出土土器には縦長の体部を持つ壺、杯部の底部に段を持つ高杯、甕A1からなるという構成の特徴から、後期前半の諸特徴を備えるが、高杯の段が退化傾向にあること、高杯の脚部の屈曲が強いこと、器台が含まれていることなどから、前半の中でも新相を呈する。三坂神社墳墓群や左坂墳墓群などに類例が求められ、野々口編年の弥生後期I新相に当たると考えられる。

NR01出土遺物(第18図) NR01からは水晶製の敲石(41・42)、壺B(45)、壺E(43)、壺H(44)など多量の弥生土器のほか、TK43～209型式に比定される須恵器などが出土した。したがって、この流路群のなかで最も古いと見られるNR01も、古墳時代後期以降に堆積したと考えられる。

NR02出土遺物(第18図) NR02からは壺H(46)、甕B1b(48)、甕B2(49)、蓋(47)、高杯の脚部(50)など、多量の弥生土器が出土した。また、NR01東側の洪水砂として取り上げた遺物もNR02に属すると考えられる。これらの中には桶の底板か、もしくは礎盤として用いられたと考えられる円形の木製板材も出土した。

NR03出土遺物(第18図51) NR03からも多量の弥生土器が出土したが、ここでは壺の底部のみを提示しておく。

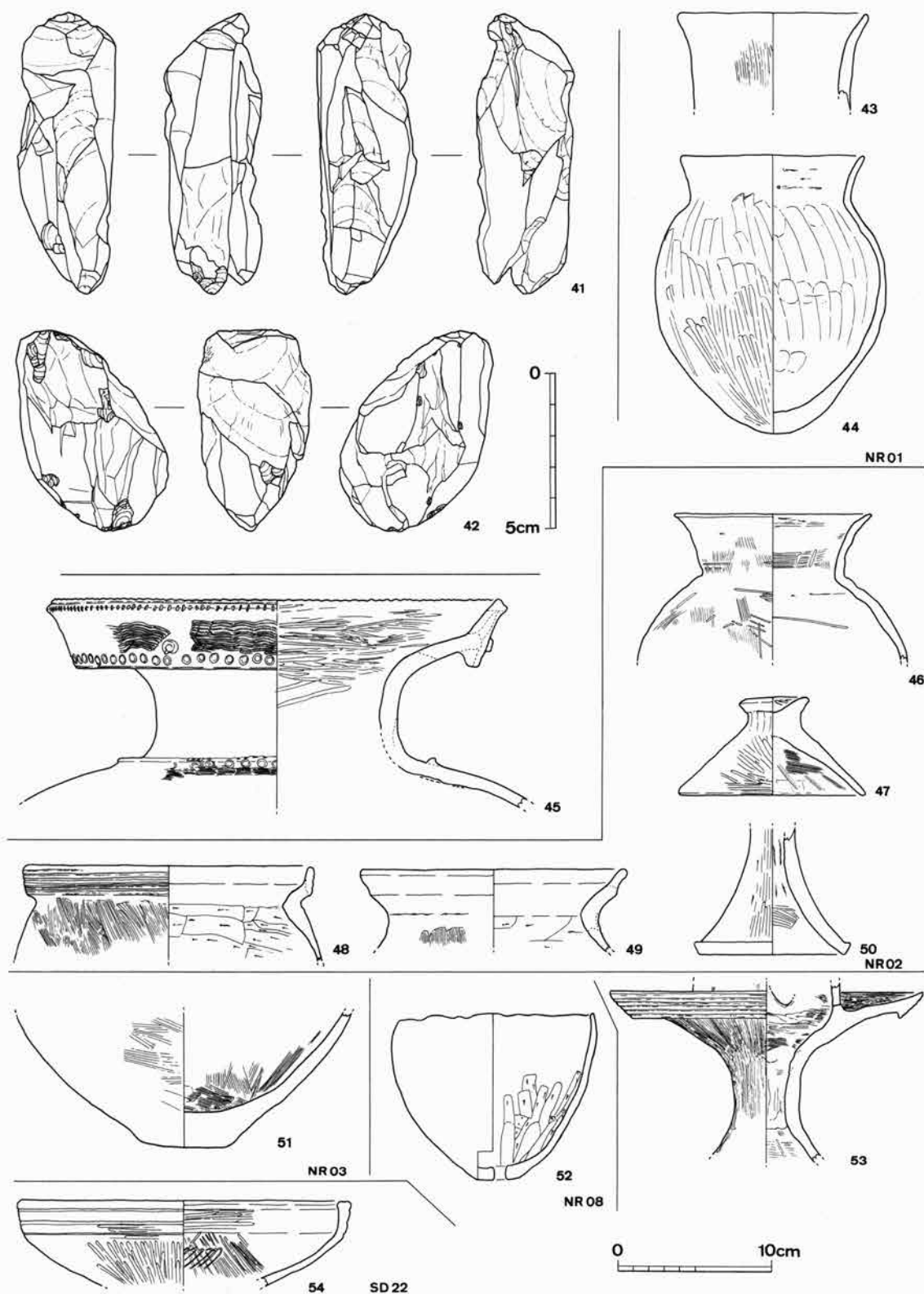
NR04出土遺物(第19・20図) NR04からは、半完形の土器を含む多量の弥生土器と、須恵器、建築部材と木製農具の未製品が出土した。出土した器種には壺A2(55)、壺底部(56)、甕B1a(57)、甕B2(58・59)、甕D(60)、甕E(61)、鉢B(62)、鉢C(63)、鉢D(67)、鉢E(68)、蓋(66)、須恵器杯身(69・70)、敲石(71)がある。55は頸部上端に貫通する円孔を穿っている。56は底部に幾何学的な文様を線刻している。65は叩き甕の底部である。67はミニチュアの把手付鉢であるが、把手は退化してボタン状を呈しており、1個しか残っていないが、剝離痕から本来は2個1対であったようである。69・70はともにTK217型式の須恵器である。したがってNR04は



第17図 出土遺物実測図(2) (S K42)

少なくとも飛鳥時代以降に堆積したと見られる。

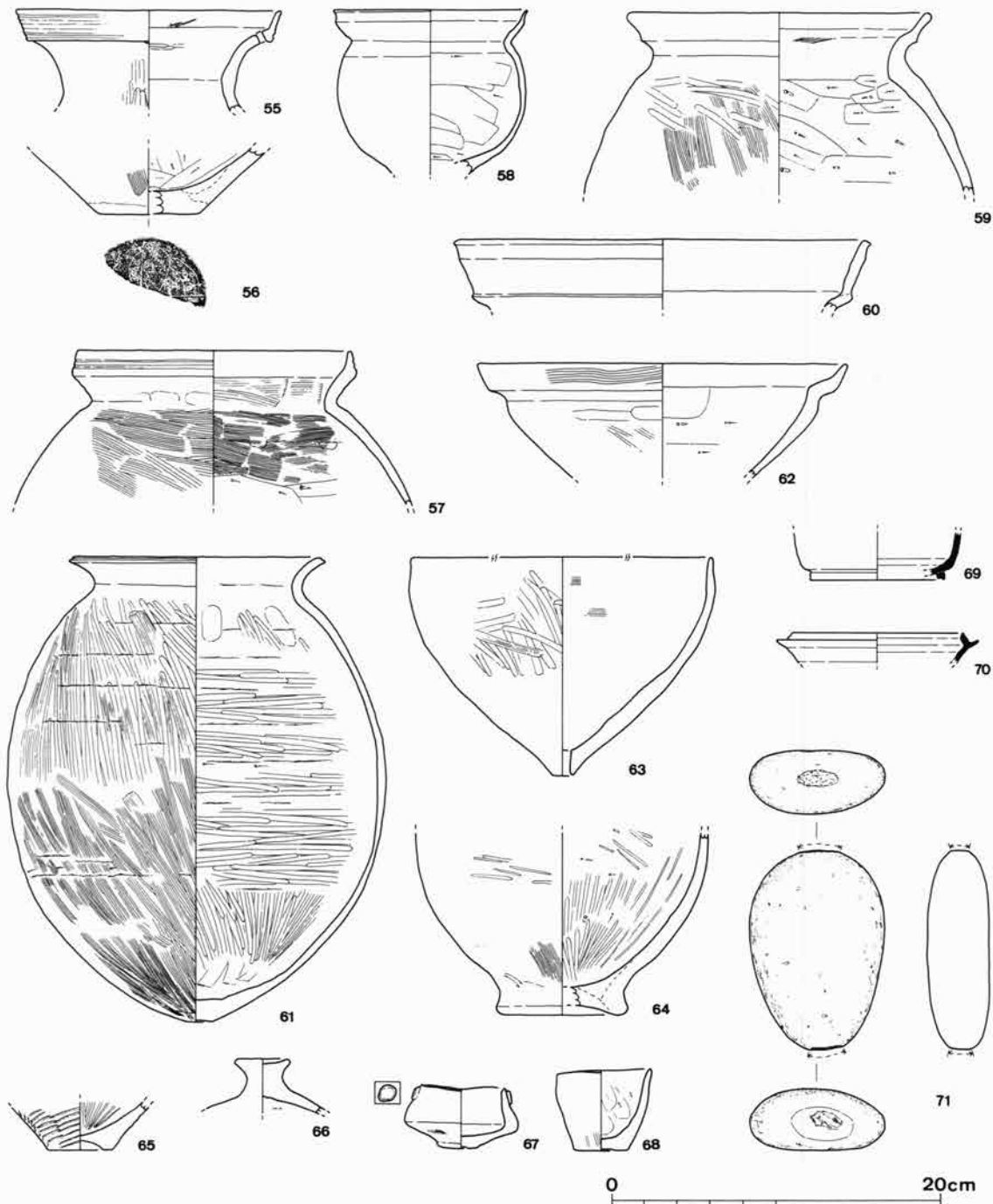
また、木製農具の未製品は3対6点出土したが、1対2点のみ実測した(第20図)。72は長さ80.7cm、幅28cm、厚さ6.6cmの板材を、幅4cmほどの手斧ではつり、片面を凸状に、もう一面を



第18図 出土遺物実測図(3) (自然流路)

凹状に加工したものである。72は表面と裏面が上と下で逆向きになっているが、他の2対は同じ向きになっている。現状では2個1対であるが、下側の個体の下部には更に別の個体が連なっていた痕跡が見られるため、3個以上が1連の製作で同時に作られていたことが推定される。完成後の製品としては泥除けの可能性が高い。

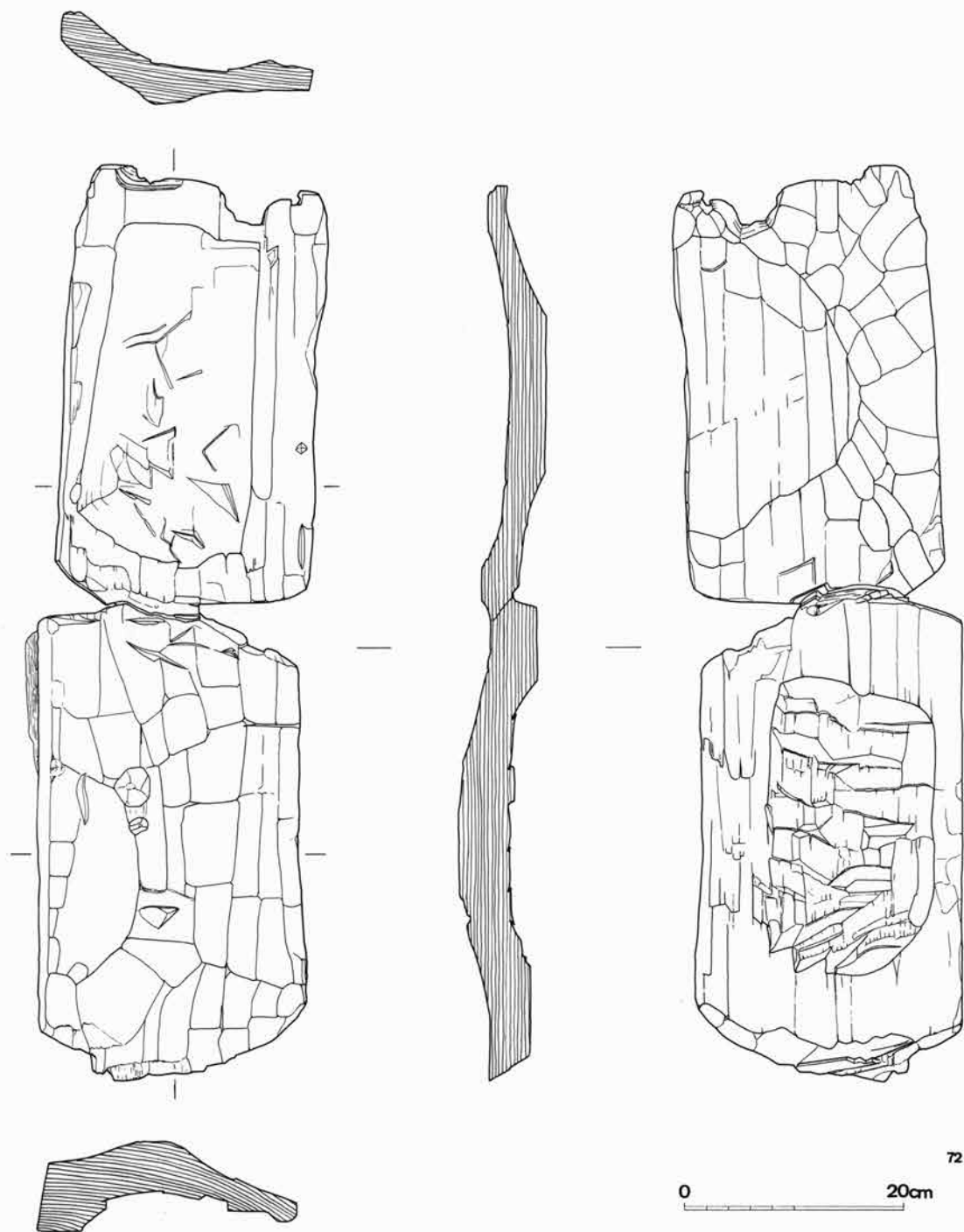
N R08出土遺物(第18図) N R08からも多量の弥生土器が出土したが、ここでは鉢C(52)のみを提示する。52は完形の有孔鉢で、内面は下半をヘラケズリ、上半部をヨコナデで調整している。底部には焼成前に穿孔された円孔が穿たれている。



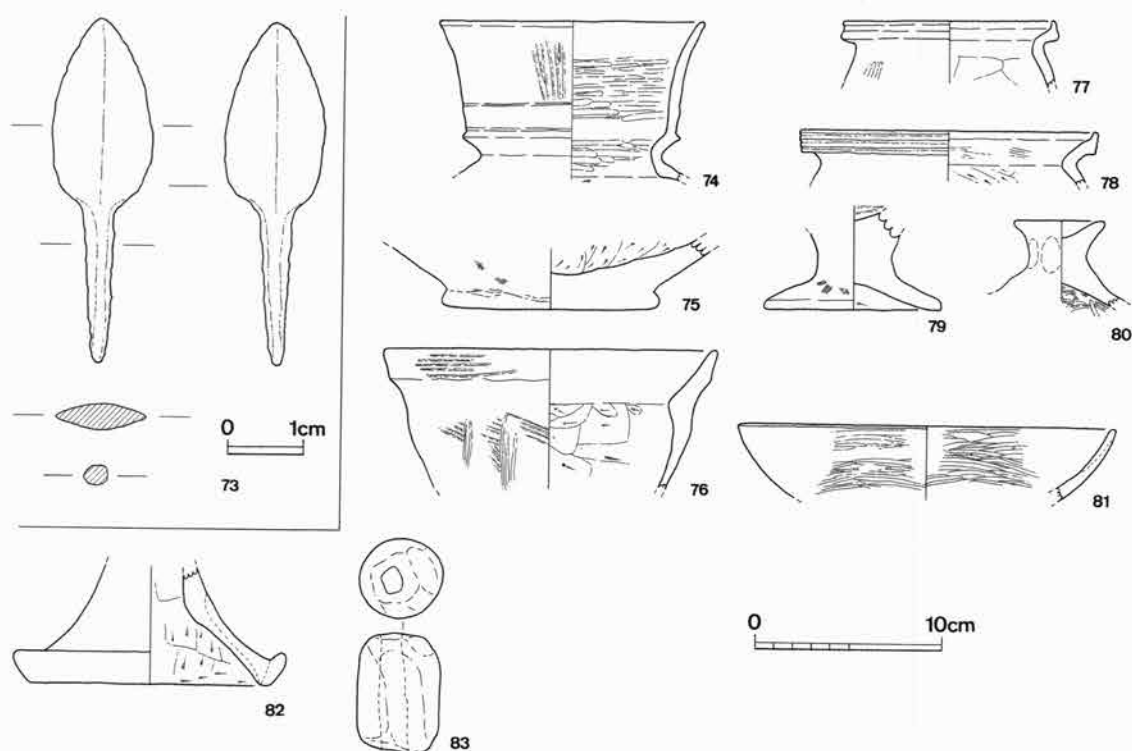
第19図 出土遺物実測図(4) (N R04)

流路群断ち割り出土遺物(第18図) 53は流路群を断ち割った際に出土した装飾器台(器台C)である。上半部と脚裾部を失っているが、外面調整は、非常にていねいなヘラミガキで調整している。

S D 22出土遺物(第18図) 54は高杯の杯部である。椀状の杯部から、やや直立気味に口縁部が立ち上がり、口縁部外面に3条の凹線文を施す。内外面は、ていねいなヘラミガキを施す。これのみは弥生時代中期末の土器である。



第20図 出土遺物実測図(5) (NR04)



第21図 出土遺物実測図(6) (遺構外)

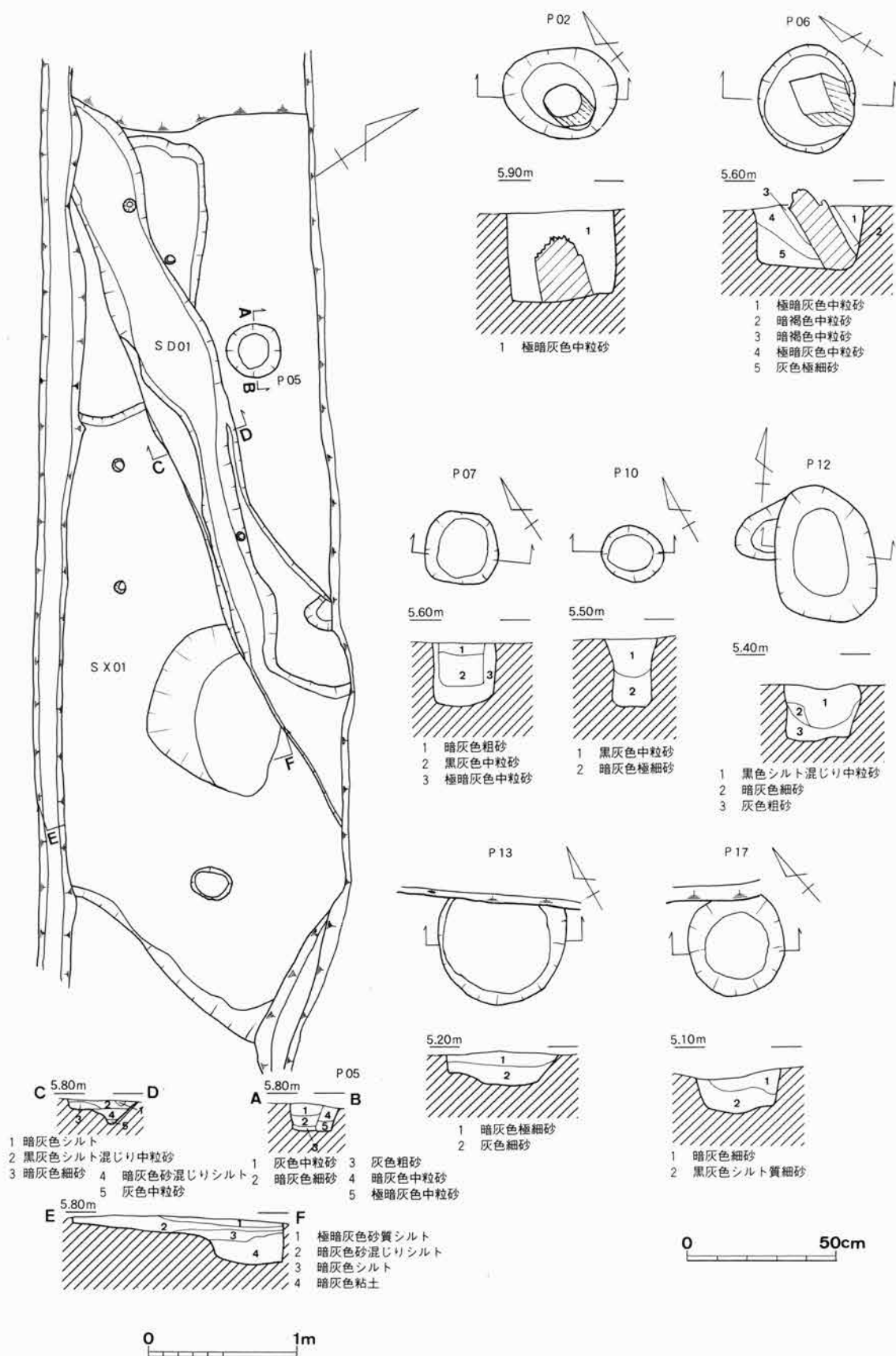
遺構外出土遺物(第21図) 73は精査中に出土した銅鏃である。長さ4.5cm、幅1.3cm、厚さ3.5mm、刃部長2.5cm、マチ部高2mmを測る。刃部の断面形帯はレンズ形で、茎の断面形は円形である。74は山陰系の壺である。ただし、胎土・色調は、在地の土器と何ら変わりはない。したがって、搬入土器ではないが、形態などは山陰・北陸のものとよく似ている。75は壺の底部である。弥生中期以前のものである。76は鉢Bである。77は甕A 1、78は甕B 1 bである。79は脚台付甕の脚部、80は蓋のつまみ、81は黒色土器の椀である。

(2) B地区

B地区では遺跡の西方への広がりを知るために、トレンチ下端で2m幅のトレンチを当初70m設定した。このトレンチにおいて、遺構、および遺物包含層が西方に広がることが確認されたため、更に西方にトレンチを延長して遺構の分布状況を確認した。これによって、延長部分には顕著な遺構・遺物は分布しないことが確認され、遺跡の西限が判明した。また、遺構の分布状況から破壊の及ぶ橋脚部分に関しては、更に調査が必要であるということとなり、橋脚部分2か所に、東拡張区と西拡張区を設けた。この内、東拡張区ではA地区とB地区の間を流れる流路と、それを再掘削して板杭で補強した溝を検出した。西拡張区では溝2条を検出した。

①基本層序(第10図) B地区の基本層序は1mを越える厚みで堆積する現代の盛土の下層に旧耕作土、包含層があり、この下面が遺構検出面となる。包含層には弥生土器のほか、16～18世紀の陶磁器類が含まれる。遺物は東寄りが多く、西端は少ない。

②検出遺構(第9図) B地区は、トレンチ下端の幅が約2mと狭いため、まとまった遺構を検出することはできなかったが、トレンチ中央部で柱穴などの遺構を検出した。



第22図 B地区遺構平・断面図

不明遺構 S X 01(第22図) 不整形な長方形を呈する遺構で、床面が平坦であることから、住居跡である可能性もある。規模は長軸 4 m 以上、短軸 2.6 m、検出面からの深さ約 20 cm を測る。中央部に直径約 1 m の土坑があり、深さ 30 cm を測る。主な埋土は暗灰色砂混じりシルトで、中央の土坑の周辺のみ、この層の下層に暗灰色シルト層がある。中央の土坑の埋土は暗灰色粘土である。S X 01からは弥生土器の小片が出土した。

溝 S D 01(第22図) S X 01を切り、西流する東西方向の溝である。断面形態は逆台形、一部に 2 段になっている部分がある。埋土は、最下層に灰色中粒砂、その上層に暗灰色砂混じりシルト、その上層に黒灰色シルト混じり中粒砂が堆積している。

柱穴 P 02(第22図) 直径 36 cm、深さ 30 cm を測る柱穴で、平面形態は楕円形である。柱穴の中央に断面円形の柱根が残存していた。柱根の直径は 18 cm である。埋土は極暗灰色中粒砂の単層である。埋土からは遺物は何も出土していない。

柱穴 P 06(第22図) 直径 37 cm、深さ 20 cm を測る柱穴で、平面形態は円形である。柱穴の中央に断面方形の柱根が残存していた。柱根は北に傾斜しており、埋土もこれに影響を受けている。

③出土遺物(第21図) B 地区では整理箱 1 箱分の遺物が出土した。図示した高杯(82)などの弥生土器、土錘(83)のほか、近世初頭の播り鉢などが出土した。

3. ま と め

第 6 次調査では、弥生時代後期を中心とした集落遺跡と、平安時代後期を中心とした集落遺跡の一端が明らかとなった。

弥生時代の集落に関する調査成果としては、従来から北東側の高所に居住域が想定されていたが、S H 01の存在により、その範囲がやや南西に広がったことが挙げられる。また、S X 02の一括資料、S K 42出土土器が、従来、欠落していた丹後地域における弥生時代後期の集落資料を提供することとなった。前者は浅後谷南遺跡 S K 2003に先行し、大宮町久住遺跡第 4 次調査 S D 08-B 6 層、加悦町須代遺跡 S D 1 第 3 層より後出する。また、後者は、従来、墳墓資料に限られていた弥生時代後期前半期の資料である。S D 22から出土した高杯は、弥生時代中期末の様相を呈しており、桑原口遺跡の弥生時代集落において中期の遺構の存在を窺わせる資料となった。

平安時代後期～中世の集落遺跡としては、第 4 次調査の C 地区に続き、掘立柱建物跡群を検出した。特に S B 04が真東西に主軸を採るやや大型の建物である点が目を引く。また、この時期の集落遺跡が大手川に向かって西に拡張していることが、今回の B 地区の試掘調査で明らかとなった。

4. 桑原口遺跡の全体像

昭和 44(1969)年の国鉄(当時)宮守線建設工事に先立つ分布調査で発見された桑原口遺跡は、過去 6 年にわたる調査を経て、徐々にその全体像が明らかとなってきた。そこで、今回の調査を踏まえ、これまでに判明している遺跡の総括を行っておくこととする。

これまでの調査で、桑原口遺跡における最も古い時代に属す土器は、今回、第 6 次調査で出土

した弥生時代中期の土器である。明確な遺構としてこの時期に位置づけられるものはないが、第6次調査の溝S D 22がこの時期である可能性がある。そのほかの弥生時代中期の遺物は第6次調査の南側、やや微高地となっている部分からの流れ込みの遺物として存在している。

弥生時代後期～古墳時代初頭では、東側の丘陵裾部の緩斜面地に居住域が形成される。第1・2・4・6次調査で竪穴式住居跡が検出され、特に、第2次調査では激しい切り合いから、建て直しが幾度も行われたことが推定できる。廃棄土坑も盛んに作られ、多量の土器が廃棄されている。流路群や洪水砂に含まれる多量の土器も大半がこの時期のものであり、集落の拡大と、人口の増加が推定される。流路群にこの時期の土器が多量に含まれることから、集落の中心は南側の微高地上にあると推定される。また、第4次調査C地区の4・5トレンチにも遺物が分布することから、8トレンチを含むC地区北側の緩斜面と、小規模な谷地形にもこの時期の集落は広がっていると思われる。この時期における特筆すべき遺物には、勾玉と銅鏃がある。第3次調査の勾玉は青いガラス製で、第6次調査の勾玉は石製である。第6次調査の勾玉は大きさ、形、石材ともに、金屋1号墓とよく類似しており、同一生産地からの供給であると考えられる。一方、銅鏃は有茎式の三角形鏃と紡錘形鏃、無茎式の三角形鏃で矢ばさみを装着するための凹面を作るものの3種がある。このうち、無茎式のものは丹後地域を始め、日本海沿岸地域に広く分布する形式である。

古墳時代前期に入ると遺物の出土量が大きく減じ、集落は一時縮小したと考えられる。明確な遺構は認められない。

古墳時代中期にはやや遺物量が回復し、第2次調査S X 02、S D 15などのような遺構も見られるようになる。S X 02、S D 15からは、流れ込みの弥生時代後期から古墳時代初頭の土器のほか、中期全般と後期前葉(丹後後期2式)までの土器が出土している。^(注13)

古墳時代後期には流路群内から須恵器が散見され、南側の微高地に遺構の存在が窺える程度である。

飛鳥時代に関しても、古墳時代後期と同様である。第4次調査C地区からも遺物が出土しており、丘陵裾部などにも遺構の存在が推定される。

奈良時代～平安時代前期に属する遺物は現在のところ出土していない。

平安時代後期～鎌倉時代には第4次調査C地区、第6次調査A・B地区を中心に、掘立柱建物跡群が存在しており、谷奥から流れ出す土砂によって形成された小規模な扇状地の扇端部にまで集落が展開している様子が看取される。この時期の遺物には黒色土器、土師皿、羽釜などの土器類のほか、箸や下駄などの木製品、硯などの石製品などが見られる。

室町時代に属すると考えられる遺構は現在のところ存在しない。流路群から15世紀の瓦質の鉢が出土していることから、南側微高地上に小規模な集落が予想される。

安土桃山時代、江戸時代初期の遺物が第6次調査B地区の包含層から少量出土している。遺物としては播り鉢が目につく。

以上、遺跡全体の動態を概観してきたが、弥生時代中期から江戸時代まで、約2000年にわたっ



第23図 桑原口遺跡調査地点総合図(網のあるトレッチは遺物が出土した地点)

て断続的に営まれてきた集落であったと考えられる。

遺構・遺物の分布状況、流れ込む方向、昭和28年には場整備が行われる前の田畑の図面などから遺跡の範囲を推定すると、遺跡の北限は第1次調査の1トレンチと第3次調査のZ地区を結んだ線、西限は第6次調査のB地区の東から70mの辺りから等高線に沿って南下し、南は扇状地の微高地全体を含み、東は少なくとも第4次調査C地区の12トレンチを含む。特に丘陵裾部、扇状地による微高地には遺構が残存する可能性が高い。

(福島孝行)

(3) 東^{とう}禅^{ぜん}寺古墳群

1. はじめに

平成10年度に京都府教育委員会と宮津市教育委員会が須津東禅寺地内で分布調査を実施し、古墳状隆起を複数確認した。平成12年度、鳥取豊岡宮津自動車道建設工事に関連して、当調査研究センターがこの古墳状隆起を試掘調査したところ、古墳であることが判明した。^(注14)古墳群の所在地名をとって東禅寺古墳群と名づけた。

2. 遺跡の位置と環境

東禅寺古墳群は、宮津市須津村落の南東方向にある丘陵上に位置している。この丘陵は阿蘇海東岸を形成する山塊から派生するもので、標高45m付近に平坦な鞍部がある。この鞍部を上限として古墳が造営されている。最も高い位置にある1号墳からは野田川河口域と阿蘇海西半部を望むことができる。眺望に優れた立地をしている。

阿蘇海沿岸では、古代の遺跡が数多く発見されている。特に、湾奥に位置する野田川河口域に遺跡の分布が集中している。遺跡地図や市史など公的刊行物を参照しつつ、各時代の主な遺跡を概観しておこう。縄文時代の遺跡としては、岩滝町千原遺跡、宮津市中野遺跡が挙げられる。中野遺跡では、早期の押型文土器が散発的に検出されている。早期の千原遺跡では、前期から後期にかけての土器が包含層中から発見されており、近辺に、長期にわたって形成された縄文時代集落跡の存在が推定される。弥生時代の遺跡としては、千原遺跡、大風呂南墳墓群など墳墓関係の遺跡がある。千原遺跡では、貼石を有する方形の墳墓2基が、弥生時代後期を中心とする遺物包含層の中で部分的に確認されている。大風呂南墳墓群では、後期中頃の大型墳墓が2基調査された。1号墳から鉄製武器、銅釧、ガラス製釧、玉類など多量の副葬品が発見され、日本海沿岸の海上交易を担った重要人物の墳墓の可能性が指摘された。古墳時代に入ると丘陵部にたくさんの古墳が作られるようになる。前期には、霧ヶ鼻古墳群や柿ノ木古墳群、長大な組み合わせ木棺が検出された岩滝町日ノ内古墳、舶載鏡である画像鏡が出土したことで知られる丸山古墳などが営まれた。宮津市波路古墳群もこの時期に営まれたものである。中期には葺石と埴輪をもつ前方後

円墳である岩滝町法王寺古墳が造営された。後期には霧ヶ鼻古墳群の中に横穴式石室を持つものが現れ始め、後に、倉梯山古墳群などで石室墳が作られた。これら野田川河口域に作られた古墳の造営主体となる集落遺跡は、現在のところ、定山遺跡と千原遺跡が有力である。

3. 調査の経過

東禅寺古墳群は、調査着手前の段階では、3基からなる古墳群と推測された。しかし、立木の伐採、下草の処理後に確認した結果、調査対象地内に新たに1基、近接地点に1基が確認され、合計5基からなる古墳群であることが明らかになった。調査対象地外である尾根下方にも階段状の古墳状隆起が認められ、同一尾根上には、さらに多くの古墳が分布する可能性がある。

さて、今回の調査では、工事予定地内に位置する1～3号墳、5号墳の4基を対象として発掘調査を実施した。

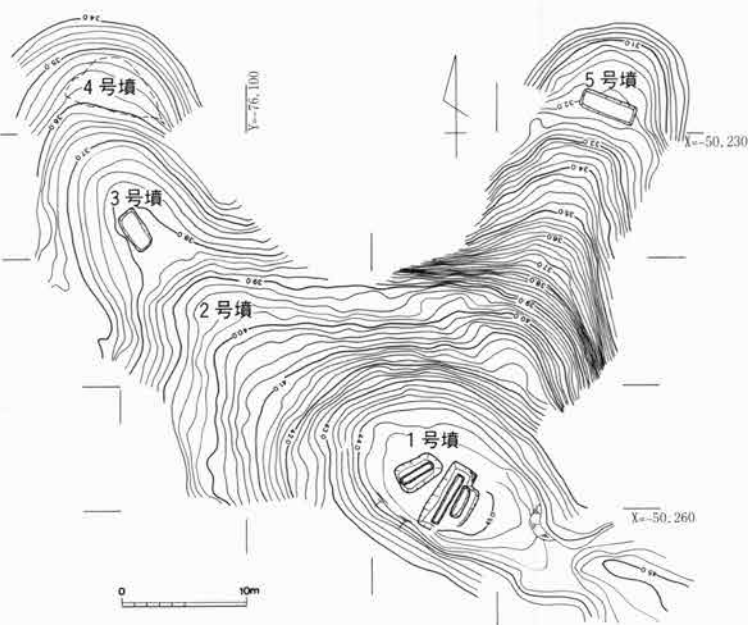
調査は以下の手順で進めた。まず、調査着手に先立ち、伐採木を調査対象地内から除去する作業を行った。伐採木処理後、測量作業に必要な基準杭を打ち、水準と座標を設定した。各古墳に土層観察用畦を設定した後、各墳丘の形状や埋葬施設の状況を確認するために、尾根の表土掘削を行った。あわせて、5号墳の立地する尾根の一部に試掘トレンチを設定し、主体部の存在の有無を確認した。また、作業の進捗状況に応じて、各古墳の平板測量作業や検出遺構実測図作成をはじめ、写真撮影などの記録作業を行った。調査が終了を迎えた段階で、ラジコンヘリコプターを用いて、全景写真撮影と調査対象地区の正確な測量作業を行った。その後、7月30日に現地説明会を行い、8月3日に現地調査を終了した。

4. 調査概要

(1) 検出遺構

① 1号墳 東禅寺古墳群の分布する丘陵は、標高45m付近で傾斜が変化する。標高50mにかけて平坦な地形をなし、いわゆる鞍部を形成している。1号墳はこの鞍部の先端に位置する長楕円形の古墳である。墳丘規模を正確に把握するために実施した平板測量の結果、長軸が約21m、短軸が約14mの古墳であることが判明した。

1号墳は、自然地形を最大限利用して造営された古墳で



第24図 東禅寺古墳群地形測量図

ある。墳丘前端は、傾斜面を利用して高さを確保し、丘陵側面を整形して墳丘を整えている。埋葬区域は、尾根の稜線上を平坦に削り出して形成する。墳丘後部は、幅約4m、深さ約2mの溝を掘って丘陵上方と切り離しており、もっぱら地山を削り出して墳丘を形成し、ほとんど盛土はみられない。

丘陵前端側にあたる墳丘の約2/3が工事対象となるため、この部分について調査を実施した。

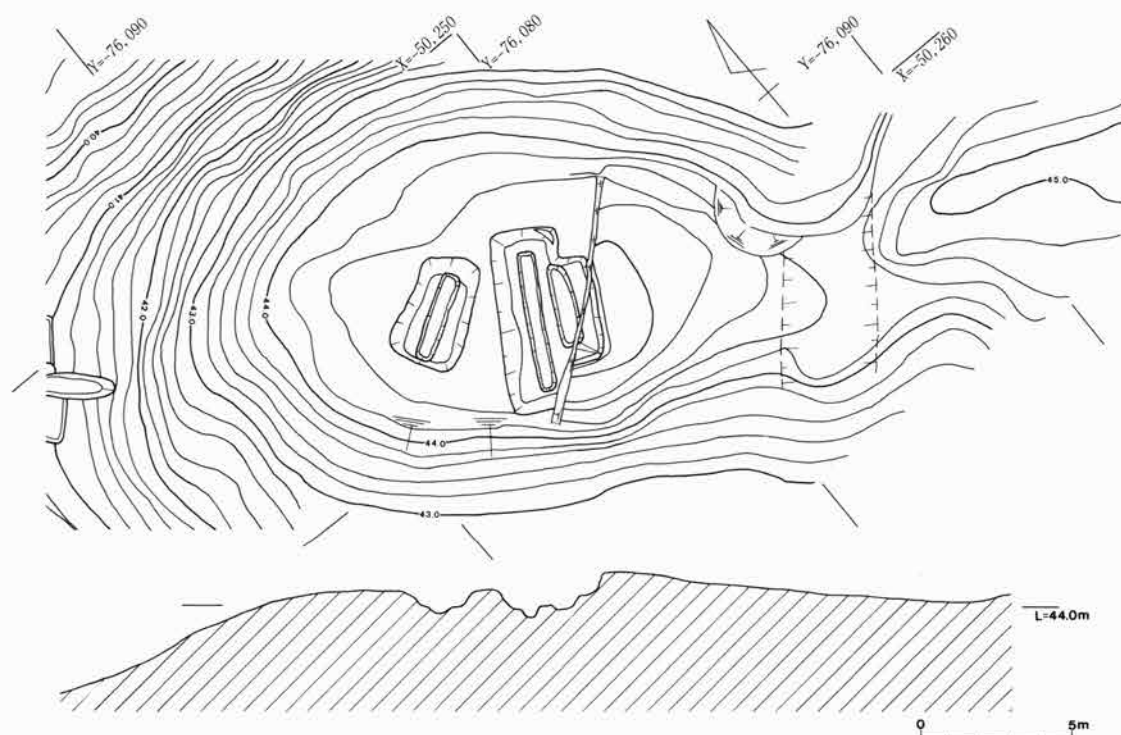
表土を除去し、墳頂部平坦面で繰り返し精査を行ったところ、3基の埋葬主体部(第1～3号主体部)を検出した。3基とも木棺直葬である。

第1号主体部 南北に主軸をもつ長方形の大型の2段墓墳である。規模は、長軸長約6m、短軸長約2.1m、深さ約1mである。墓墳中央底で木棺痕跡を確認した。木棺は長さ4.7mの長大なもので、幅0.6mと狭い。小口は、側板端より1m前後内側に設置されていた(第29図)。組み合わせ式の箱形木棺である。底板の有無、蓋の形状などについては明らかでない。

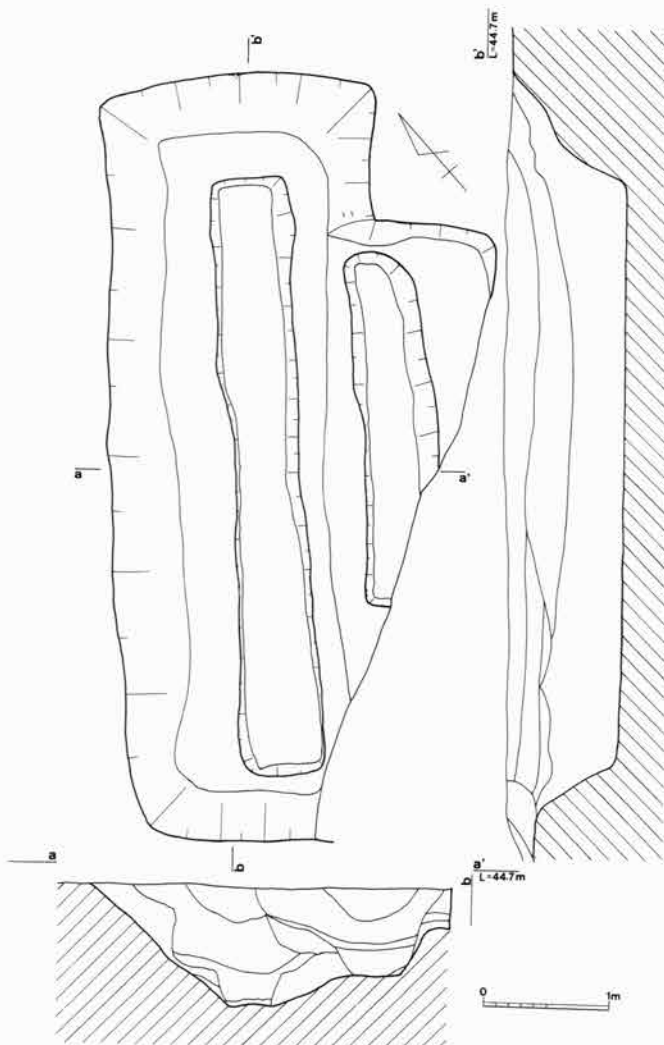
第1号主体部からは、土器と鉄鏃が出土している。土器は、高杯が2個体分あり、1個体はほぼ完形に復原することができる(第36図)。土器を検出した場所は、墓墳検出面から20～30cm掘り進んだところで、木棺主軸直上の南端に位置する場所である(第28図)。

鉄鏃は、1点を確認した。柳葉形である。木棺北寄りのところで、先端を南に向けた状態で検出した。東側の長側板に沿って置かれていた。墓墳底から10cm前後浮いた状態で検出していることから、木棺の上面に置かれた遺物が、木棺の腐植・陥没によって墓墳底付近に移動したものと考えられる。

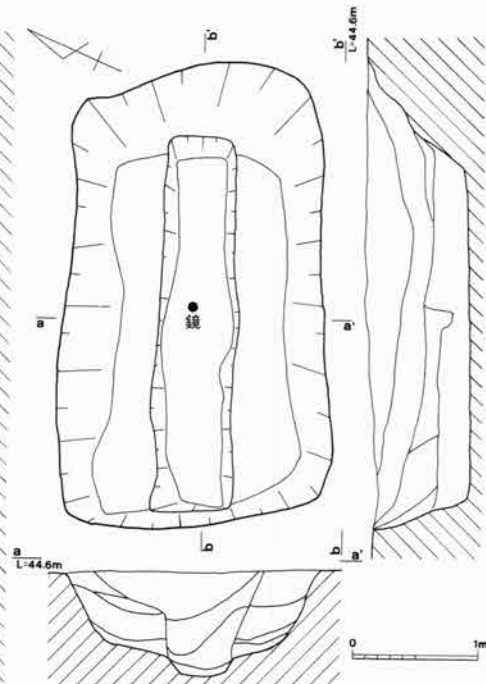
第2号主体部 第1号主体部に重複して営まれた2段墓墳である。墓墳規模は、長軸長約4mと推測される。短軸長約2.1m、深さ約0.6mである。長軸長約2.8m、短軸長約0.6mの木棺が納



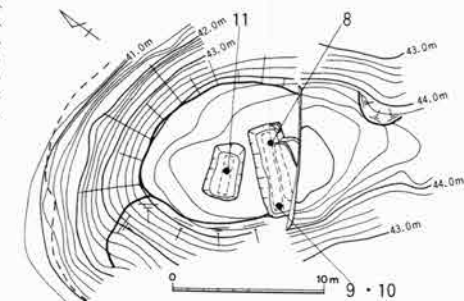
第25図 1号墳墳丘測量図



第26図 1号墳第1号主体部実測図



第27図 1号墳第2号主体部実測図



第28図 1号墳遺物出土位置図

められていたと推測される。鉄鏃の破片を1点検出した。

第3号主体部 第1・2号主体部の西側で検出した長方形の墓墳である。規模は、長軸長約3.6m、短軸長約2.1m、深さ約0.8mである。墓墳中央で木棺痕跡とみられる土色変化を認めた。木棺は、長さ約2.9m、短軸長約0.65mの規模と推測され、形状は箱形である。木棺小口の状況は明らかでない。

木棺中央で径約3.6cmの小型の櫛歯文鏡を検出した(第28図)。鏡は、墓墳掘形にほぼ密着した状況で検出した。出土位置からみて、被葬者の胸上に置かれていたものと推測される。土器、鉄器など他の遺物は認められなかった。

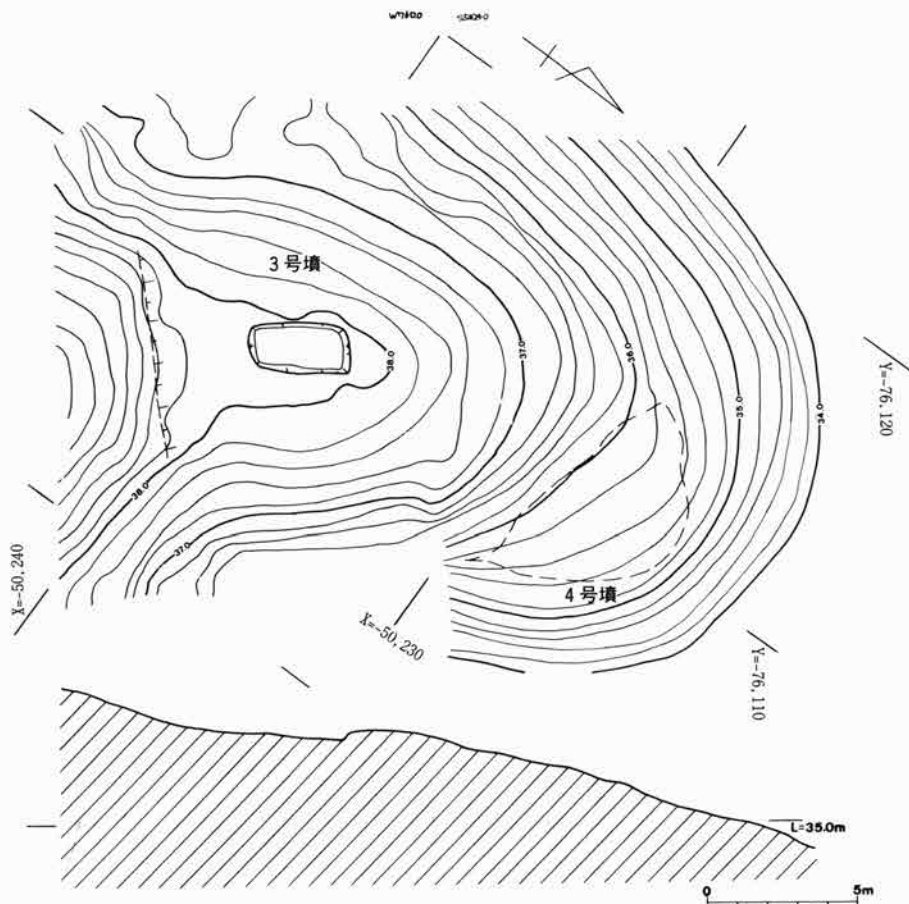
②2号墳 1号墳と3号墳の間に認められた古墳状の隆起である。平成12年度に尾根主軸上にトレンチを設定して試掘調査を実施したが主体部や遺物を確認することができず、古墳と断定することはできなかった。しかし、今回の調査で、古墳頂上付近を再精査したところ、6世紀後半期の須恵器杯身の細片(第35図1)が出土し、古墳であった可能性が高まった。この須恵器は細片であるが、古墳時代後期前半期の特徴を有するものである。上方に位置する1号墳は前期古墳であ



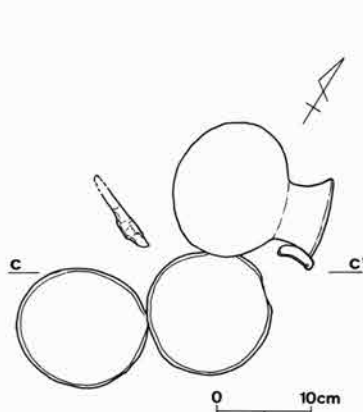
第29図 1号墳第1号主体部木棺痕跡実測図

り、ここから転落した遺物とは考えにくいので、当初からこの場所に存在したものであろう。この遺物は、古墳時代後期の埋葬施設が近辺に存在した可能性を示唆するものといえる。このことから、この地点の隆起は、かつて古墳であったものが、墳丘の崩落や開墾により主体部が失われた場所であると推定しておきたい。

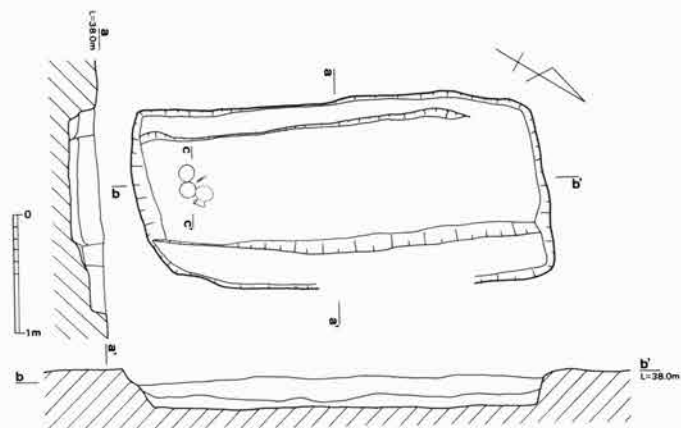
③3号墳 尾根稜線を削り出して作られた隅丸方形の古墳である。墳丘規模は、主軸長約12m、短軸長約10m、高さ約1.5mである。墳頂部で墓壙を1基検出した。墓壙は長方形で、主軸が尾根主軸に平行して作られていた。墓壙規模は、長軸長約3.2m、短軸長約2.1m、深さ約0.8mである。墓壙内で遺物を一括して検出した。



第30図 3・4号墳墳丘測量図



第31図 3号墳遺物出土状況図

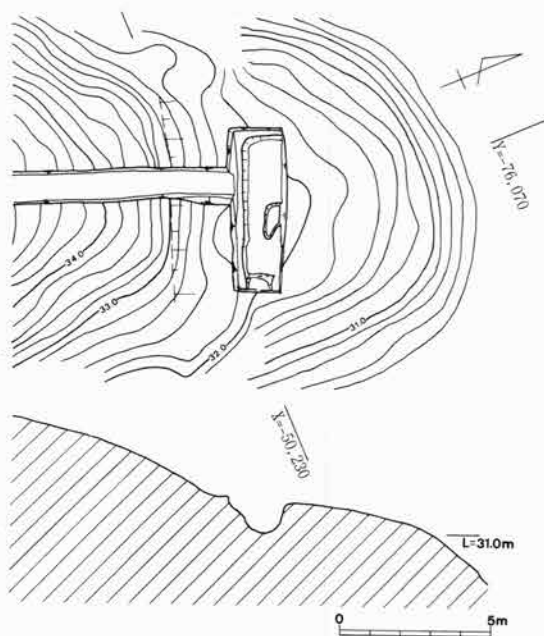


第32図 3号墳主体部実測図

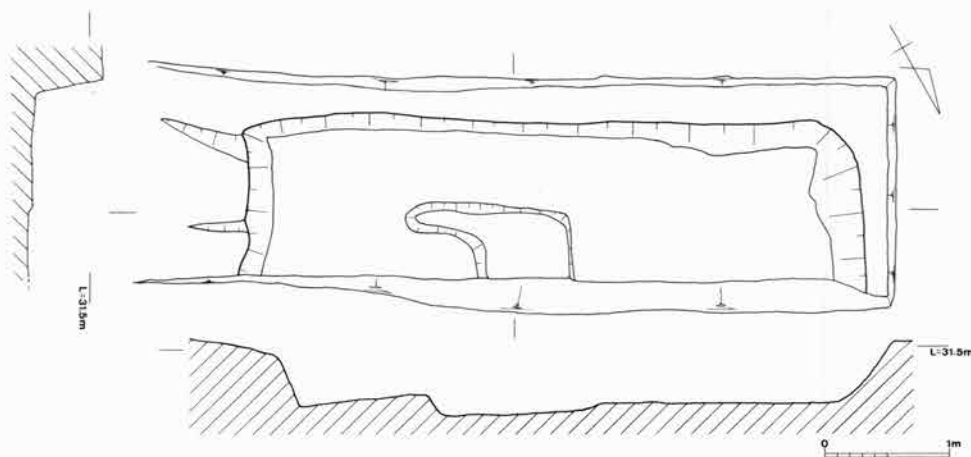
出土遺物は、土師器壺1点、土師器碗2点、鉄製刀子1点、滑石製勾玉1点である(第31図)。これらの遺物は、主体部の南東側で、墓壙底から約10cmほどのところにまとめて置かれていた。木棺の埋葬後、被葬者への供献として棺上に置かれた遺物と推測される。

④4号墳 調査対象地外に位置するが、5号墳を理解する上で必要なので、記しておく。この墳墓は、3号墳測量作業中に確認した古墳である。3号墳の位置する尾根下方に隣接して造営されている。尾根稜線を削平して半月形の平坦面を作り出し、墓域とする形式の墳墓と推測される。未調査であるので時期など詳細は明らかでないが、いわゆる階段状地形として認識される丹後地域に特徴的な形式の墳墓である。数量は未確定であるが、4号墳下方にも数基の存在を確認している。

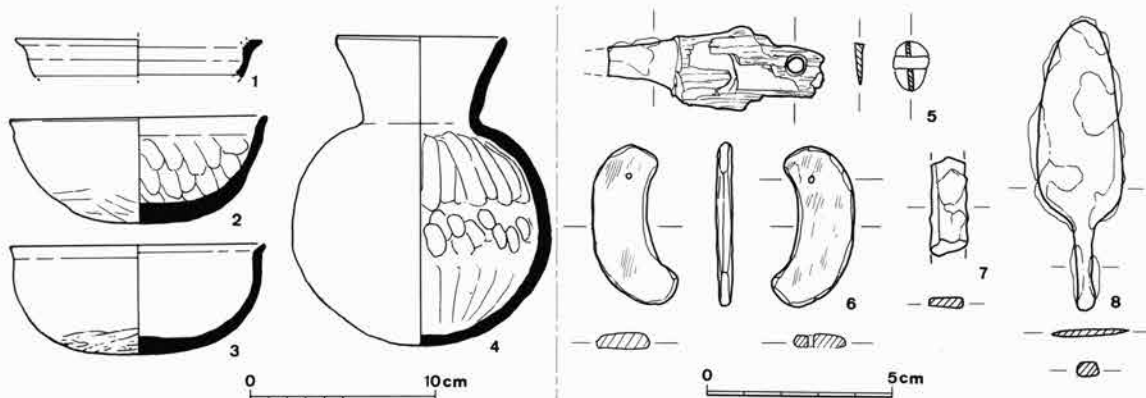
⑤5号墳 主尾根から東に派生する尾根の先端に位置する古墳である。4号墳と同じく、尾根稜線を削平して半月形の平坦面を作り出す形式の古墳である。平坦面は尾根主軸上で約5m、直交する方向で約10mを測る。開発にかかる墳丘の一部を対象として調査を行った。その結果、平坦面の中央部において墓壙とみられる方形土壌を1基検出した。墓壙は調査地外へ及ぶので、完全には検出することはできなかったが、ほぼ全形を把握できた。墓壙は素掘りの長方形土壌で、長軸約5m、短軸は約2m前後と推定される。土壌底部には浅い方形の掘り込みが認められた。地山の掘削土を埋め土としている。水平になるように、ていねいに埋め戻された様子を観察することができた。精査を繰り返したが、木棺痕跡を確認することはできなかった。副葬遺物も認められず、築造時期などは明らかでない。



第33図 5号墳墳丘測量図



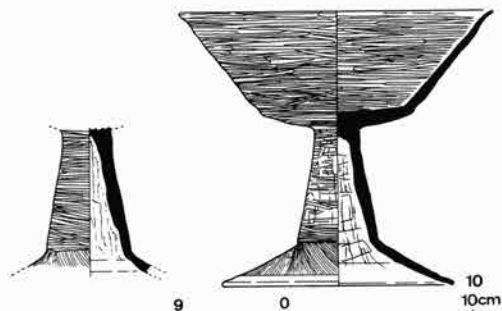
第34図 5号墳主体部実測図



第35図 出土遺物実測図(1)

1：2号墳 2～6：3号墳主体部 7：1号墳第2号主体部 8：1号墳第1号主体部

(2)出土遺物(第35・36図)



第36図 出土遺物実測図(2)

1号墳第1号主体部(注14文献より転載)

2～6は、3号墳主体部出土遺物である。2・3は土師器碗である。口径約13.5cm、器高約6cmである。同形同大で、器表面が赤褐色を呈している。器表に焼成により赤色に発色する粘土を塗布して焼成したものらしい。内面に著しい指ナデ調整が認められる。外面は底面付近をヘラ削りした後に、全面をていねいにナデ調整して仕上げている。4は長頸壺である。器高16.0cm、口径9.0cmを測る。2・3同様、顔料を塗布したような赤褐色を呈する。器体外面をていねいにナデ調整して仕上げている。内面下半部にヘラ削り、上半部に指ナデの著しい痕跡をとどめている。5は刀子である。柄の木部と目釘が遺存している。現存長約12cm。6は、滑石製勾玉である。滑石製の薄い薄片を勾玉形に整形し、貫孔したものである。全長約7cm、中央幅約2.7cm、厚さ約0.7cmを測る。

7は、1号墳第2号主体部から出土した鉄鏃の茎の一部である。扁平な茎である。

8は、1号墳第1号主体部から出土した鉄鏃である。鏃身は柳葉形をなし、茎は細く直線的な作りである。全長約15.3cm、茎の長さは約4.5cm、厚さは約0.5cmである。第36図は高杯である。1号墳第1号主体部で、前年度実施した試掘調査の際に出土したものである。墓壙上面に置かれたものである。高杯は2個体あり、うち1個体は、ほぼ完形に復原することができた。杯部は屈曲して大きく開き、脚部裾部がラッパ状に大きく開くもので、布留式の高杯の特徴を有している。赤褐色の緻密な胎土を用い、器表内外面ともに細密なヘラミガキ調整を施すなど、古相である。布留2式に該当する資料と考えられる。

図版第22-11は、1号墳第3号主体部で検出した鏡である。直径約3.6cmと小形である。平縁の小さな鏡である。鏡背には、紐を中心として2重の圏線、櫛歯文がめぐる。

5. ま と め

今回の調査で明らかになった事柄をまとめ、結びとしたい。

①東禅寺古墳群の造営時期 1号墳の年代的手がかりは、第1号主体部墓壇上面において検出した高杯である。形態や細密な器表面調整の手法から布留2式の高杯と判断することができる。したがって、1号墳は古墳時代前期(4世紀前半頃)に築造された古墳ということが出来る。3号墳は、主体部に供献されていた土師器壺・杯からみて、古墳時代後期(6世紀代)に築造されたものと推測される。2号墳は、墳丘の崩落土層から採取した須恵器杯身から6世紀前半期に築造された古墳であった可能性がある。

以上のことから、東禅寺古墳群は、古墳時代前期から後期にかけて断続的に形成された木棺直葬系の古墳群であると考えられる。

②群構成 当古墳は調査着手時点では1～3号墳の3基からなる古墳群であると推定されたが、樹木伐採後に5号墳が発見され、対象地外で4号墳が3号墳に隣接して発見されるなど、群を構成する古墳の数が増加することが明らかとなった。

5号墳は尾根を削った排土を前方に押し出して整地しただけの簡単な形式の古墳であり、平坦面上で大型の墓壇が確認された。5号墳は、地表観察において古墳であると断定することが難しかったが、調査により肉眼による推測の正しさを裏付けることになった。これにより、類似する地形を有する4号墳(古墳参考地)も古墳であることが確実視されることになった。

4・5号墳と類似する古墳とみられる地形は、これ以外にも、4号墳の下方で4か所、1号墳の西側で1か所、計5か所を確認することができる。丘陵斜面にも平坦面をもつ微地形が認められ、さらに基数が増す可能性もある。以上のことから、東禅寺古墳群は、現状で10基からなる古墳群であると言える。

古墳群の下方は近世以降、墳墓地として土地利用されているが、かつてこの場所にも古墳が分布していたことも考えられ、詳細な分布調査を実施することにより、さらに古墳の数が増える可能性のあることを指摘しておきたい。

③1号墳発見の意義 1号墳は径21mという大型の墳丘をもつ古墳であることが判明した。約6mの墓壇に長さ約5mの長大な木棺が納められた第1号主体部が中心主体と推定される。第3号主体部に納められていた鏡は小ぶりなものであるが、当時、鏡は有力者のみが所持し得たものであり、貴重な資料といえる。1号墳は古墳時代前期の有力家族の墳墓とみることが出来る。阿蘇海沿岸では、宮津市波路古墳、霧ヶ鼻古墳群、柿ノ木古墳群、岩滝町丸山古墳、日ノ内古墳などの前期古墳が知られているが、東禅寺1号墳もこうした古墳群の被葬者とともに古墳時代前期社会において重要な役割を担った人物であったと推定される。

(田代 弘)

注1 調査参加者 阿部崇・糸井勲・稲垣美雪・今井禮子・今崎涼子・岩崎忠男・上田洋子・榎本征巳・奥野和生・奥野二三代・尾関藤一郎・加賀谷綱男・笠井健一郎・笠井幸男・河野内博・桑原建光・

小谷英昭・柴谷幸・杉田宇太子・杉田喜美代・直田正美・鈴木保・千賀光枝・土屋洋一・椿原みさ子・中川敏恵・中嶋美貴・中浜かずみ・新山三郎・浜野良幸・彦坂志津枝・平田智子・藤原誠一・堀敬子・堀智代子・三上衛子・森井美佐子・矢野晴久 調査補助員 梶岐一哉・小笠原順子・佐藤純一・清水邦彦・杉山拓己・藤田勇貴・三阪一徳・宮城一木・三好玄 整理員 井上聡・今崎涼子・岩崎忠男・上田洋子・小笠原順子・神谷昭子・木村悟・佐藤純一・柴田幸・清水邦彦・杉田宇太子・杉山拓己・直田正美・椿原みさ子・中嶋美貴・永田啓子・新山三郎・西脇夏海・彦坂志津枝・兵頭真千・藤村文美・堀敬子・堀智代子・丸谷はま子・三阪一徳・宮城一木・三好玄・山本弥生(敬称略・順不同)

- 注2 田代弘「桑原口遺跡第3次」(『京都府遺跡調査概報』第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注3 各調査における報告書は以下のとおりである。
 第1次調査 堤圭三郎「宮守線路線地域内遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1971 京都府教育委員会) 1971
 第2次調査 石井清司「桑原口遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第75冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
 第3次調査 田代弘「桑原口遺跡第3次」(『京都府遺跡調査概報』第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
 第4次調査 増田孝彦・岡崎研一「桑原口遺跡第4次」(『京都府遺跡調査概報』第88冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
 第5次調査 引原茂治・福島孝行 本書
 第6次調査 福島孝行 本書
- 注4 兵庫県教育委員会岸本一宏氏のご教示
- 注5 黒坪一樹・石崎善久・福島孝行「浅後谷南遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第93冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注6 この地形図は、地元の奥野力太郎氏のご厚意により提供していただいた。記して感謝します。
- 注7 石崎善久「金谷古墳群(1号墓)」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注8 前掲注5
- 注9 石崎善久・岡林峰夫『赤坂今井墳丘墓 第3次発掘調査概要報告』峰山町教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000
- 注10 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所) 1986
- 注11 豊岡卓史「纏向土器資料の基礎的研究」(『纏向』第5版(補遺篇) 奈良県立橿原考古学研究所) 1999
- 注12 野島永・野々口陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」(『京都府埋蔵文化財情報』第74号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注13 福島孝行「丹後地域の古墳時代中・後期の土師器Ⅰ」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注14 岩松保「鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第98冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注15 遺跡の位置と環境は『京都府遺跡地図』第3版 第1分冊(京都府教育委員会 2001)を参考にした。

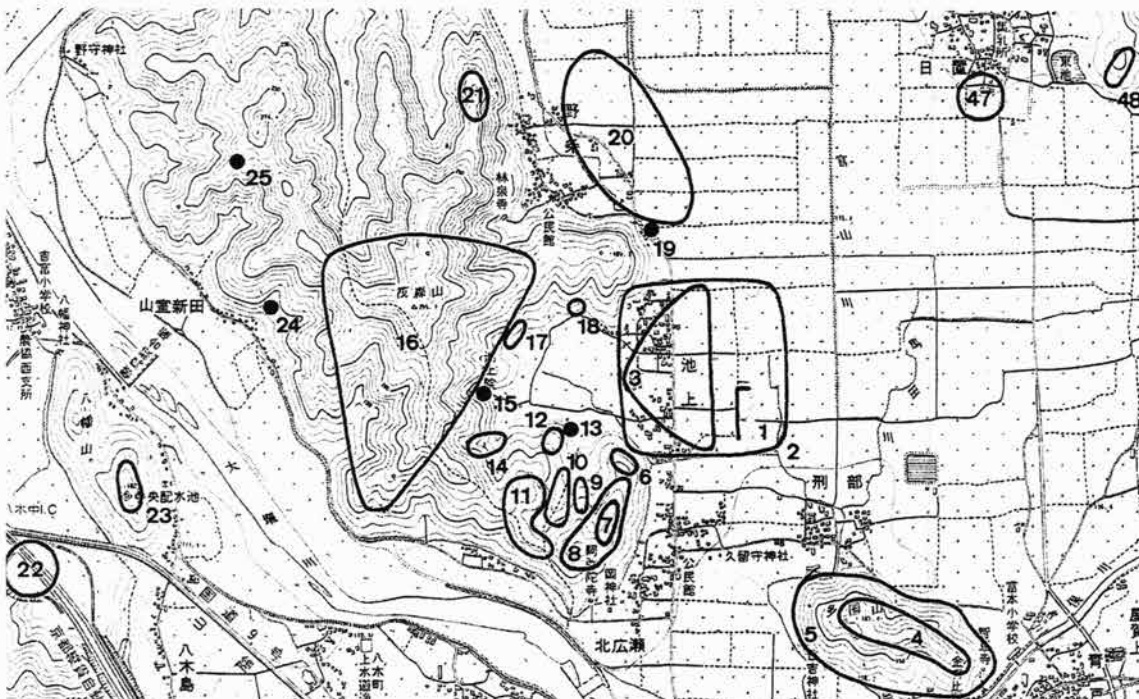
2. いけがみ 池上遺跡第11次発掘調査概要

1. はじめに

池上遺跡は、八木町池上地区に位置する。これまでに10回の発掘調査が実施され、旧石器時代から中世にかけて長期間にわたって形成された複合集落遺跡であることが判明している。今回、遺跡推定範囲内で府営は場整備事業に伴う水路工事が計画されたため、当調査研究センターでは、事業主体である京都府南丹土地改良事務所の依頼を受け、発掘調査を実施することとなった。調査は、調査第2課第1係長水谷壽克と同主任調査員田代弘が担当し、平成13年10月18日から平成14年2月8日まで実施した。調査経費は、京都府南丹土地改良事務所が全額負担した。

調査にあたっては、京都府南丹土地改良事務所・八木町教育委員会・京都府教育委員会などの関係機関、池上地区は場整備推進協議会・池上地区自治会の役員の方々にご協力いただいた。また、現地調査においては作業員として地元の方々の多くの参加をいただき、調査補助員として有志の参加を得ることができた。記して、謝意を表する。^(注1)

2. 遺跡の位置と環境



第37図 調査地および周辺遺跡分布図(1/25,000) (注3-1文献第1図を改変)

- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 調査地 | 2. 池上遺跡 | 3. 狐塚古墳群 | 4. 多國山古墳群 | 5. 刑部城跡 |
| 6. 寺内東古墳群 | 7. 北広瀬城古墳群 | 8. 北広瀬城跡 | 9. 南尾東古墳群 | 10. 南尾古墳群 |
| 11. 南尾西古墳群 | 12. 寺内古墳群 | 13. 寺内経塚 | 14. 寺内西古墳群 | 15. 池上院裏古墳 |
| 16. 筏森山古墳群 | 17. 池上院北古墳 | 18. 八幡宮古墳 | 19. 三万崎古墳 | 20. 野条遺跡 |
| 21. 野条砦跡 | 22. 沢ノ谷遺跡 | 23. 八幡山古墳群 | 24. 新田古墳 | 25. 草福古墳 |
| 47. 日置遺跡 | 48. 東山古墳群 | | | |



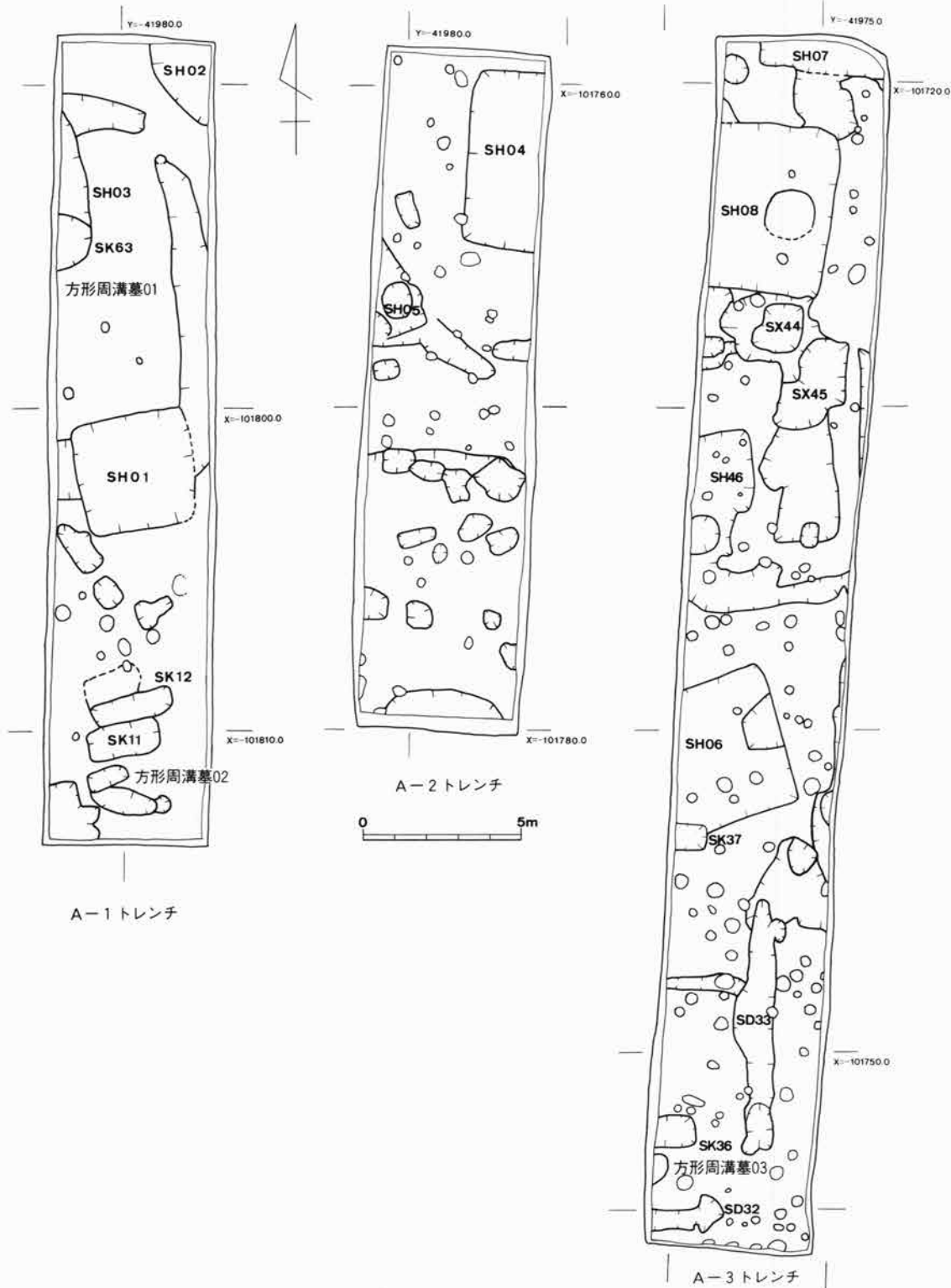
第38図 トレンチ配置図

調査成果の概要を報告する前に、池上遺跡の位置と遺跡周辺の歴史的環境についてみておくことにしたい。

池上遺跡は、町中心部の北郊、約2kmの場所にある大字池上地内にある。筏森山の東麓に広がる平地の一角に位置し、東西約550m、南北約600mの範囲に、弥生時代中期から古墳時代を中心とする遺構群が展開すると推測されている。^(注2) 第3～5次調査では弥生時代中期の方形周溝墓群や古墳時代後期の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡、奈良時代頃の掘立柱建物跡など多数の遺構が検出され、長期にわたって形成された複合集落遺跡であることが明らかにされた。^(注3) 第8次調査では、ナイフ形石器が発見され、この場所に人々が暮らし始めた時期が後期旧石器時代であることが確実視されるようになった。

近年になって、池上遺跡の周辺には数多くの遺跡が分布することが明らかになってきた。池上

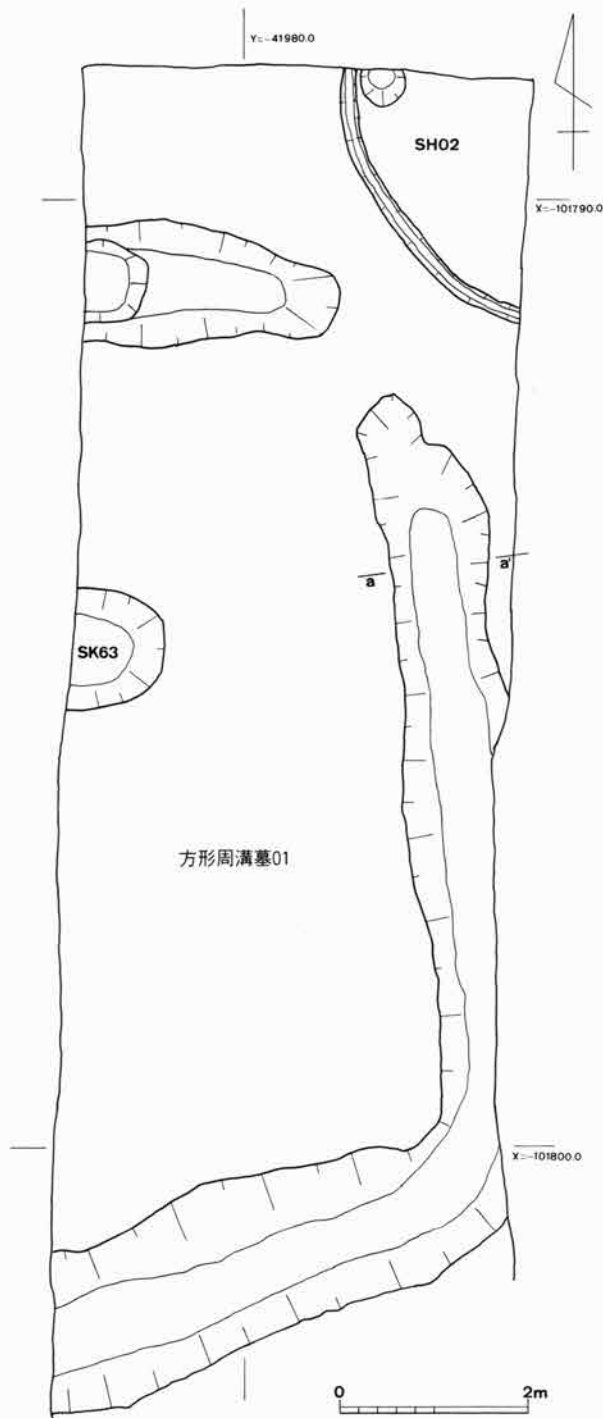
遺跡の南東では池上古里遺跡、北側では野条遺跡が相次いで確認された。発掘調査の結果、いずれも弥生時代から中世にかけての遺跡と考えられる。また、筏森山山頂付近から南東部にかけて、円墳や方墳、前方後円墳などの古墳が数多く営まれていることが確認されている。遺跡の南東に位置する多国山でも多数の古墳の分布が確認されている。池上遺跡の古墳時代集落との関連が注



目されるところである。

古代から中世にかけての遺跡は、あまり発見されていないが、この時期の遺構は、池上遺跡を中心として広く分布する可能性がある。遺跡周辺は、承安4(1174)年に丹波知行国主藤原成親の私領寄進により後白河院法華堂領として立荘された吉富新荘にあたる。西方には、「吉富庄絵図」に吉富新荘領域内の寺院として描かれた池上寺がある。吉富庄に関連する遺構の発見が期待されるところである。

戦国期には、北広瀬城、刑部城、西田城など、多数の山城が営まれた。

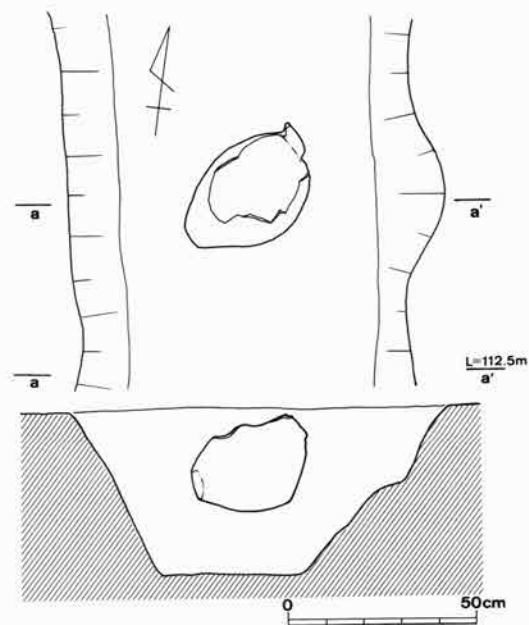


第40図 SH02・方形周溝墓01実測図

3. 調査の経過

10月18日、調査対象地に縄張りを行い、トレンチの明示などの調査着手準備をした。23日、重機を投入し、A地区の表土層を重機によって除去した。耕作土層とそれ以下の土を分離しながら、遺構のベース面である黄色粘質土まで掘削をすすめた。重機掘削は24日中に完了した。25日以降、人力で精査を行い、遺構や遺物の検出に努めた。B地区は、調査対象地内に水路があるので、水路付け替え工事など、ほ場整備工事の進行にあわせて順次着手した。

発掘作業手順は次のとおりである。まず、重機を用いて水田耕作土層と遺構埋土であ



第41図 方形周溝墓01遺物出土状況実測図

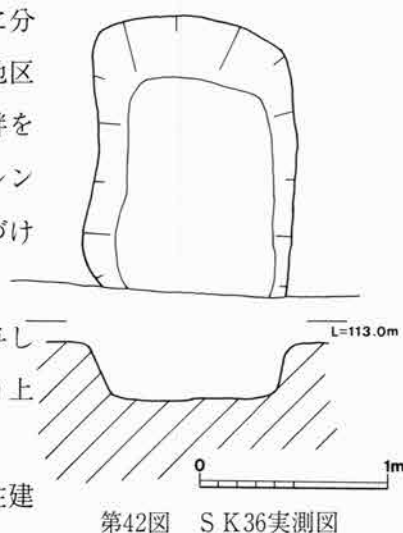
る遺物包含層を除去した。その後、人力による作業に着手した。遺構面である黄色粘土層上面まで平坦になるように整え、トレンチ内に排水用の側溝を掘削するなどの調査準備作業をした。次に、黄色粘土層直上で精査を繰り返し、遺構を検出した。遺構を検出した段階で、平板略測して記録し、遺構番号を付与した。そして、各遺構の掘削作業、遺物の取り上げなどを行った。調査の進捗状況に応じて、写真撮影、実測図作成などの記録作業をすすめた。調査の終了が近づいた1月23日、株式会社ジェクトに委託し、空中写真撮影をした。1月30日に、関係者説明会を開催した。その後、残務整理などを行い、2月8日、調査をすべて終了し、撤収した。

4. 調査概要

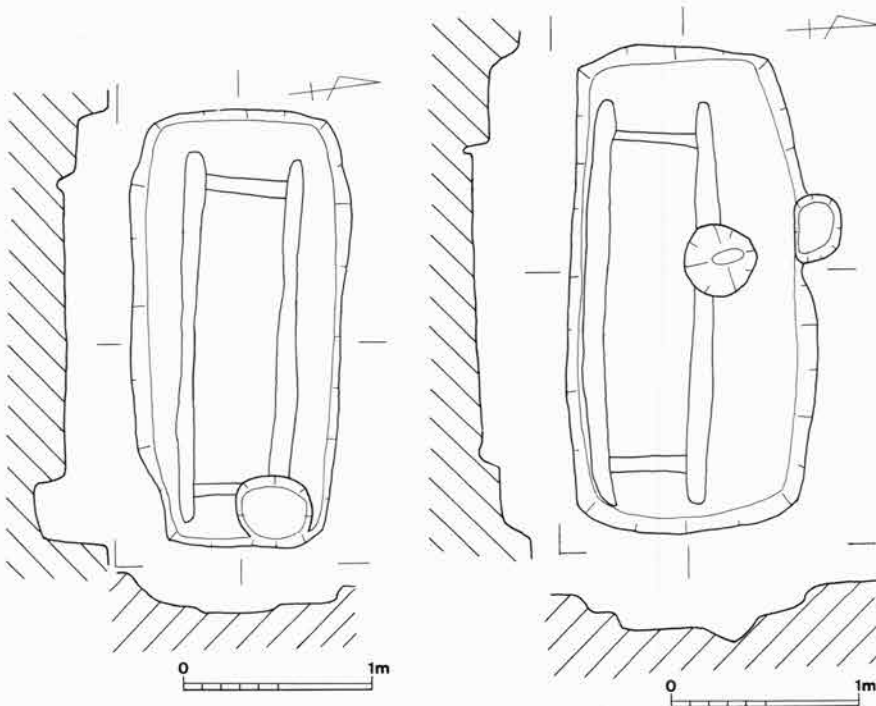
今回の調査は、ほ場整備事業に関連する水路整備の事前調査であり、調査対象地は長く狭い。対象地は、大きく南北に長いブロックと東西に長いブロックに分かれる。前者をA地区、後者をB地区と呼ぶことにした。A地区は南北に1本のトレンチを設定する予定であったが、水田畦畔を保存する必要から、3本のトレンチに分割した。これらのトレンチを南から第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチと名づけた。B地区は、東西方向に1本の長いトレンチを設定した。

検出遺構番号は、第1トレンチで検出した遺構に最初に付与した番号を起点として通し番号とした。遺物は遺構番号名で取り上げた。

精査の結果、A・B両地区において、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、溝、墓とみられる土壌、ピットなどの遺構を多数検出することができた。遺構は、包含されていた土器の年代観からみて、弥生時代中期をもっとも早い時期として平安時代後期頃までのものがあることがわかった。これら検出遺構の中から主なものについて説明することにした。



第42図 SK36実測図



第43図 SK11実測図

第44図 SK12実測図

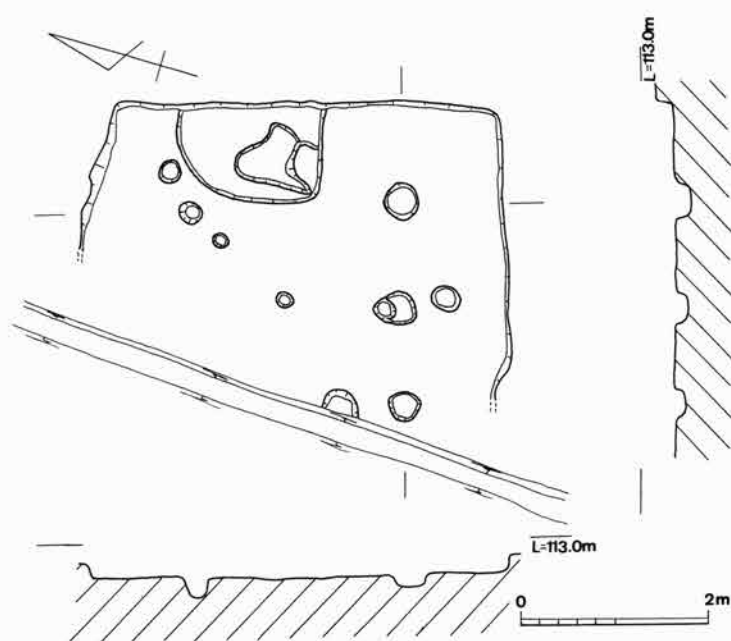
(1) 検出遺構

① A 地区

弥生時代の遺構には、竪穴式住居跡(S H02)と方形周溝墓(方形周溝墓01~03)、土坑(S K11・12)などがある。

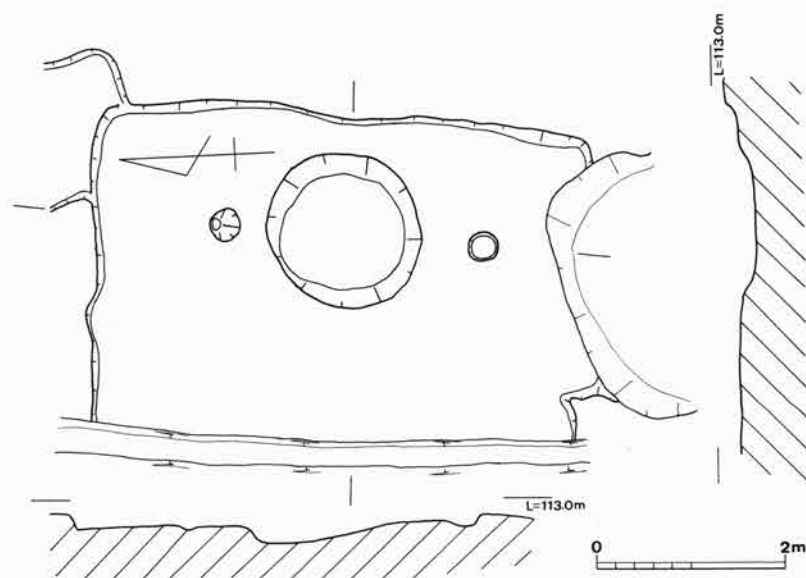
S H02 円形の竪穴式住居跡と推測される遺構である。床面で、周壁溝と柱穴とみられるピットを1基検出した。隣接地での調査成果からみて、弥生時代中期頃に形成された遺構と考えられる。

方形周溝墓01 北、東、南の溝の一部を検出した。東と南の溝の中ほどで弥生時代中期の土器を検出した。土器は完存に近いもので、溝底から30cmほど高い所に位置している。土器が置かれて



第45図 S H06実測図

ていた所は、溝が幅広く掘られ、溝底が水平に整えられていた。上からみると主体部掘形と同様に、方形に作り出されており、木棺の存在が推測される。池上遺跡の方形周溝墓には周溝内埋葬事例がいくつか確認されており、本例も同様の遺構として評価することができるだろう。S K63は、この方形周溝墓の埋葬主体とみられるものである。埋土は、いずれも漆黒色の粘質土である。



第46図 S H08実測図

方形周溝墓02 方形周溝墓01の南に隣接する弥生時代中期の方形周溝墓である。S K11・12やその付近に分布する楕円形の土坑がこの墓の埋葬主体であろう。S K11・12では木棺の痕跡を検出している(第43・44図)。現在すすめられている第12次調査で、これらの土坑主軸に平行する

溝が確認されている。方形周溝墓01の南を限る溝を共有して墓域を形成するものと推測される。

方形周溝墓03 S D32・33を周溝と判断した。S K36・37など、東西に主軸をもつ方形土壇が、この墓の主体部と考えた。

古墳時代の遺構には竪穴式住居跡(S H01・03～08)、土坑(S K44・45)などがある。

竪穴式住居跡は、いずれも方形である。須恵器破片を含むものがあり、いずれも古墳時代後期に属するものと推測される。主軸方向で2群が認められる。ほぼ磁北に主軸をもつもの(S H01・03・05・06)と、主軸が東に傾き座標北にほぼ平行するもの(S H04・08)である。S H01は、西壁

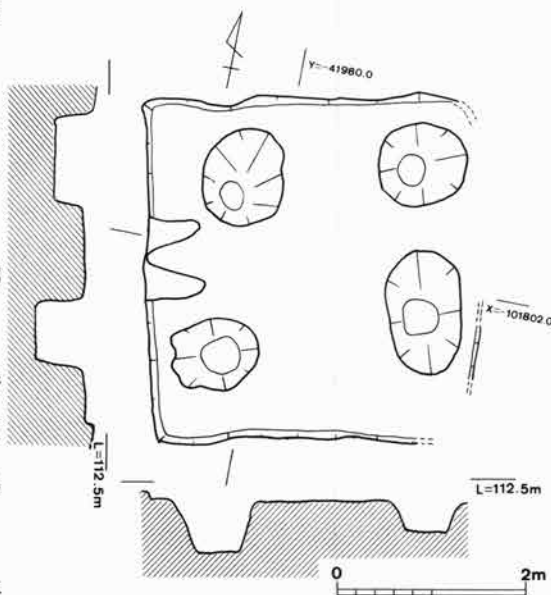
に良質の粘土を用いて作られた竈が認められた。竈は壊れており、基底部分だけが残っている。S H08は、床に円形の土坑が掘られていた。S X44・45は、大型の土坑である。八木町教育委員会が実施した試掘調査で確認し、埋め戻した遺構である。平面形が不整形で底面も一定しない土坑であり、いくつかの不定形土坑が集積して形成されたものと考えられる。土器作りや構造物に用いる粘土を採掘するなどして生じたものであろうか。

②B地区

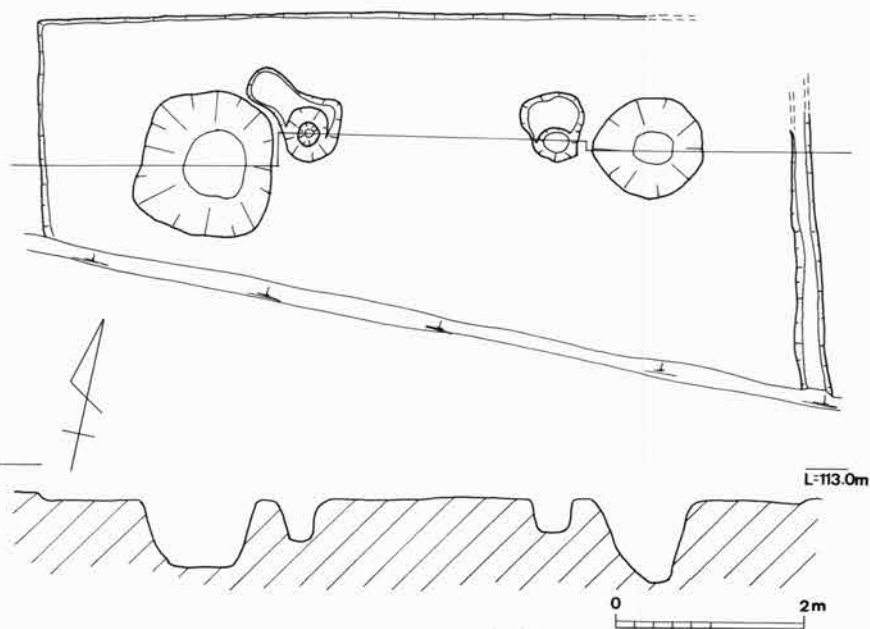
弥生時代中期の溝(S D66)と土壇(S K67)、古墳時代の竪穴式住居跡(S H65)、溝などを検出した。S K67は長方形の墓壇と考えられる。S D66からは甕が1個体出土している。弥生時代中期のもので、タタキ整形痕が著しい。S H65は一辺約8mの大型の竪穴式住居跡である。周壁溝がめぐる。支柱穴は、直径1.6m、深さ0.8mと大きなもので、近接して添柱とみられる柱穴が検出された。この住居跡から、古墳時代後期頃の遺物が少量出土した。

(2)出土遺物

各遺構から弥生時代から古墳時代にかけての土器類が出土している。包含層か



第47図 S H01実測図



第48図 S H65実測図

らも、弥生時代中期を最古として、平安時代までの遺物が出土している。これらの遺物は現在、洗浄作業を開始した段階である。今後、復原作業・記名などをして、主要な遺物について図化記録作業を行う予定である。



第49図 A地区調査風景(南から)

5. ま と め

調査の結果、A地区では、弥生時代中期の遺存状態の良好な方形周溝墓、古墳時代後期

頃の住居跡などを検出することができ、現在の池上集落方面へ遺構が展開する様子を確認することができた。池上遺跡推定範囲の東端部に位置するB地区でも、同様に、弥生時代中期の墓と推定される遺構や古墳時代の住居跡が検出され、これまで推定されたより以上に遺構密度が高いことを確認することができた。

(田代 弘)

注1 作業員 今福豊・西河みつ・麻田節子・麻田早苗・西河みゆき・橋本宇平・竹井笑子・松本安治・松本敏子・谷美智子・若井邦明・山本千代子・西垣久江

補助員 天池佐栄子・宅間のり子・中井優志・森口亮

注2 谷口悌『八木町遺跡地図―町内遺跡詳細分布調査報告書―』八木町教育委員会 1997

谷口悌『池上遺跡発掘調査概要―第2次調査―』八木町教育委員会 1998

注3 1)谷口悌ほか『池上遺跡発掘調査報告書―第3次・第4次調査―』八木町教育委員会 2000

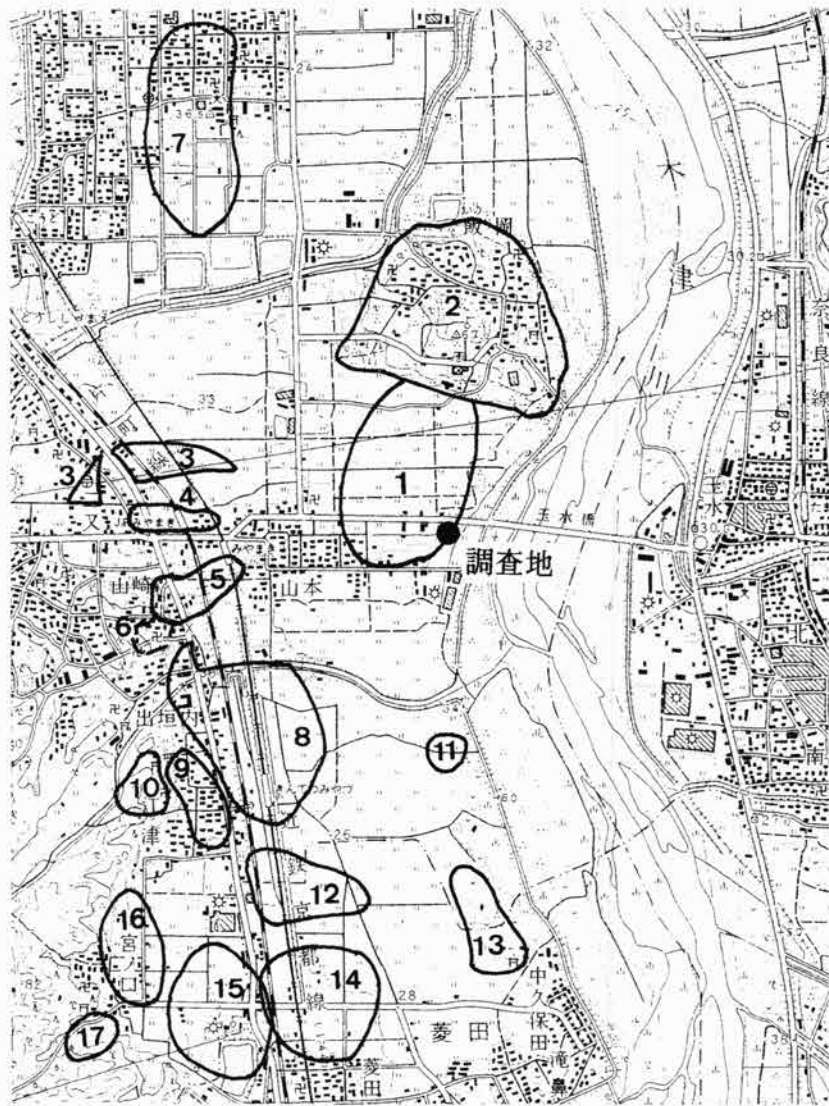
2)中川和哉ほか「池上遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

3. ^{ふるやしき}古屋敷遺跡発掘調査概要

1. はじめに

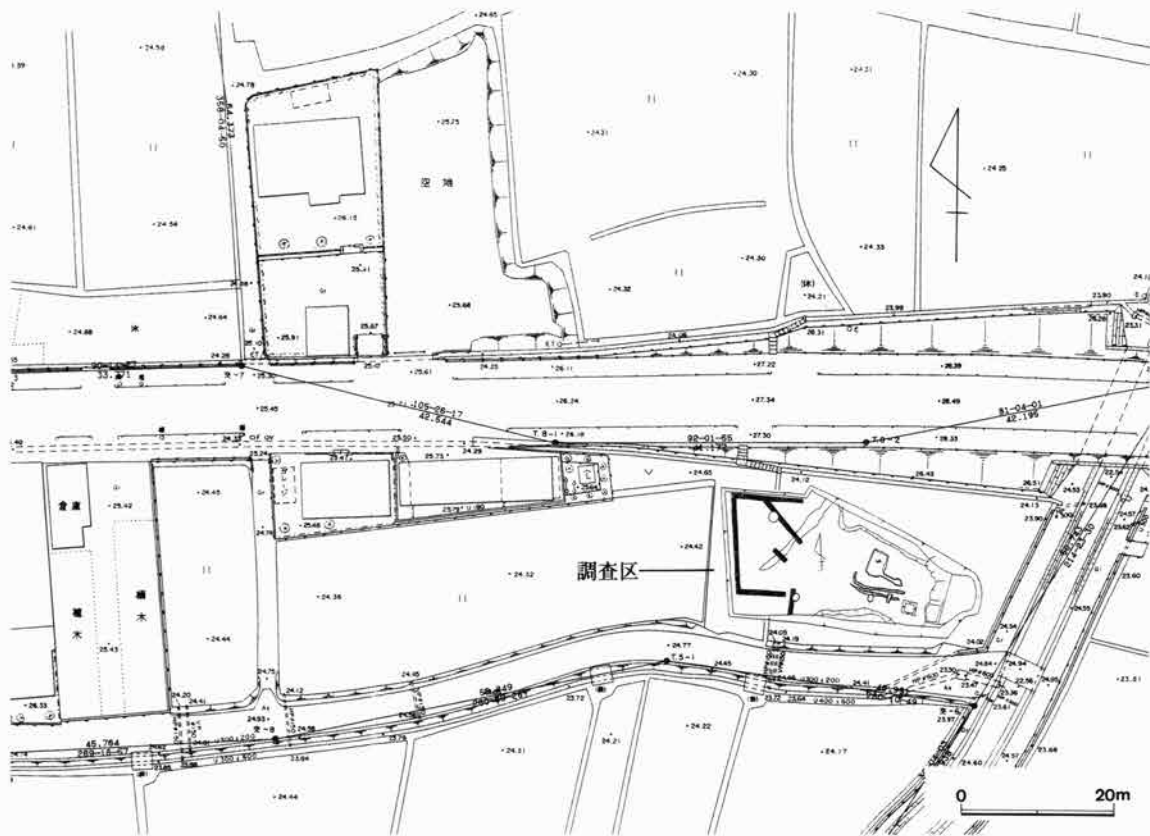
今回の調査は、府道生駒井出線道路整備促進工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。古屋敷遺跡は、京田辺市三山木垣内に所在する。南北500m、東西200mの範囲に広がる中世の集落跡として知られている(第50図)。昭和53年に同志社大学校地学術調査委員会・田辺町(現京田辺市)教育委員会によって発掘調査が行われ、中世における田畑の耕作に関連する畦畔や溝、それらに伴う遺物が報告されている^(注1)。当初は遺跡周辺における条里地名や水田畦畔の存在から、条里遺構や古い水田遺構の検出に主眼が置かれた。この調査以降、古屋敷遺跡周辺の発掘調査はまったく実施されていない。今回の調査地は古屋敷遺跡の東端であるが、古代交通の要所に設けられる駅家(山本駅)推定地の東側に当たる。木津川を渡って東山・北陸道に通じる地点としても重要な位置にあることから、関連遺構の検出に努めた。

現地調査は平成13年9月17日から12月4日までである。調査面積は約



第50図 調査地位置図(1/25,000)

- | | | |
|-----------|---------------|------------|
| 1. 古屋敷遺跡 | 2. 飯岡遺跡・飯岡古墳群 | 3. 田中遺跡 |
| 4. 二又遺跡 | 5. 三山木遺跡 | 6. 山崎古墳群 |
| 8. 宮ノ下遺跡 | 9. 佐牙垣内遺跡 | 10. 三山木廃寺跡 |
| 12. 桑町遺跡 | 13. 元屋敷遺跡 | 14. 山路遺跡 |
| 16. 屋敷田遺跡 | 17. 白山遺跡 | 11. 下河原遺跡 |
| | | 15. 宮ノ口遺跡 |



第51図 調査区配置図

500 m^2 である。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、同主査調査員黒坪一樹が担当した。現地調査期間中は、京都府土木建築部・京田辺市教育委員会などの諸機関には多大のご協力をいただいた。また、京都遺跡サービスの作業員や調査補助員には熱心に作業していただきお世話になった。さらに、整理にあたっては整理員^(注2)の協力があった。以上の方々に心より御礼申し上げたい。調査概要は、出土遺物を伊野が、その他を黒坪が執筆し、遺物写真については当調査研究センター調査第1課資料係主任調査員田中彰が撮影した。なお、調査に係る費用は全額京都府土木建築部が負担した。

2. 調査経過

今回の調査地は、飯岡遺跡のある飯岡丘陵を北に、木津川の現在の河川敷を東にひかえた沖積地で、標高は24m前後を測る。調査区北側の府道に沿っている(第50・51図)。

平成12年度に京都府教育委員会の試掘調査が行われ、2か所ある試掘グリッドのうちの東側から暗褐色粘質土を埋土とする土坑が見つかり、それに伴う瓦器碗の破片などが出土した。1.2mの盛土を含め、掘削深度約1.9mほどのところからである。この成果を受けて今回の発掘調査となった。掘削は重機により当地の東側に盛られている土砂を除去した後、調査区の掘削にかかった。橙褐色の鉄分斑粒を含む橙褐色粘質土(第6層)から遺構が掘り込まれていたという試掘調査の成果を重視した。調査区西側では表土下約70cmで橙褐色粘質土が検出されたので、その層を追跡することにした。人力掘削にて、この橙褐色粘質土の面を精査していった。瓦器碗の破片など

が出土したものの、明瞭に遺構を検出することができなかった。そこで、さらに掘り下げ、その下層(暗灰褐色粘質土と暗青灰色粘質土)で、再度遺構・遺物の検出に努めた。その結果、中世の遺構・遺物を多数検出することができた。遺構は溝4条・井戸1基・土坑2基・集石遺構1基・沼地状落ち込み2基・旧河川跡1基である。調査区の測量、遺構の実測・写真撮影を随時行い、遺構・遺物の存在状況が明らかとなった段階で、11月26日に関係者説明会を実施し、12月4日にすべての現地作業を終了した。

3. 層位

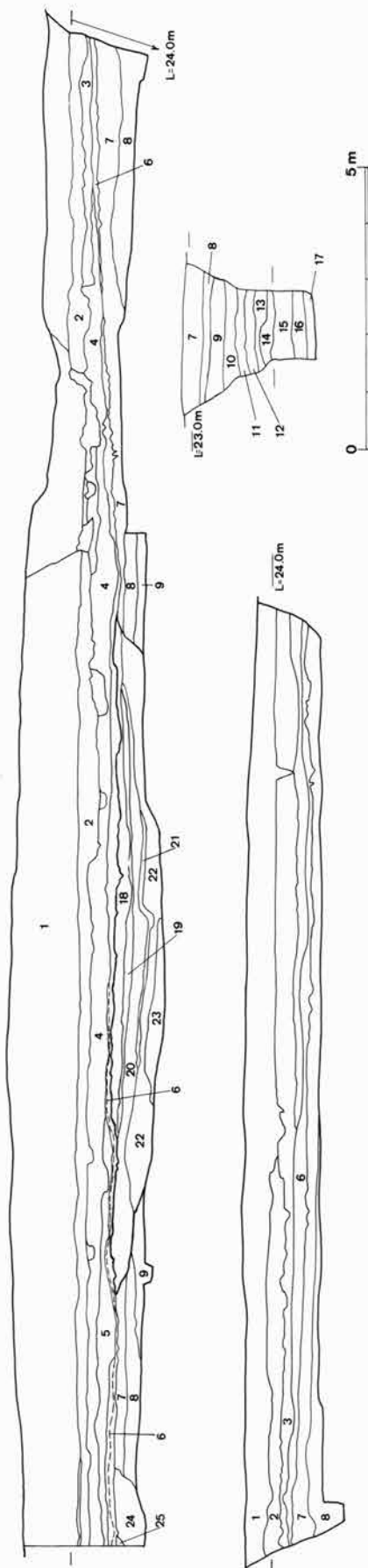
調査区の層位については、第52・57図に示した。沼状落ち込み以外は、全体に木津川の氾濫の影響を受け、ある程度の流れが常にあったようである。それは、粘質土とはいっても粗砂・細砂粒を多く含んでいる事から知れる。第7～9層が遺構を包蔵する層位である。それより下層になると、暗青灰色細砂・粗砂・粘質土などの互層となり、安定した遺構面は存在しない(第57図)。

4. 検出遺構

検出した遺構は、平安時代後期～鎌倉時代初頭および室町時代～安土桃山時代のものである。

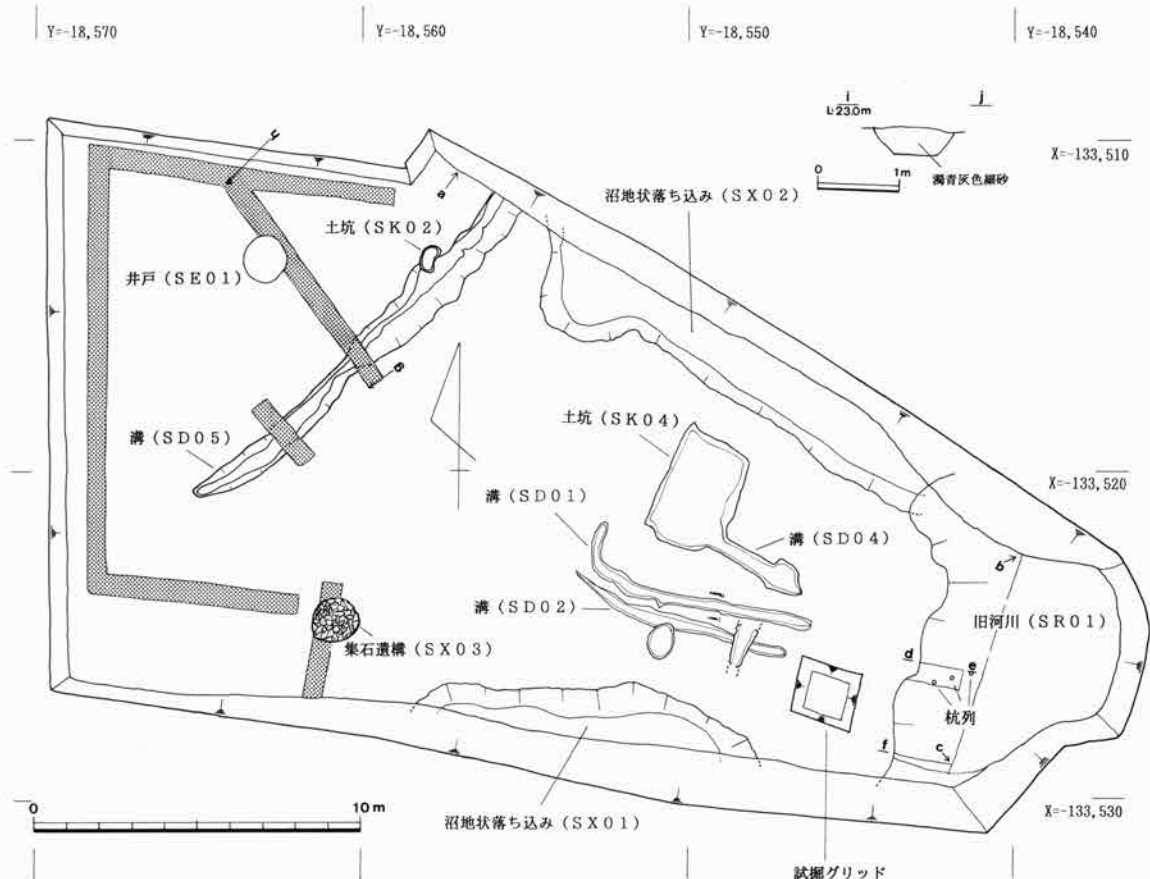
(1) 平安時代後期～室町時代

当該期の遺構は、集石遺構 S X 03、溝 S D 01～05、井戸 S E 01、土坑 S K



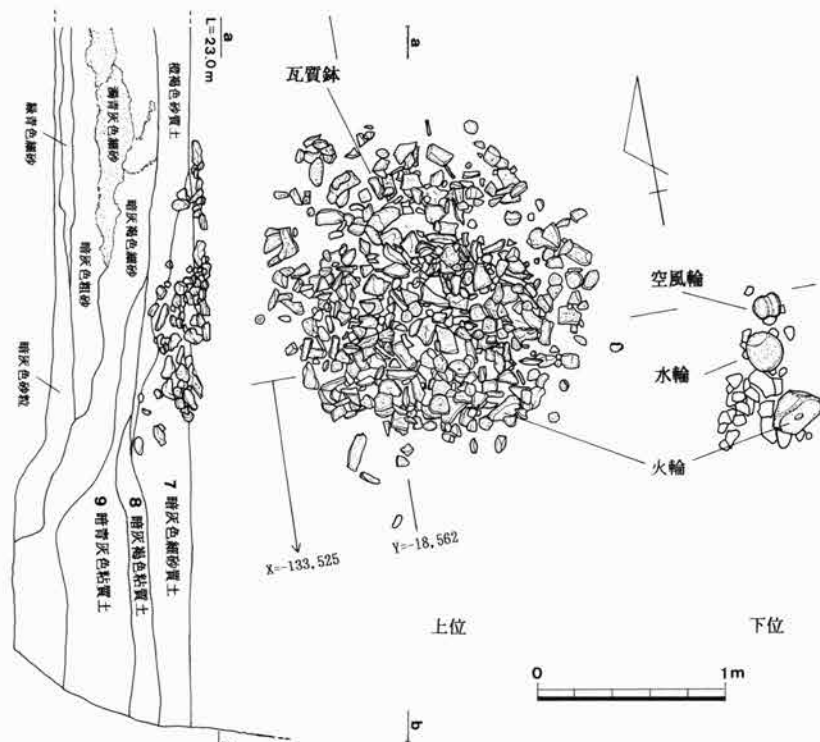
第52図 南壁・西壁・試掘グリッド南壁土層断面図

- 1: 褐色土盛土 2: 暗灰褐色砂質土(近現代の耕作土) 3: 暗黄褐色粘質土(橙褐色粘質土・マンガン粒含む) 5: 淡灰褐色粘質土
6: 橙褐色粘質土(鉄分・マンガン粒多く含む) 7: 暗灰色細砂質土(橙褐色鉄分疎らに含む) 8: 暗灰褐色粘質土 9: 暗青灰色粘質土(細砂含む)
10: 灰黄色粗砂 11: 暗黄灰色粘質土 12: 暗褐色砂質土 13: 橙灰色細砂～青灰色粘土の互層 14: 暗青灰色粘土 15: 暗青灰色粘土 16: 黒紫色粘土
17: 暗灰色粘土 18: 淡青褐色粘質土 19: 暗黒灰色粘土 20: 濁暗灰色粘質土青灰色粘質土 21: 暗黒灰色粘質土 22: 濁暗青灰色粘質土 23: 暗青灰色細砂
24: 濁淡灰黄色極細砂 25: 濁青灰色極細砂



第53図 検出遺構配置図

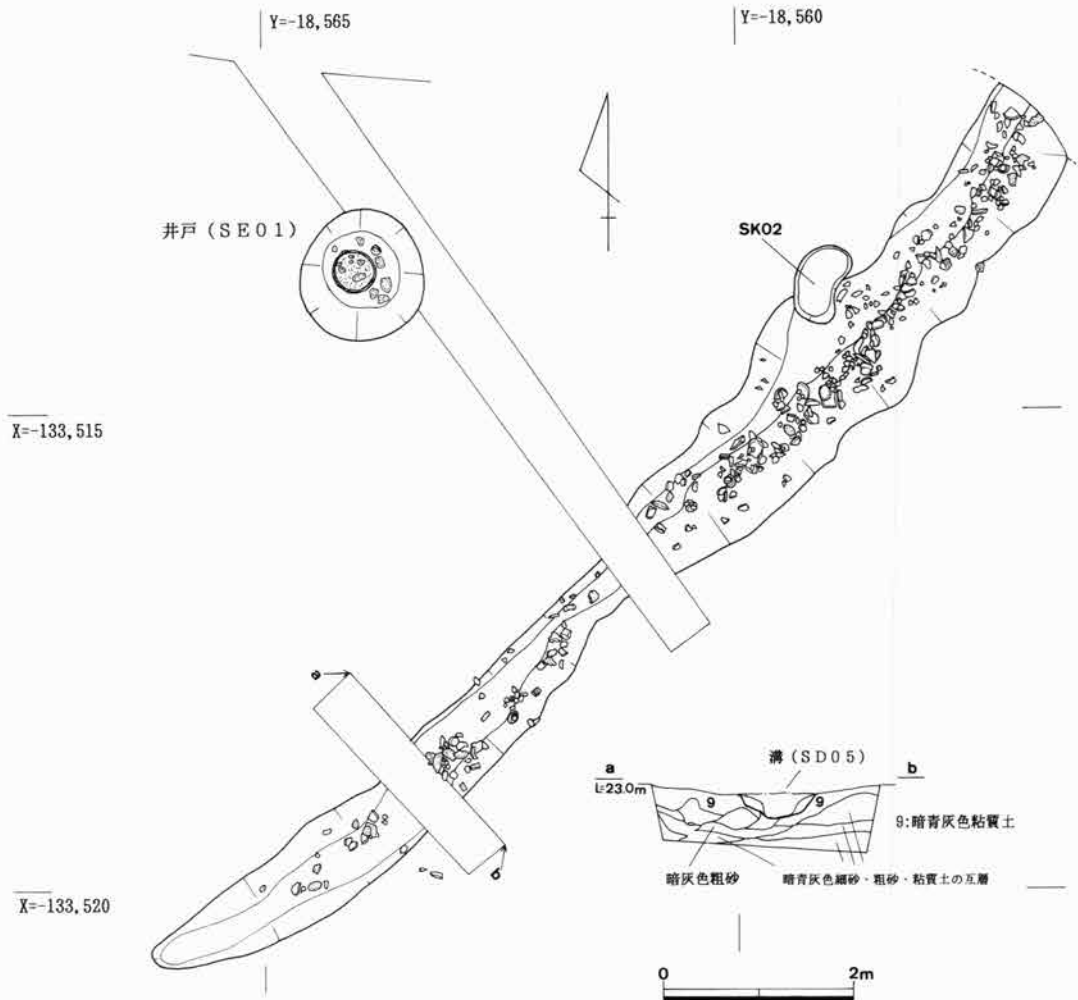
(網部は断ち割り。小文字アルファベットは断面位置を示し、層名は第52図に対応する。)



第54図 集積遺構 SX03 平・断面図

02である。第7～9層面から検出した。

集石遺構 SX03は、大小の角礫が直径約1.8mの範囲に集積したものである(第54図)。礫の積み方はまったく無造作で、規格性はない。本遺構は、地形が急速に南側の湿地に向かって傾斜していく、いわば地形の変換点付近に形成されており、集石の基底も北から南に向かって下がっていく。集石の厚さは中央からやや南寄りの最も厚い



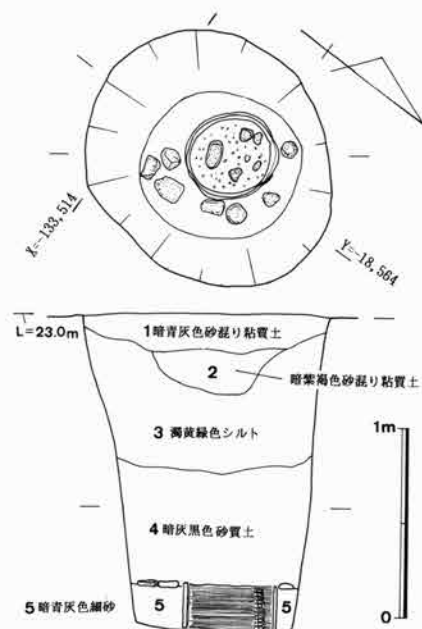
第55図 溝S D05・土坑S K02・井戸S E01実測図

部分で約30cmを測る。集石中には土器類(瓦質火鉢・白磁碗・須恵器など)や奈良時代の布目瓦(平瓦)の破片も散見される。さらに上位の石を除去すると、基底部に五輪塔の部材(空風輪・火輪・水輪)も見られた。五輪塔は花崗岩を石材とし、表面に梵字は刻まれていない。

溝S D01は長さ8.6mにわたって検出した(第53図)。幅0.4m、深さ30cmを測る。西側は大きく直角近くに屈曲する。中からは12世紀後半の瓦器碗の破片が若干出土した。溝S D02は長さ6.9m、幅40cm、深さ20cmである(第53図)。溝S D01に平行する。やはり西側は北方向に屈曲するようである。溝S D04は長さ3.3m、幅50~80cm、深さ30cmを測る(第53図)。西側は2.3×3.5mの方形土坑S K04に接続している。方形土坑の中からは溝S D04と同時期の瓦器碗などが出土した。この土坑の用途については明らかではない。溝は田畑の耕作に伴うもので、屈曲は田畑の区画を示すものであろう。なお、溝S D01~04および方形土坑S K04の埋土は濁青灰色細砂である。

溝S D05は先の3条の溝とは明瞭に方向や規模を異にする。北東から南西方向に走り、長さ13mにわたって検出した(第55図)。幅0.5~1.5m、深さ30cmを測る。埋土は淡灰褐色砂質土で、中からは瓦器皿・瓦器碗・土師器皿・須恵器・陶磁器類などが多量に出土した。耕作に伴う溝ではなく、集落内における排水の機能を持った施設と考えられる。

土坑S K02は、溝S D05の一部を壊して掘られている(第55図)。不定形な楕円形を呈する。埋



第56図 井戸 S E 01 平・断面図

土は暗灰褐色砂質土で、中から瓦器碗や土師器皿などがまとまって出土した。

井戸 S E 01 は溝 S D 05 から北西約 3 m で検出した (第 56 図)。直径 1.3~1.4 m、深さ 1.6 m を測る。埋土は 4 層に分かれる。出土遺物の多かった層は第 2・3 層である。井戸の廃棄後に埋めていく過程で、多量の土器類を廃棄している。瓦器皿・瓦器碗を主体に、陶磁器・須恵器などがある。底の集水施設は 1 段の曲物が据えられていた。曲物の高さは約 25 cm を測り、厚さ 3 mm の薄い材が曲げられ、直径約 45 cm の円形になっている。合わせ部分は 1.5 cm 間隔に細いスリットが開けられ、幅 1.2 cm の桜皮でいねいに繋ぎ止められている。裏込めとして暗青灰色細砂を詰め、扁平な川原石が上面の周囲に配されていた。この曲物の底は粗い砂礫面となり、その面上で瓦器皿と丸瓦の破損品が 1 点ずつ出土した。井戸が検出されたことで、溝 S D 05 は集落内における宅地内の外縁部を画したものである可能性がより濃厚になった。

(2) 安土桃山時代の遺構

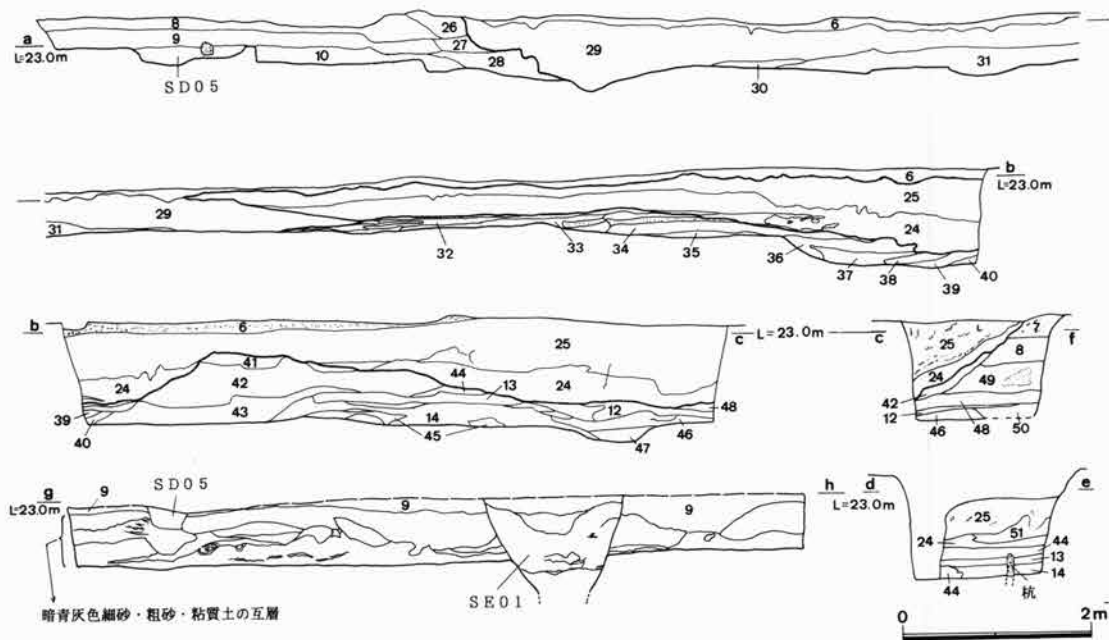
沼地状落ち込み S X 01・02 と旧河川跡 S R 01 がある (第 53 図)。第 7 層直上から掘り込まれている。沼地状落ち込みは調査区の南北壁にかかってそれらの一部が検出された。S X 01 はいびつな輪郭線を描き、立ち上がりの断面形は椀形である。最も深いところは南壁でみると約 90 cm を測る。埋土は第 52 図の 18~23 層が相当し、全体に暗青灰色粘質土が主体で間層に暗黒灰色の粘質土が薄く存在している。炭化物や木片などの自然遺物はまったく残存していない。流れがほとんどなく、土砂がゆっくり堆積していったものである。出土遺物は極めて少なく、22 層中から 2 点の土器小片が得られたにすぎない。瀬戸美濃系の天目茶碗と、青花磁器皿の小片 (第 59 図 8) である。

S X 02 も同様にいびつな輪郭を示し、断面形は椀形である。深さは北壁でみると約 40~50 cm である。埋土は第 57 図 29~31 層に相当する。出土遺物は土師器の小片数点のみである。東側を旧河川跡 S R 01 で切られている。

旧河川跡 S R 01 は調査区東端で南北方向に長く検出された。いびつな外郭ラインで、肩からの落ち込みは急角度をなす。埋土は第 24・25 層で、極細砂質である。出土遺物は僅少で、天目茶碗の小破片が出土した。沼地状落ち込み S X 02 との関係では、S X 02 に後続して形成されている。時期は 17 世紀前半である。

なお S R 01 の底をさらに断ち割った結果、下層の橙灰色細砂~青灰色粘質土の互層 (第 14 層) から、直径 10 cm ほどの杭が 3 本並んで検出された。杭の打ちこまれたレベルの層中から瓦器碗が出土しているので、中世期における何らかの施設になる可能性がある。

(黒坪一樹)



第57図 土層断面図

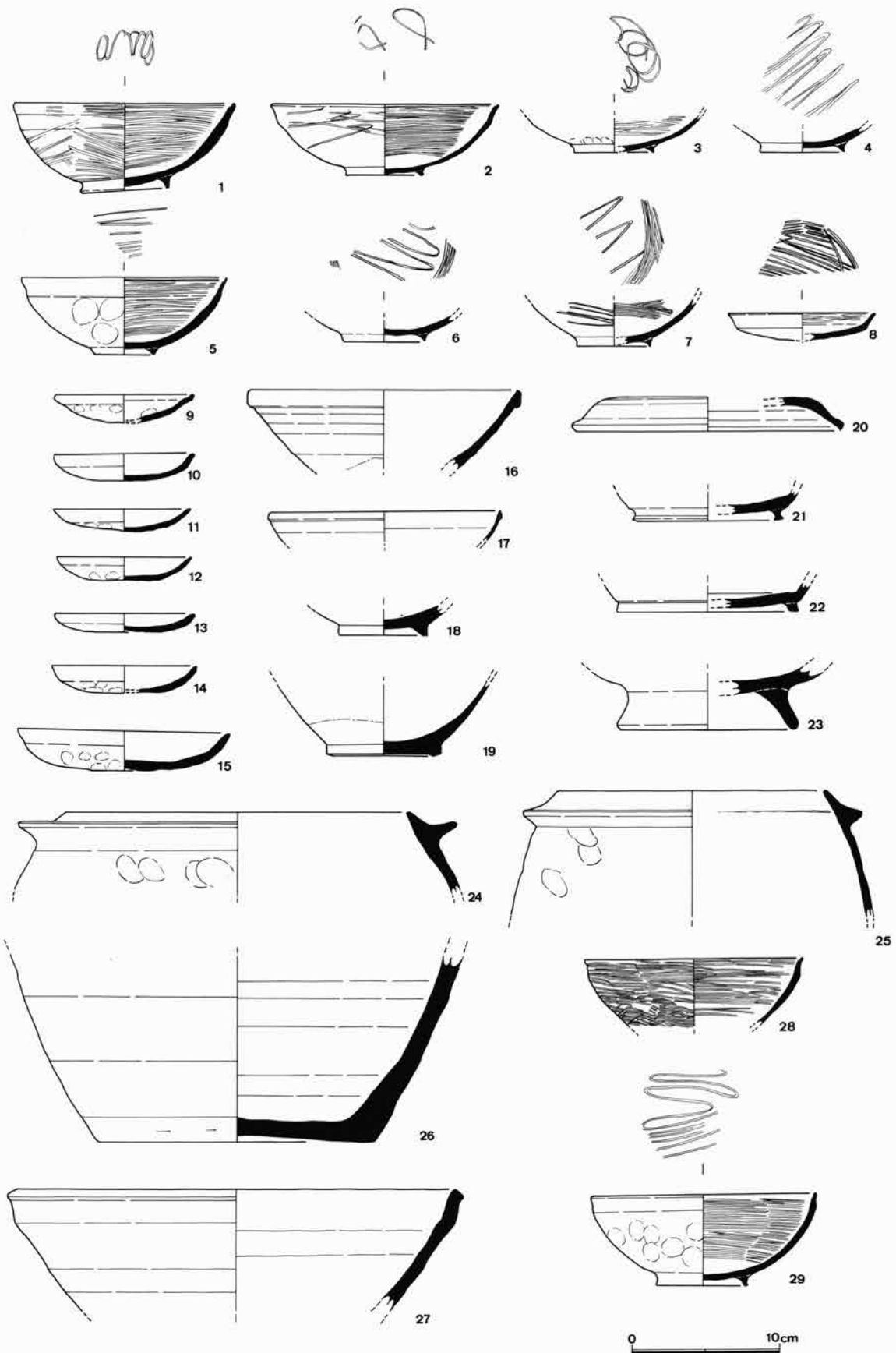
- | | | | |
|-------------------|----------------|----------------|-----------|
| 6：橙褐色粘質土 | 7：暗灰色細砂質土 | 8：暗灰褐色粘質土 | 9：暗青灰色粘質土 |
| 10：灰黄色粗砂 | 12：暗褐色砂質土 | 13：橙灰褐色粘質土 | |
| 14：橙灰色細砂～青灰色粘土の互層 | 24：濁淡灰黄色極細砂 | 25：濁青灰色極細砂 | |
| 26：暗褐色細砂質土 | 27：暗褐色砂質土 | 28：淡灰褐色砂質土 | 29：青灰色極細砂 |
| 30：暗灰白色砂質土 | 31：濁暗青褐色細砂質土 | 32：灰白色細砂質土 | 33：暗灰色粘質土 |
| 34：灰色粘質砂土 | 35：淡灰色砂質土 | 36：暗灰色土 | 37：灰白色粗砂 |
| 38：暗灰色粗砂 | 39：暗灰黄色粗砂 | 40：暗灰色粘質土混じり細砂 | |
| 41：暗灰褐色土 | 42：暗灰青色砂混じり粘質土 | 43：淡黒灰色粗砂 | |
| 44：暗灰色細砂 | 45：暗橙灰色粘質土 | 46：濁緑灰色極細砂 | 47：暗紫灰色細砂 |
| 48：濁緑灰色粘質土 | 49：濁緑黄色細砂 | 50：緑灰色粘質土 | 51：暗灰色極細砂 |

断面図 g－h の第 9 層以下については暗青灰色細砂・粗砂・粘質土の互層

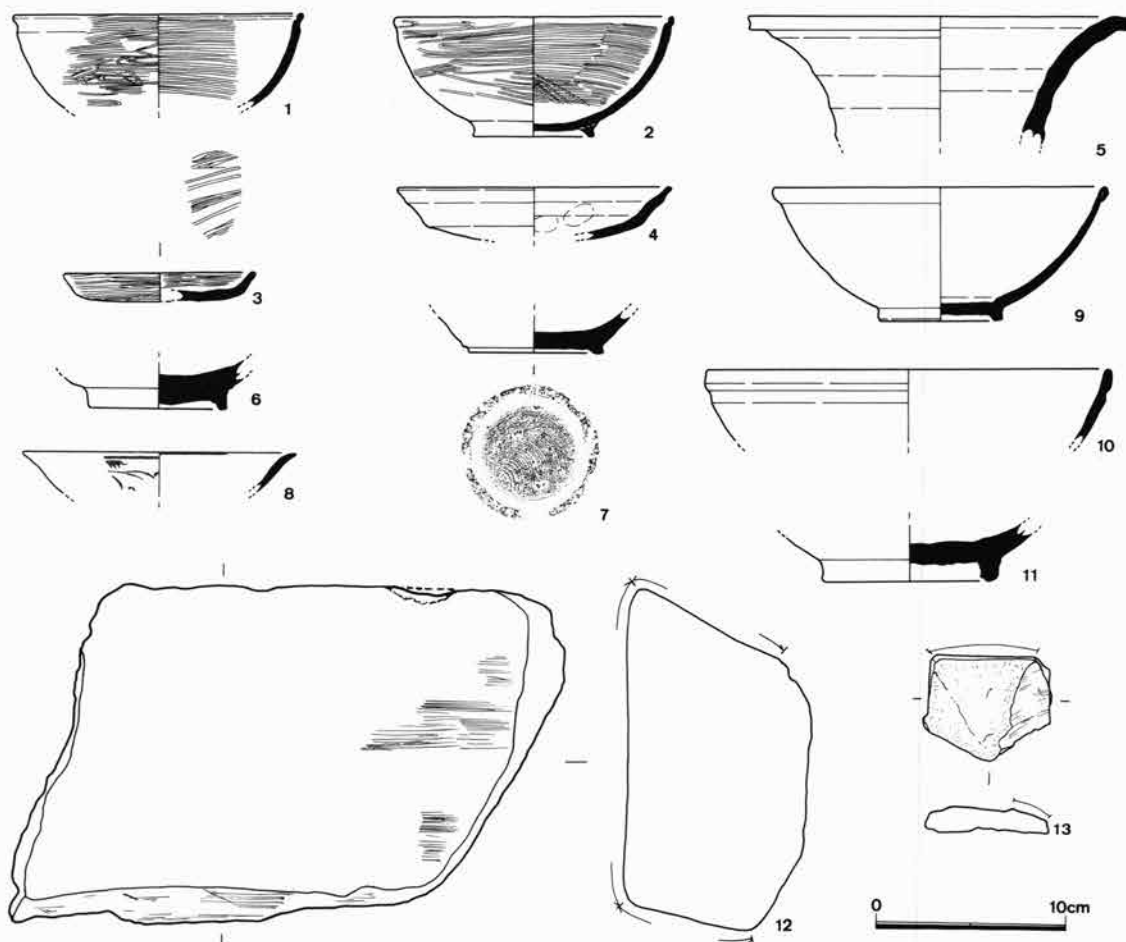
5. 出土遺物

出土遺物は合計整理箱11箱にのぼる。それらの多くは包含層中のものであるが、遺構では溝SD05、井戸SE01、集石遺構SX03からのものがほとんどを占める。

第58図1～7は瓦器碗である。見込みにジグザグもしくはラセン状暗文を施す。体部内外面ともヘラミガキを施すものが多く、平安時代後期を中心とした時期が想定できる。口縁部内面直下に1条の沈線を施す楠葉型(5)や、口縁部端を窪ませ段状にした大和型(2)がある。8は瓦器皿である。9～15は土師器皿である。9は口径9.3cmで、いわゆる「て」の字状口縁の最終段階のものである。10～14は口縁部を1段ナデにしたものである。15は口径14.3cmの中皿である。色調は明褐色である。他は淡褐色である。16～19は中国製白磁碗である。16は大振りな玉縁状口縁を特徴とする。平安時代後期のものである。17は小振りで平安時代中期のものである。19の体部下半は露胎である。20～22は須恵器である。20は蓋である。21と22は須恵器杯である。これらは奈良時代から平安時代前期に相当する。23は足高の土師器皿である。色調は淡褐色で胎土に赤色粒を多く含む。24は土釜である。色調は茶褐色で砂粒を多く含む。25も土釜である。色調は黄灰色で、



第58図 出土遺物実測図(1) (1～27：S D05、28・29：S K02)



第59図 出土遺物実測図(2)

(1～5・13: SE01、6・7: SX03、8: SX01、9～12: 包含層)

小さな砂粒を多く含む。26は陶器甕の底部である。外底面にヘラケズリを施す。27は須恵器鉢である。東播系で、色調は青灰色である。細かな白色砂を多く含む。28と29は瓦器碗である。

第59図1・2は瓦器碗である。体部には密なミガキを施す。3は瓦器皿である。残存は1/4のため、内面の暗文は全容ではない。4は土師器皿である。口縁部に2段ナデを施す。5は須恵器壺の口縁部である。6は山茶碗の底部である。内外面ともロクロナデを施す。外底面には糸切り痕跡がある。また、高台にはもみがら跡もある。7は中国製竜泉窯系青磁碗である。8は染付皿である。これのみ新しく室町時代に属する。9は白磁碗で、やや青白く発色する。外底面のみ露胎である。精緻な作りである。10も白磁碗である。平安時代中期に属する。11は灰釉碗である。内面を施釉している。外面は露胎である。12と13は大小の砥石である。12は3面使用されている。13は2面が使用され、ほとんどの部分は欠損している。

(伊野近富)

6. まとめ

今回の調査では、主に平安時代後期から安土桃山時代にかけての遺構・遺物を検出した。遺物だけでみると、図化はしていないが弥生時代後期の土器(甕の底部破片)が旧河川跡から、奈良時

代の須恵器や瓦片が集石遺構 S X 03や溝 S D 05などから出土しているので、古くから人々の生活の痕跡は認められる。

遺構についてみると、まず集石遺構 S X 03は、自然の角礫を無造作に積み上げたような遺構で、礫に混じって陶磁器類や瓦および瓦質土器、五輪塔なども廃棄される。周辺に古代から中世にかけての建物や墓が存在していた可能性を示唆する。遺構内における中世土器の出土から、形成された時期は14世紀代である。溝には、溝 S D 01～03のように田畑の耕作に関係する区画溝と、溝 S D 05のような集落内における排水施設の溝がある。そして、後者の溝 S D 05に近接して井戸 S E 01が検出されている。溝 S D 05内の遺物と時期が近接しており、同時に存在していた可能性が高い。

沼地状落ち込み S X 01・02は東側の南北両側で検出した。主に、暗青灰色粘質土が詰まっており、流れがなく、ゆっくりと土砂が堆積していったようである。形成時期は安土桃山時代(17世紀初頭)である。

調査地東端では、河川堆積に伴う濁灰黄色極細砂などの詰まった旧河川 S R 01が検出された。東側の木津川の氾濫による堆積であろう。17世紀に形成されたものである。

調査区は古屋敷遺跡の東端にあたり、木津川による氾濫の影響で遺構の存在があまり期待できない地点とみられたが、以上のような確実な遺構を検出することができた。住居跡は検出していないが、溝と井戸の検出から集落および宅地の外縁部にあたると言える。古代の交通の要衝であった山本駅についての具体的な資料は得られなかったが、平安時代後期から室町時代にかけての遺構・遺物を検出したことが今回の成果である。

(黒坪一樹)

注1 鈴木重治・中井公・古森政次ほか『古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書』(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第1集 田辺町教育委員会) 1980

注2 調査参加者(敬称略・順不同)

調査補助員 奥浩和・武永仁美・谷村真慈・田村和成・坂本由香・北森さやか・柴田文恵・小野彰子

整理員 森川敦子・藤井矢壽子・安田裕貴子・古賀友佳子・武永仁美・北森さやか・川端美恵・小西麻佐子・一森雄次・倉谷和子・作山美智子

4. 新^{しんどういけ}堂池古墳群試掘調査概要

1. はじめに

調査地は、船井郡園部町新堂天野2～6に所在する。今回の調査は、南丹区域農用地総合整備事業の農用道設置に伴うもので、緑資源公団の依頼を受けて実施した。

今回の調査地は、園部の市街地から北方約2.7kmに位置する。園部町新堂と熊崎のほぼ中間の、北側の山地から南東方向に延びる丘陵地にあたる。新堂池古墳群は、10基程度の古墳群であるが、そのうち4基が事業地内に含まれている。そのため、各古墳の規模・形状および主体部の状況・基数・規模などを確認することを目的として、試掘調査を実施した。また、古墳間の緩傾斜地2か所についても遺構・遺物の有無を確認するための試掘を行った。調査は、平成13年12月10日から開始し、人力により掘削・精査を行った。試掘トレンチは幅2mを原則とした。調査面積は約230㎡である。調査終了は、平成14年2月8日である。なお、調査に係る経費は、全額、緑資源公団が負担した。

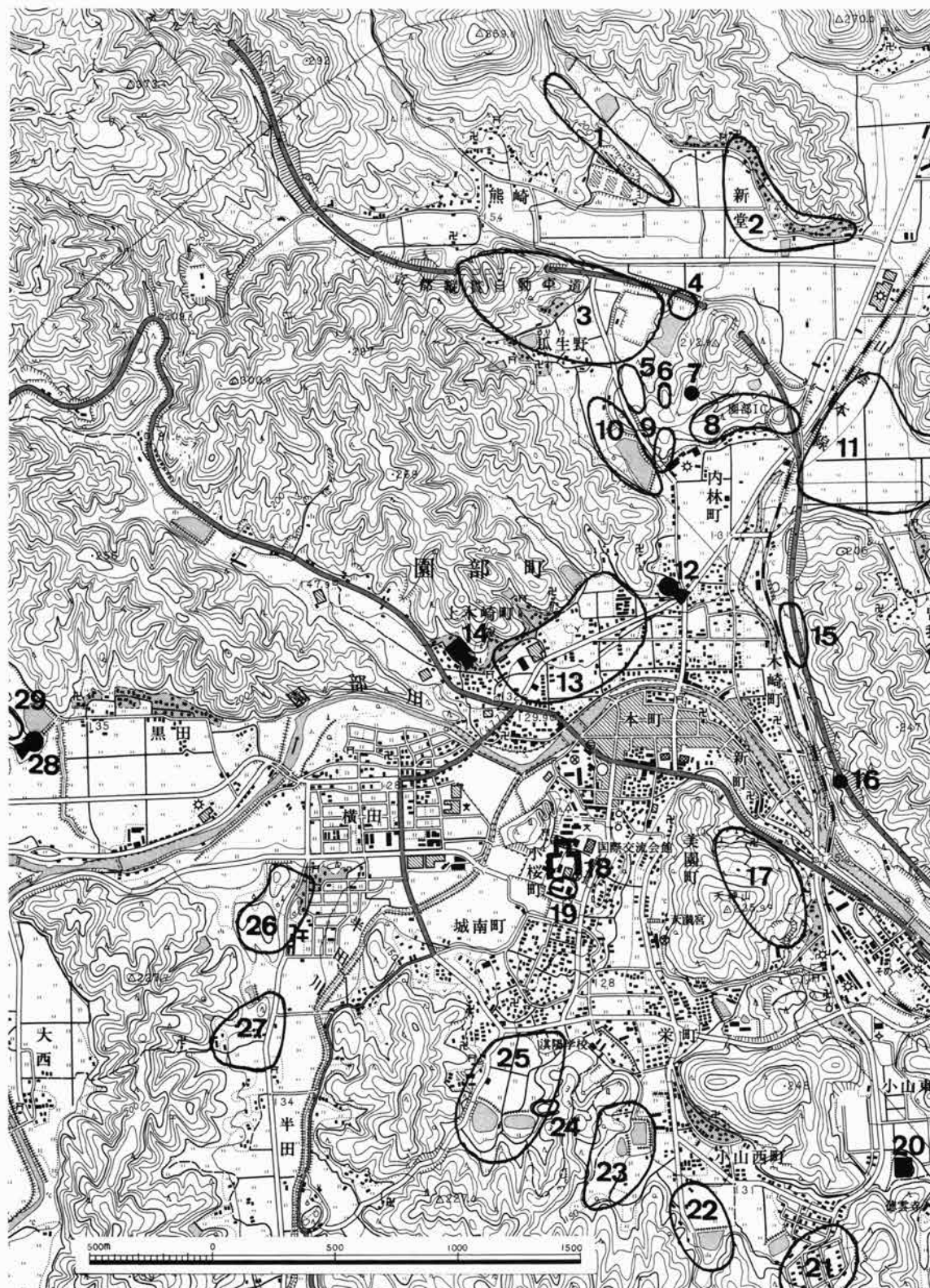
今回の調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、同主任調査員引原茂治である。調査を実施するにあたり、園部町商工農林課、園部町教育委員会、京都府教育委員会、地元自治会などからご協力いただいた。調査においては、天候不順の時期にもかかわらず地元有志の方々、各大学生の方々などに参加していただいた。^(注)あわせて謝意を表したい。

2. 位置と環境

園部町は、南北に長い京都府のほぼ中央に位置する。京都府には、府の中央部に広がる丹波山地を分水嶺として、北流して日本海に至る由良川水系と南流して大阪湾に至る大堰川水系がある。園部町は、大堰川水系の最北端に位置し、園部盆地と通称される小盆地に所在する。広義の亀岡盆地の北側にあたる。調査地は、園部町と日吉町の境となる山地の麓で、園部町内でも北部にあたる。

周辺の歴史環境をみると、縄文時代は、園部垣内古墳下層から土器片が、曾我谷遺跡から尖頭器や石鏃が出土しているが、いずれも単独での出土である。弥生時代では、今林遺跡から後期の集落跡が確認されている。また、狭間墳墓群も後期の墳丘墓であり、同一丘陵内にある今林遺跡との関連が注目される。また、曾我谷遺跡や半田遺跡、善願寺遺跡でも後期から庄内式併行期の集落跡が確認されている。今林古墳群内の今林8号墓は、庄内式併行期の墳丘墓とみられ、銅鏡や踏鋤などが出土している。

園部黒田古墳は、出現期の前方後円墳と考えられており、双頭龍文鏡などが出土している。古墳時代前期後半から中期初頭に位置付けられる古墳として、中畷古墳と園部垣内古墳がある。中



第60図 調査地および周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|------------|
| 1. 新堂池古墳群 | 2. 岡田遺跡 | 3. 瓜生野古墳群 | 4. 八田遺跡 | 5. 狭間墳墓群 |
| 6. カチ山北古墳群 | 7. 平山古墳 | 8. 今林古墳群・遺跡 | 9. カチ山古墳群 | 10. 金沢遺跡 |
| 11. 曾我谷遺跡 | 12. 園部垣内古墳 | 13. 宮ノ口遺跡 | 14. 中畷古墳 | 15. 善願寺遺跡 |
| 16. 川向古墳 | 17. 天神山古墳群 | 18. 園部城跡 | 19. 小桜古墳群 | 20. 徳雲寺北古墳 |
| 21. 大向窯跡群 | 22. 高杭窯跡群 | 23. 桑ノ内窯跡群 | 24. 岸ヶ前古墳群 | 25. 壺ノ内窯跡群 |
| 26. 温井古墳群 | 27. 半田遺跡 | 28. 園部黒田古墳 | 29. 黒田北古墳群 | |

厩古墳は、前方後方墳で筒形銅器などが出土したと伝えられる。園部垣内古墳は、粘土槨を主体部とする前方後円墳である。三角縁神獸鏡などの銅鏡や方形板革綴短甲などの多量の鉄器、車輪石や石釧などの豊富な副葬品が出土している。前期古墳と考えられる平山古墳は、直径20mに満たない円墳であるが四獣鏡などが出土している。中期古墳として、今林6号墳は、長さ20m余りの方墳であるが、長方板革綴短甲や内行花文鏡などの豊富な副葬品が出土している。岸ヶ前古墳群からも三角板革綴短甲などが出土している。徳雲寺北古墳は一辺20mの方墳で、四方に小古墳を配する特異な状況を呈している。このほか、小桜古墳群など、全体的に園部の中期古墳は方墳が主流である。5世紀末頃以降になると、今林2号墳、温井古墳群、黒田北古墳群などの木棺直葬の円墳が築かれる。黒田北古墳群には、小規模な前方後円墳も含まれている。6世紀前半期以降、横穴式石室を内部主体とする古墳が築かれる。天神山1号墳は、丹波地域でも古い段階の横穴式石室を持つ古墳である。このような状況は、南丹地域全体にみられ、亀岡市拝田16号墳、同医王谷3号墳、同北ノ庄古墳、八木町小谷16号墳などが古い段階の横穴式石室を持つ古墳として知られる。なお、拝田16号墳は前方後円墳である。

古墳時代5世紀末頃から12世紀頃にかけて、園部盆地南側の山麓では主に須恵器の焼成が行われ、多数の窯跡が分布している。京都府内でも最も早くから須恵器生産を開始した窯跡群として注目される。平安時代には、瓦の焼成も行っている。

奈良・平安時代の遺跡としては、掘立柱建物跡群が検出された宮ノ口遺跡や、寺院跡といわれる善願寺遺跡などがある。また、古山陰道が園部の西側を通過しており、亀岡市との境に近い園部町埴生の地に「野口駅」が比定され、当時の交通の要所と考えられている。

中世の遺跡としては、山城跡が多数知られているが、発掘調査例がなく、詳細は不明である。近世の遺跡としては、園部城跡がある。江戸時代初期に小出吉親によって築城され、以後幕末まで園部藩小出氏の居城となった。現在は京都府立園部高等学校の敷地となっており、本丸の門・隅櫓などが現存している。これまでの調査では、本丸内の石組み溝などが確認されている。また、堀部分の調査では、高級肥前磁器である鍋島の皿片が出土しており、丹波・丹後地域では唯一の出土例である。

3. 調査内容

今回試掘調査の対象になったのは、1～3号墳、6号墳の4基と、1・2号墳間の緩傾斜地および2・3号墳間の緩傾斜地の2か所である。以下、その概要を記す。なお、1・2号墳間の緩傾斜地に設定したトレンチをAトレンチ、2・3号墳間の緩傾斜地に設定したトレンチをBトレンチとする。

(1) 1号墳

丘陵のはば先端部付近に位置する。直径約12mの円墳である。墳頂部から墳丘東半部にかけて、盗掘により大きく崩されている。内部主体は、東側に開口する横穴式石室である。

今回の調査では、西側の玄室奥壁部で壁体を構成するとみられる石材1石を確認した。南側の

玄室側壁部でも、若干動いている可能性はあるものの、壁体を構成するとみられる石材1石とその背後の掘形を検出した。北側の玄室側壁部にあたる部分では、石材の検出はなかったが、掘形を確認した。このような状況から、玄室は、掘形幅約3m、石室の内法幅は約2mとみられる。

長さについては不明であるが、ほぼ2.5～3mと推定される。

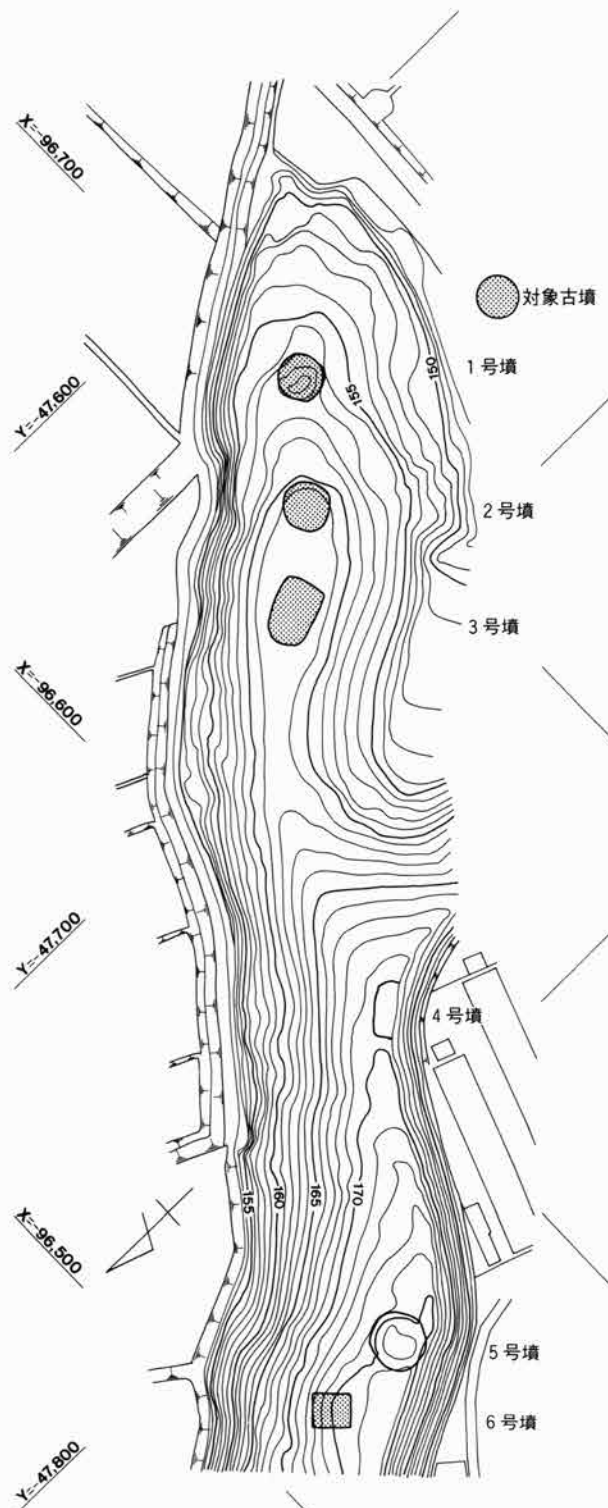
開口部の東側では、羨道の両側壁を検出した。羨道幅は約0.9mであるが、玄室側に向かってやや狭くなっていく様子である。羨道長は不明であるが、ほぼ2m前後か。なお、羨道部の東側延長は、床面がわずかに「U」字状に窪んでおり、墓道もしくは前庭部状になるか。

上記のとおり、この古墳は盗掘によりかなり削平されて、石室の石材もかなり失われている様子である。大きく崩れている北および東側では、基底部から1ないし2石程度、墳丘の高さが比較的良好に残っている西および南側でも数石程度の残存とみられる。使用石材は、あまり大きなものではない。天井石は残存していない。

トレンチ西側で、周溝の一部を検出した。幅約1.3mの弧状の溝である。他の部分では検出しておらず、尾根の高所側のみをめがけているものとみられる。

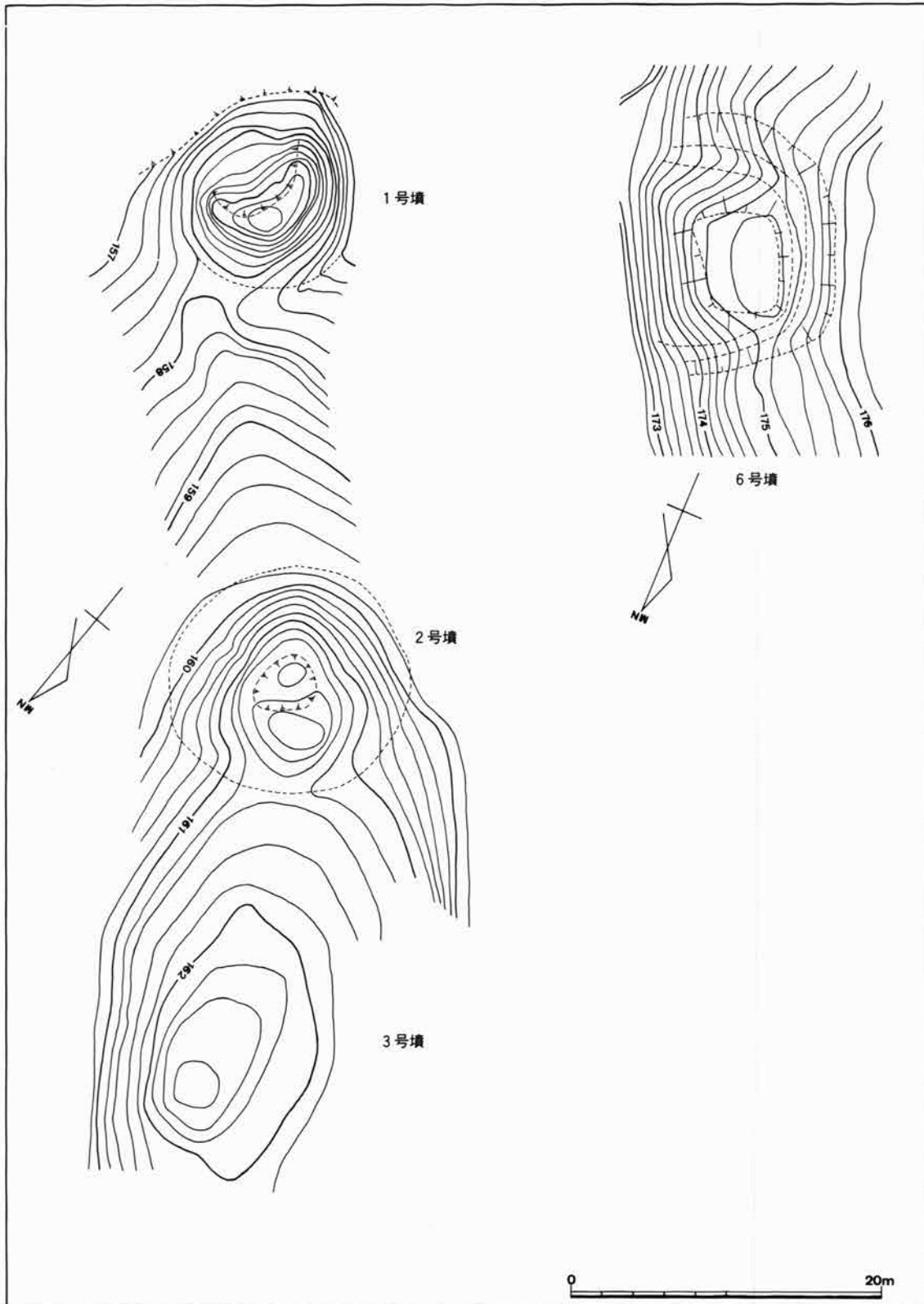
盗掘坑や墳丘堆積土中から、この古墳に伴うとみられる須恵器片が出土している。それらは、陶邑編年のTK10型式併行期のものとみられ、この古墳が丹波地域でも古い段階の横穴式石室を持つ古墳である可能性を示す。使用石材があまり大きいものではないことも、その傍証となろう。

この古墳の盗掘坑の堆積土を掘削している段階で、かなり浅いところから古墳の石材を転用したとみられる集石を検出し、その周囲から近世初頭頃のものともみられる土



第61図 古墳群分布図

師皿が数点出土した。これらの土師皿は、口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。あるいは祠などがあったとも考えられる。このような状況から、近世初頭頃には、現状にかなり近い状況であったと考えられる。また、羨道部付近の堆積土下部から中世の



第62図 調査地地形図

瓦質筒形容器片などが出土した。あるいは、中世頃に盗掘されたものか。

(2) 2号墳

1号墳の北西約33mの丘陵稜部に位置する。直径約13mの円墳である。墳頂部東寄りに盗掘坑がある。木棺直葬の古墳と考えられる。

墳頂部には3か所の主体部とみられる土色の変化がみとめられる。主軸は尾根線に平行しており、ほぼ東西方向である。トレンチ調査であるため、詳細は不明であるが、墳頂部北寄りのものは、幅約1mである。長さは、トレンチ外に延びるのため不明である。中央部のものは中心主体になるものとみられ、長さ約3m、幅は北寄りのものに掘り込まれているため不明であるが約1.5m以上である。中央部のものから南側約0.4mの間隔において、主体部状の土色変化がみられるが、調査地の制約上全容を検出することができず、北西隅部を検出したのみである。外部施設としては、尾根の高所側を弧状にめぐる周溝があるが、これは、Bトレンチで検出した。

この古墳の北裾部から須恵器片が出土した。小片のため明確な時期は不明であるが、ほぼ6世紀頃のものともみられる。

(3) 3号墳

2号墳の北西側約20mに位置する。約13×10.5mの長方形墳である。木棺直葬墳とみられる。調査前は、低い盛り上がりのみとめられる程度で、墳形・規模ともに明確ではなかった。調査で、東および西側の尾根線を断ち切る溝を検出し、北および南側ではテラス状に整形した部分を確認して、墳丘が判明した。

墳頂部で、主体部とみられる土色変化を3か所確認した。そのうち2か所は、主軸が尾根線に平行しており、ほぼ東西方向である。北側のものは、長さ約3.5m、幅約1.7mを測る。中央のものは、北側のものに切られているが、長さ約4m、幅約3.2m前後とみられる。墳頂部西側のものは、主軸が尾根線に直交しており、ほぼ南北方向である。幅約1.9mを測るが、長さはトレンチ外のため不明である。

外部施設としては、東西両側溝がある。東側溝は、Bトレンチで検出した。西側溝は、幅約3mで、直線的にのびる。この古墳からは出土遺物がないため、時期は不明である。なお、結果的に、トレンチが墳丘の方向からずれており、掘削の及ばなかった南東側にも何らかの遺構がある可能性もある。

(4) 6号墳

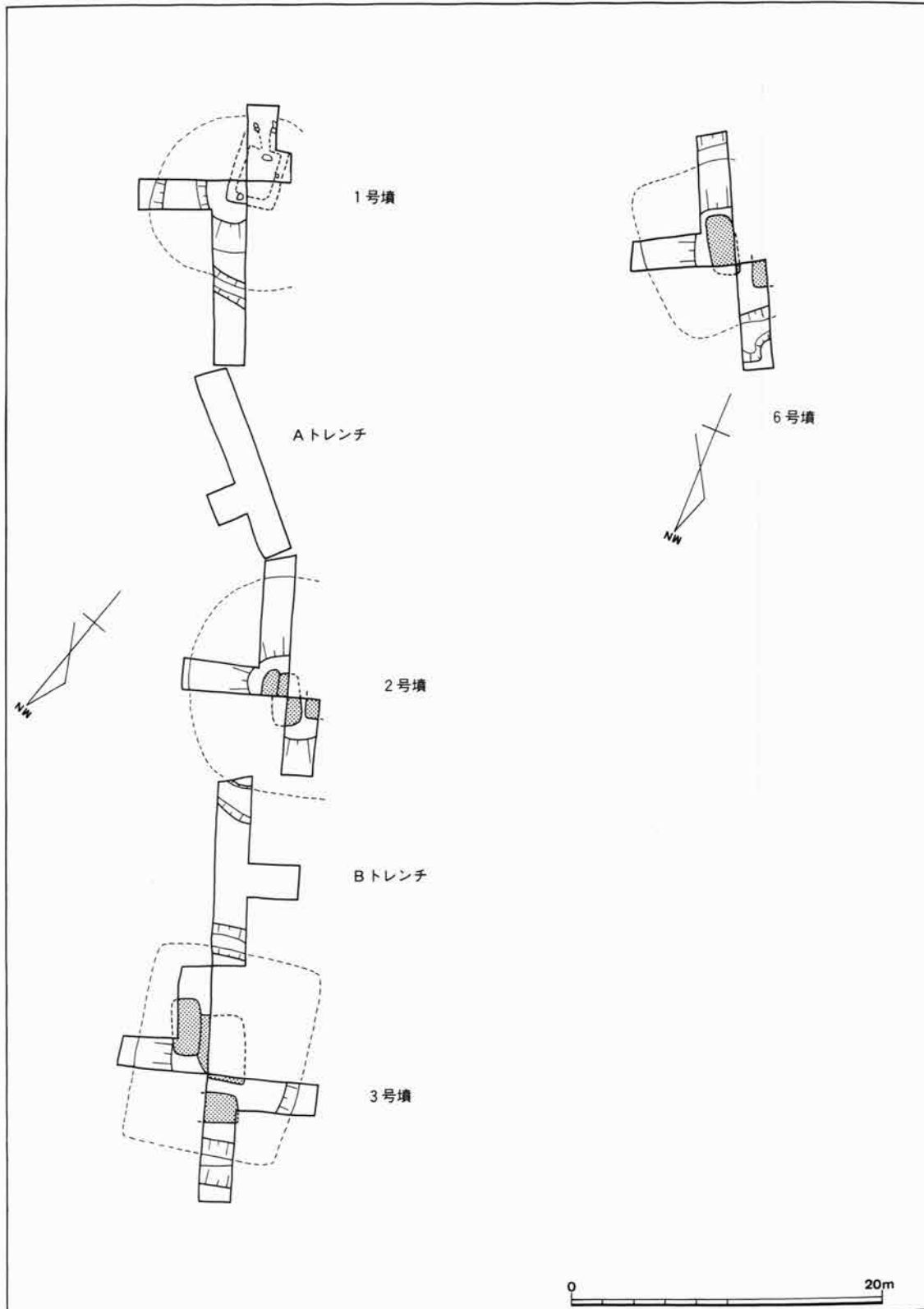
3号墳の北西側約200mに位置する。丘陵斜面部に「コ」字状に周溝をめぐらせ墳丘を造り出す。墳丘は、約10.5×9mの方形墳である。木棺直葬墳とみられる。

墳頂部で、主体部とみられる土色変化を2か所確認した。主軸は尾根線に平行しており、ほぼ東西方向である。中央付近のものは、長さ約4m、幅約2mを測る。南側のものは、調査地の制限上全容を確認することはできず、北西隅部を検出したのみである。このほか、墳頂部西端から斜面部にかけて南北方向の土色変化がみられる。あるいは主体部になるか。

周溝は、東側で幅約5m、西側で幅約3mを測る。南側部分は、調査地外のため不明である。

なお、西側溝は南側で幅約2mと狭くなる。

墳頂部を掘削中に、表土下から須恵器有蓋短脚高杯3個体と甕1個体などが出土した。高杯は立った状態であり、墓上に供献されたものと考えられる。陶邑編年のTK47型式併行期のものと



第63図 トレンチ位置図

みられる。また、中央付近の土色変化部分から、庄内式併行期とみられる土器片と鉄製品 1 点が出土した。

この古墳は、立地・形状ともに今林 8 号墓と類似する。今林 8 号墓は、庄内式併行期の墳丘墓である。規模的にはやや劣るが、時期的にはほぼ同じものとみられる。墳頂部の須恵器については、狭間墳墓群で弥生時代後期の墳丘墓の周溝から古墳時代後期の須恵器が出土した例もあり、後世の何らかの祭祀に関係するものともみられる。

(5) A トレンチ

表土および堆積土下は地山となり、遺構・遺物ともに検出しなかった。

(6) B トレンチ

東端部で弧状の溝を、西端部で直線的な溝を確認した。位置的にみて、東端の溝は 2 号墳の周溝と考えられ、幅約 2.2m を測る。西端の溝は 3 号墳の東側溝とみられ、幅約 1.9m を測る。これらの溝からは、その時期を示す遺物は出土していない。

4. 小 結

今回の調査では、A トレンチ以外のトレンチで、古墳および墳丘墓に関連するとみられる遺構・遺物を検出した。形態・主体部がそれぞれ個性的で、時期差もある。今後の調査が期待される。

(引原茂治)

注 天池佐栄子・宅間のり子・森口亮・矢野ふさゑ・三浦悦子・大下陽子・内藤亨・上西ため子・山内信次・北森さやか・陸田初代・森川敦子・安田裕貴子・武永仁美・羽生奈津子・柴田文恵・大西瞳

版 圖



(2) 2トレンチ(南から)



(4) 3トレンチ(南から)



(1) 調査地全景(北から)



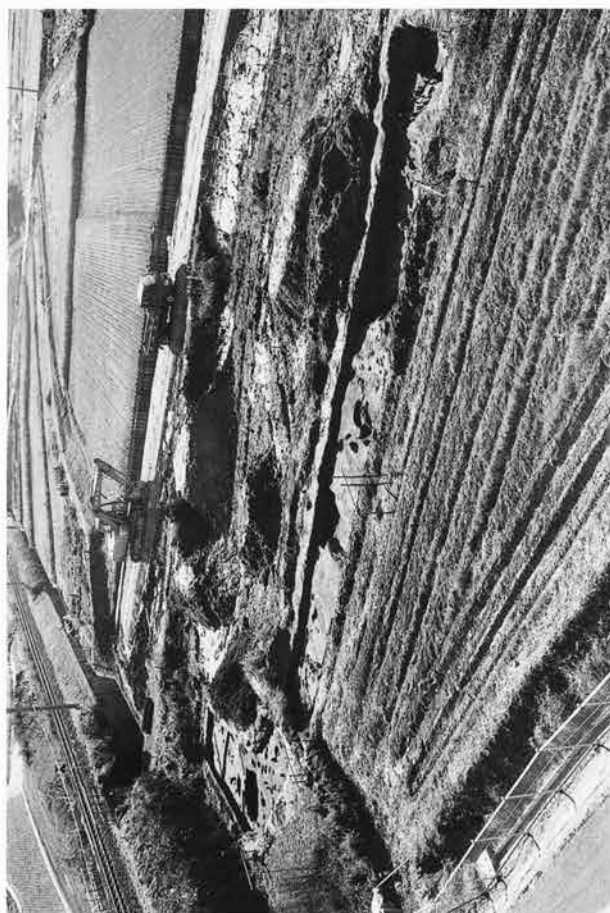
(3) 2トレンチSD207(南西から)



(2) 4 トレンチ (北西から)



(4) 6 トレンチ S D 601・602 (東から)



(1) 3・4 トレンチ (北から)



(3) 5・6 トレンチ (北東から)



17



55



23



71



35



103



49



106



(1) 調査地遠景(南から)



(2) 調査地遠景(北から)



(1) A地区全景(上が東)



(2) B地区全景(上が東)



(1) A地区S X02遺物出土状況
(北から)



(2) A地区S X02遺物出土状況
(南から)



(3) A地区S X02土層断面
(北から)

(1) A地区SH01完掘状況
(東から)



(2) A地区NR04遺物出土状況
(西から)

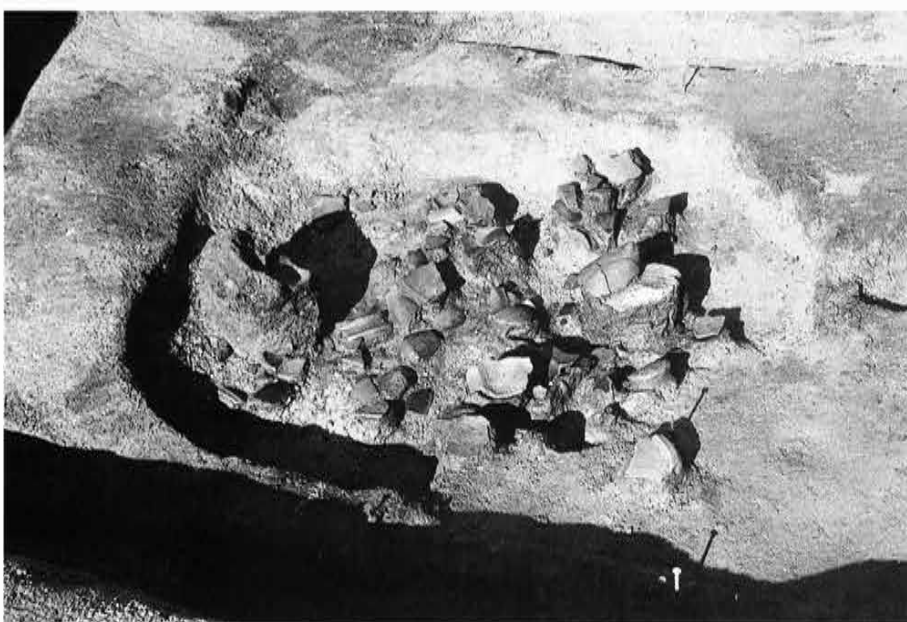


(3) A地区NR04遺物出土状況
(南から)





(1) A地区 S K38完掘状況
(東から)

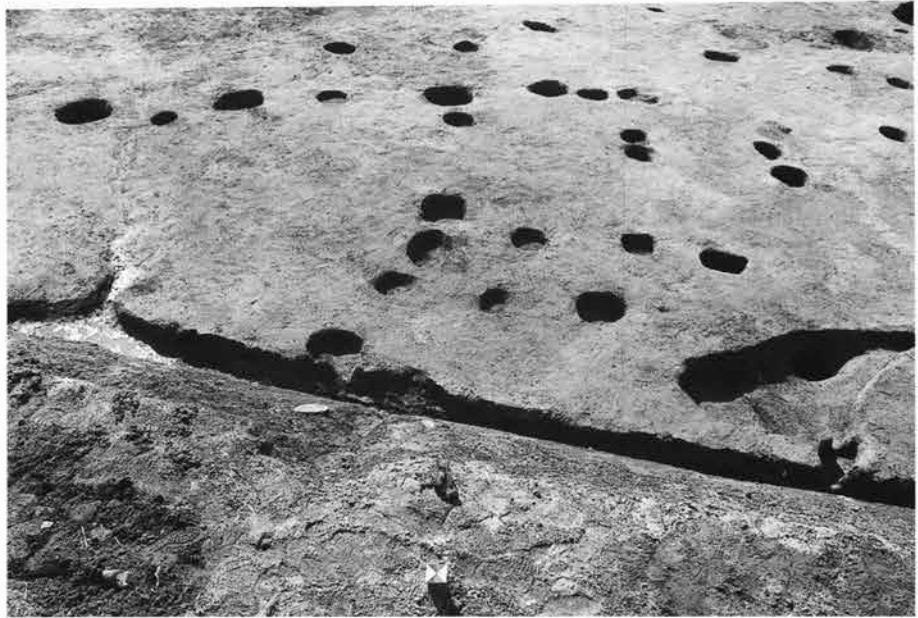


(2) A地区 S K39遺物出土状況
(東から)



(3) A地区 S K42完掘削状況
(南から)

(1) A地区S B01・02完掘状況
(北から)



(2) A地区S B03完掘状況
(東から)



(3) A地区S B04完掘状況
(東から)





(1) B地区東拡張区完掘状況(北から)



(2) B地区全景(東から)



(3) A地区S D 19完掘状況(北から)

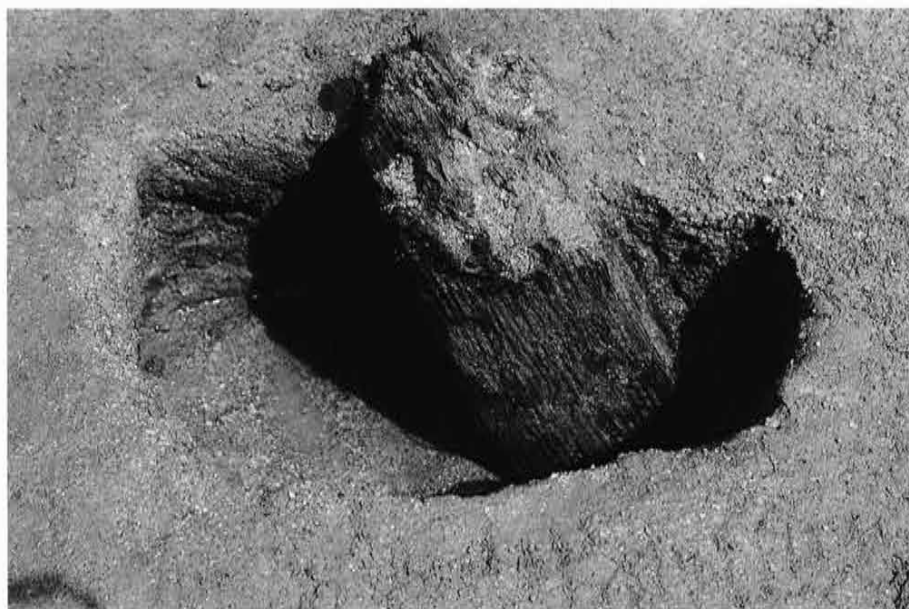
(1) B地区東拡張区完掘状況
(北西から)

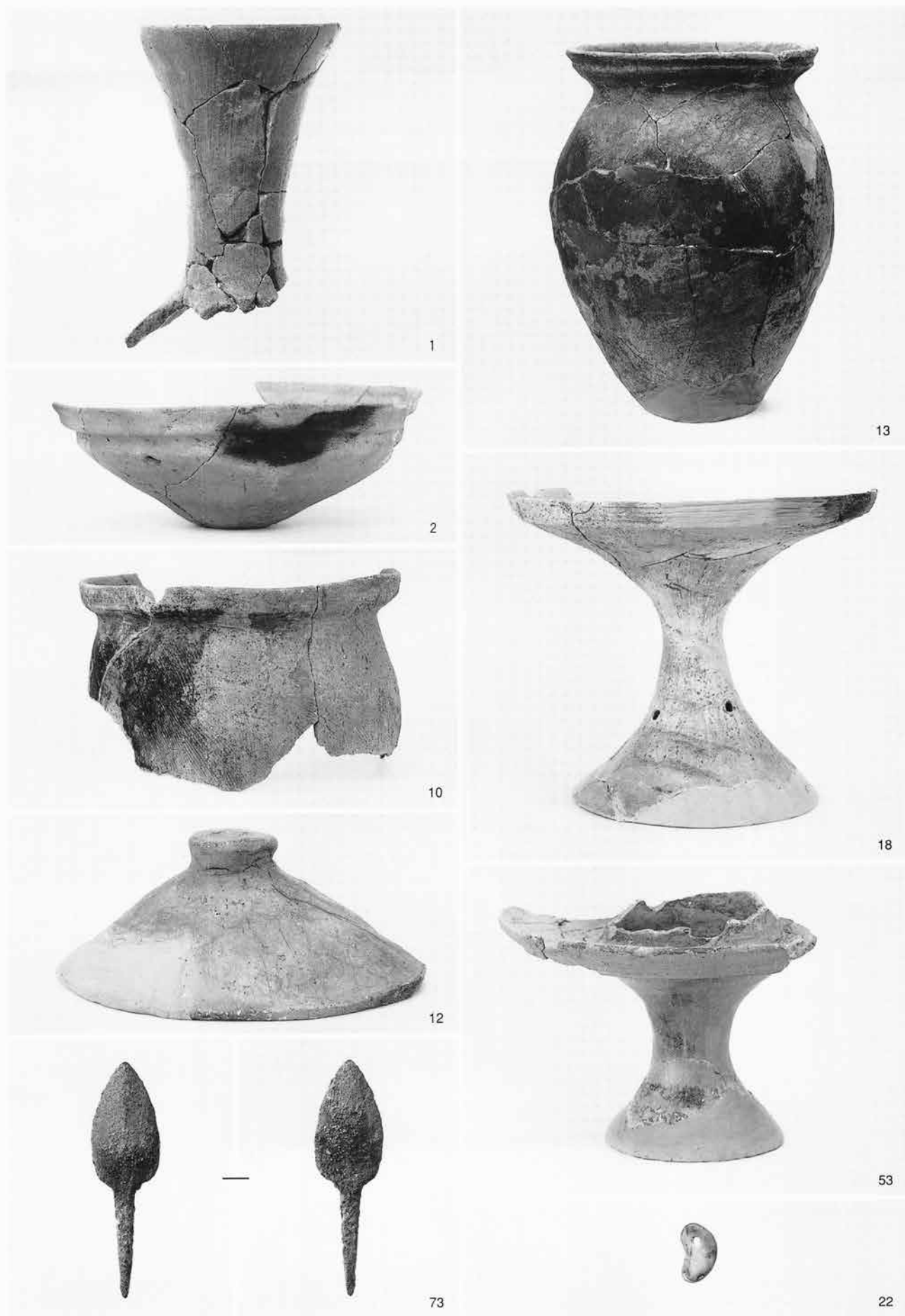


(2) B地区西拡張区完掘状況
(北から)



(3) B地区P06土層断面(南から)





(1) 古墳群遠景(北西から)



(2) 1号墳近景(北西から)



(3) 調査地全景(東から)





(1) 調査地全景(北西から)



(2) 1号墳主体部全景(上が南東)



(3) 1号墳主体部検出状況
(東から)

(1) 1号墳主体部検出状況
(南東から)



(2) 1号墳第1・2号主体部
埋土の状況(北東から)

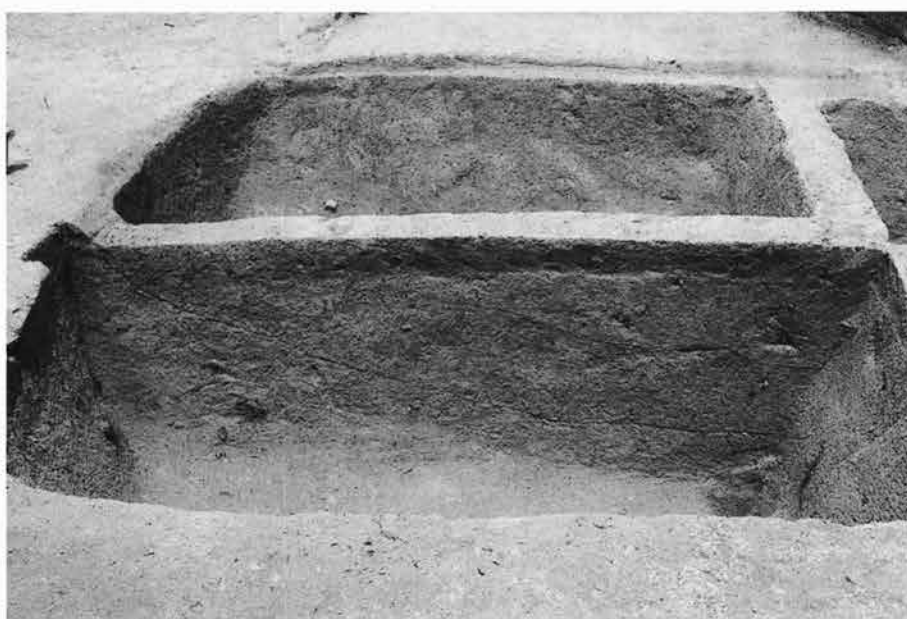


(3) 1号墳第1号主体部
土棺痕跡検出状況(南西から)





(1) 1号墳第3号主体部
埋土の状況(南から)



(2) 1号墳第3号主体部
埋土の状況(南東から)



(3) 1号墳第3号主体部
棺痕跡掘削状況(東から)

(1) 3号墳全景(南東から)



(2) 3号墳主体部検出状況
(北西から)



(3) 3号墳主体部全景(北西から)





(1) 5号墳全景(南西から)



(2) 5号墳全景(上が北)



(3) 5号墳主体部全景(東から)

(1) 1号墳第3号主体部
鏡出土状況



(2) 1号墳第1号主体部
鉄鏃出土状況(上が南西)



(3) 3号墳主体部
遺物出土状況(南西から)





(1)作業風景(1)



(2)作業風景(2)



(3)作業風景(3)

(1) 現地説明会風景(1)

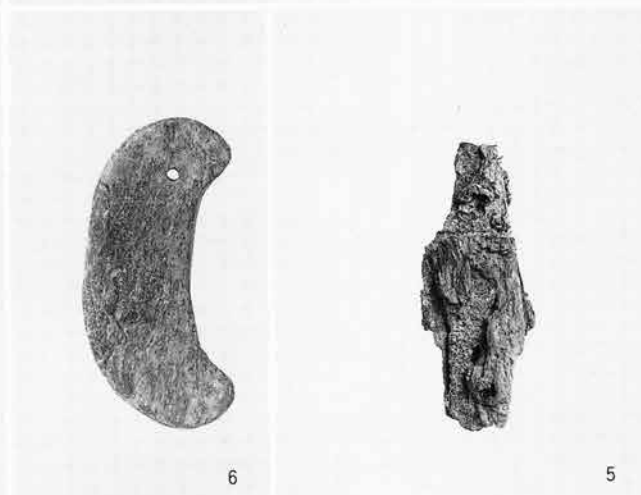
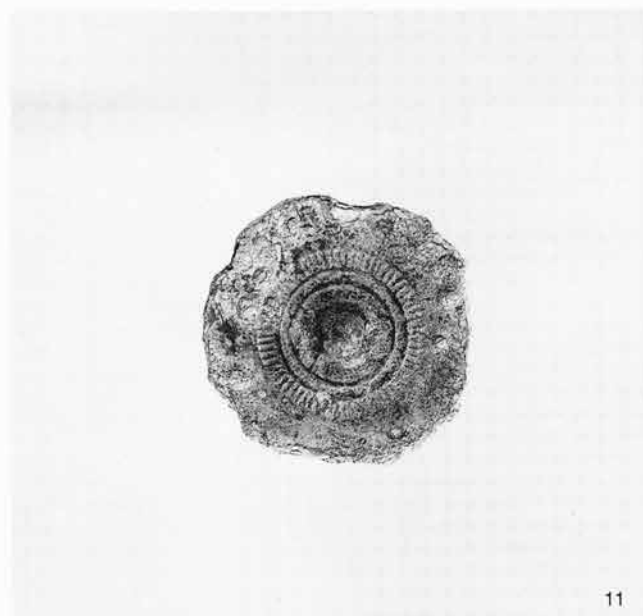


(2) 現地説明会風景(2)



(3) 現地説明会風景(3)







(1) 池上遺跡全景(東から)



(2) 調査地全景(北から)



(3) 調査地全景(上が西)



(1) A地区重機掘削風景(西から)



(2) A地区遺構検出状況(北から)



(3) A地区発掘調査作業風景
(北から)

(1) 方形周溝墓01検出状況
(北から)



(2) 方形周溝墓01弥生土器
検出状況(南から)



(3) 方形周溝墓01検出状況・部分
(南から)





(1) S H02検出状況(北から)



(2) S H01検出状況(西から)



(3) S H01竈検出状況(東から)



(1) S H46検出状況(西から)



(2) S H06検出状況(北西から)



(3) S H04検出状況(南から)



(1) S K36検出状況(南東から)



(2) S X44・45検出状況(東から)



(3) A-2 トレンチピット
検出状況(南から)

(1) 調査前風景(東から)



(2) 重機掘削風景(東から)



(3) 重機掘削中(東から)





(1) 調査区完掘状況(西から)



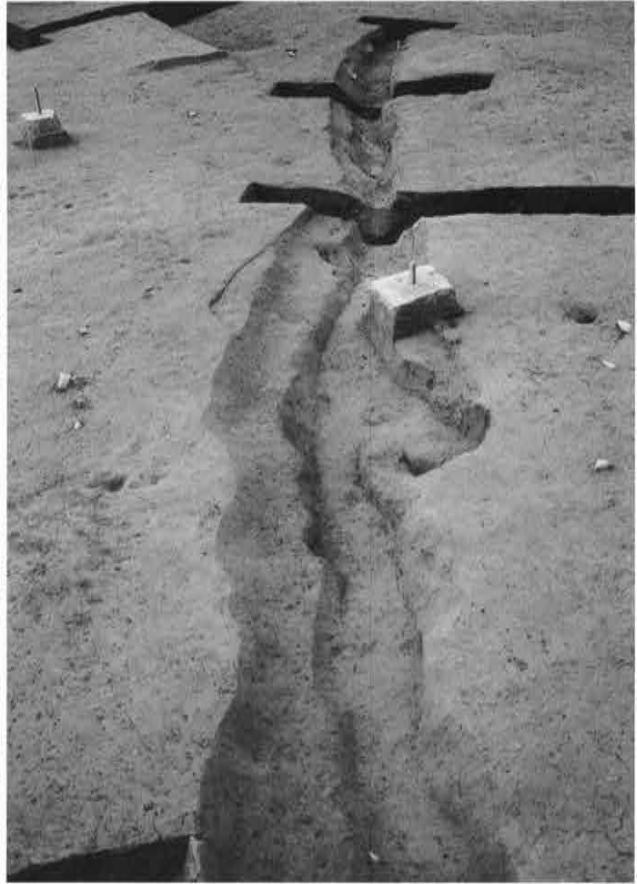
(2) 調査区完掘状況(東から)



(3) 調査区東半部(西から)



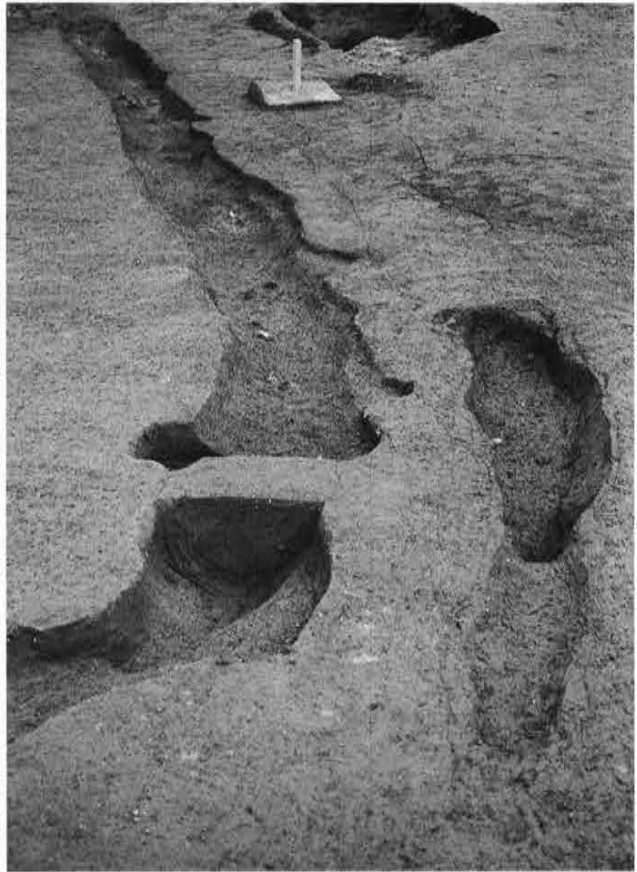
(1) 溝(S D05) (北東から)



(2) 溝(S D05) 完掘状況 (北東から)



(3) 溝(S D05) と井戸(S E01)



(4) 溝(S D01・02) (西から)



(2) 溝(S D05)内土器(南東から)



(4) 溝(S D05)北西断ち割り断面(南から)



(1) 溝(S D05)(南西から)



(3) 溝(S D05)断ち割り断面(南西から)



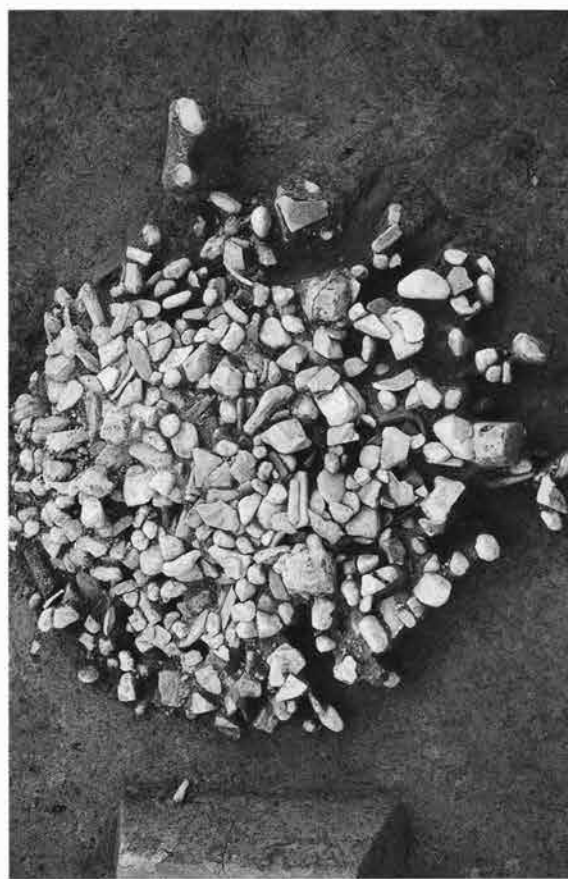
(2) 井戸 (S E 01) 底 (北東から)



(4) 集石遺構 (S X 03) 下位 (東から)



(1) 井戸 (S E 01) (北東から)



(3) 集石遺構 (S X 03) (北から)



(2) 旧河川 (S R01) 縦断面 (南西から)



(4) 溝旧河川 (S R01) 横断面 (北から)



(1) 土坑 (S X04) (西から)



(3) 杭列検出状況 (北西から)



58-2



57-1



57-2



57-29



58-3



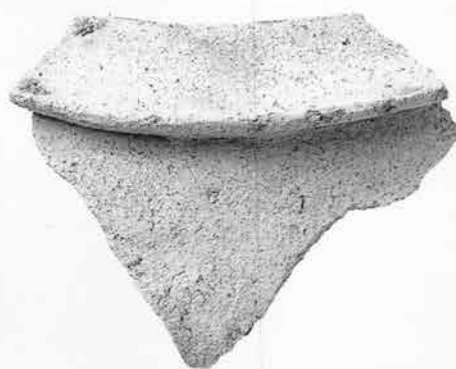
57-12



57-10



57-24



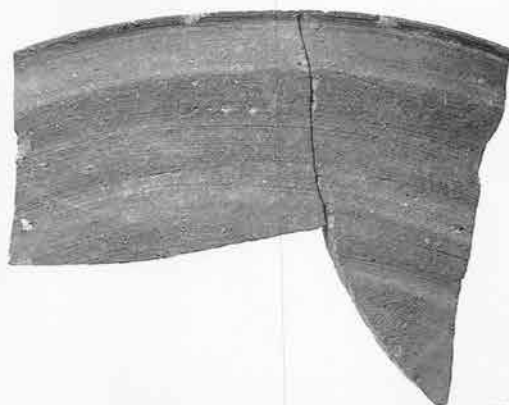
57-25



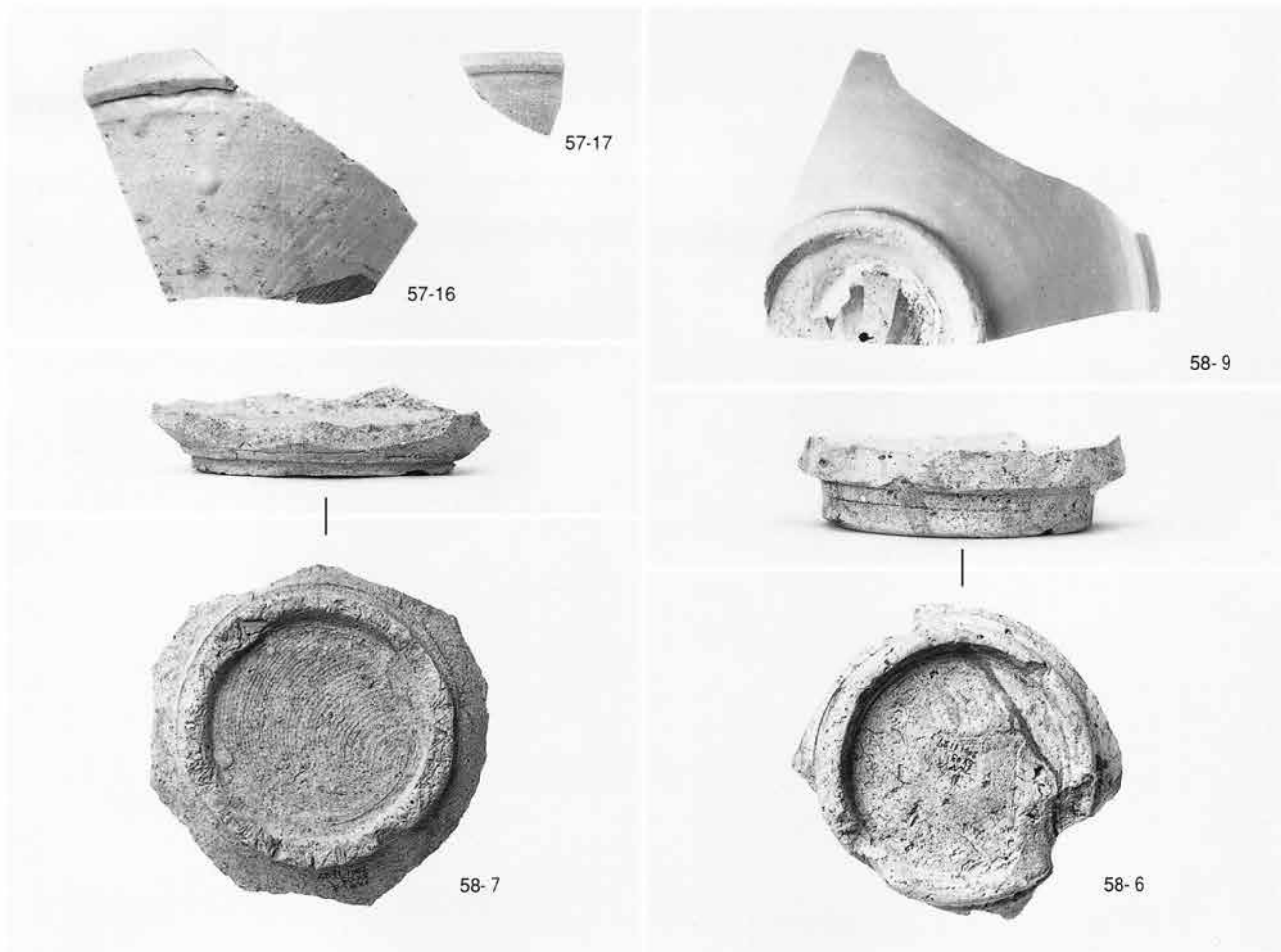
57-26



57-19



57-27



出土遺物(2)



調査区北側、飯岡丘陵を望む(南から)



(1) 1号墳調査前全景(北西から)



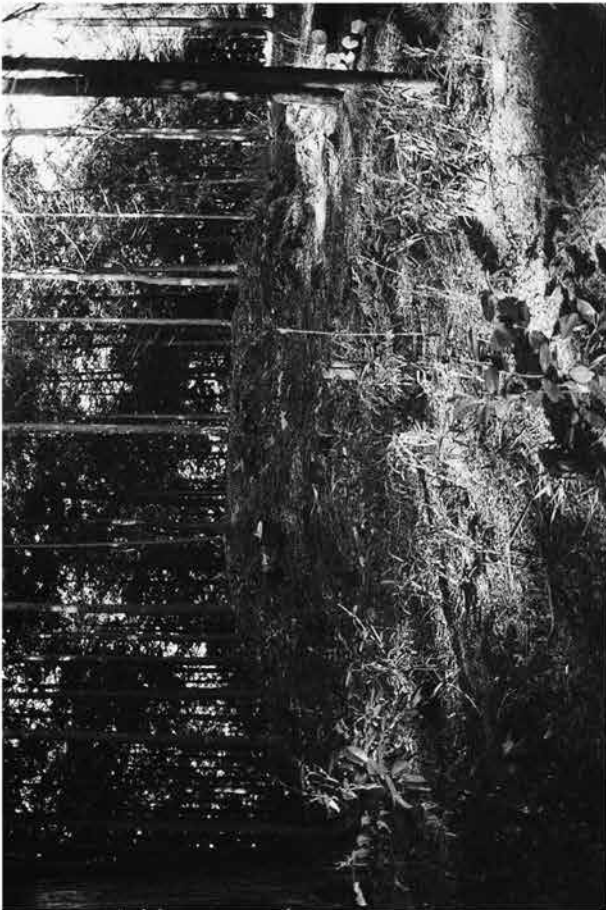
(2) 1号墳羨道検出状況(南東から)



(3) 1号墳奥壁部検出状況(東から)



(4) 1号墳周溝検出状況(南東から)



(1) 2号墳調査前全景(東から)



(2) 2号墳主体部検出状況(南東から)



(3) Bトレンチ2号墳周溝検出状況(北東から)



(4) 3号墳調査前全景(西から)



(2) 3号墳西側溝検出状況(南西から)



(4) 6号墳主体部検出状況(北西から)



(1) 3号墳主体部検出状況(北西から)



(3) 6号墳調査前全景(北西から)



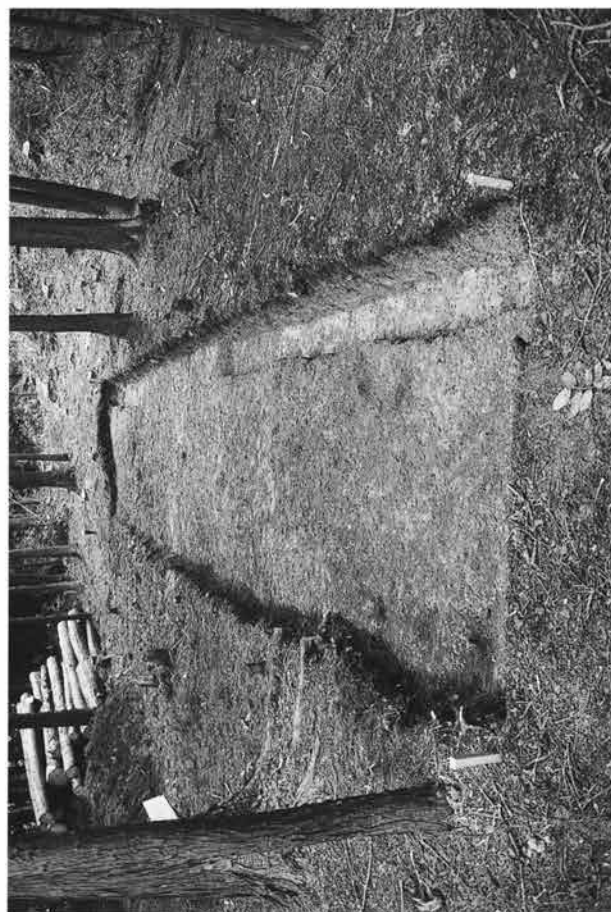
(2) 6号墳周溝検出状況(北東から)



(1) 6号墳遺物出土状況(北西から)



(4) Bトレンチ全景(西から)



(3) Aトレンチ全景(東から)

報告書抄録

ふりがな								
書 名								
副書名								
巻 次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第104冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone 075(933)3877			
発行年月日	西暦 2002 年 3 月 28 日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
くわはらぐち いせきだいご じ 桑原口遺跡 第5次	みやづしきたこあざ くわはらぐち 宮津市喜多小字桑 原口	205	99	35° 30' 53"	135° 11' 34"	20001115 ～ 20011222	300	道路建設
くわはらぐち いせきだいろ くじ 桑原口遺跡 第6次	みやづしきたこあざ くわはらぐち 宮津市喜多小字桑 原口	205	99	35° 30' 53"	135° 11' 33"	20010605 ～ 20011109	1,800	道路建設
とうぜんじこ ふんぐん 東禅寺古墳 群	みやづしすづ 宮津市須津	205	160	35° 32' 37"	135° 9' 42"	20010514 ～ 20010803	900	道路建設
いけがみいせ きだいじゅう いちじ 池上遺跡第 11次	ふないぐんやぎちよ ういけがみ 船井郡八木町池上	402		35° 4' 56"	135° 32' 23"	20011018 ～ 20020208	650	ほ場整備
ふるやしきい せき 古屋敷遺跡	きょうたなべしみや まぎがいと 京田辺市三山木垣 内	342	75	35° 47' 46"	135° 47' 50"	20010917 ～ 20011204	500	道路建設
しんどういけ こふんぐん 新堂池古墳 群	ふないぐんそのべ ちようしんどうあま の 船井郡園部町新堂 天野	401	2	35° 7' 39"	135° 28' 36"	20011210 ～ 20020208	230	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
桑原口遺跡 第5次	集落	弥生後期・古墳前 期		溝・土坑		弥生土器・石器		
桑原口遺跡 第6次	集落	弥生後期・古墳前 期 平安		竪穴式住居跡・溝・土坑 掘立柱建物跡		弥生土器・木製品・ 銅鏃		
東禅寺古墳 群	古墳	古墳		主体部		鏡・土師器		
池上遺跡第 11次	集落	弥生中期 古墳中・後期		方形周溝墓 竪穴式住居跡・土壇		弥生土器 土師器・須恵器		
古屋敷遺跡	集落	平安		溝・土坑・井戸		瓦器・土師器・陶磁 器		
新堂池古墳 群	古墳	古墳		横穴式石室・木棺直葬墳		土師器・須恵器		

京都府遺跡調査概報 第104冊

平成14年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 (株)大光社
〒604-0086 京都市中京区小川通丸太町
下ル中之町76
Phone (075)222-1333 (代)